司馬遼太郎

功名が辻（二）



文春文庫

著者紹介

司馬遼太郎（しば・りょうたろう）

大正12(1923)年、大阪市に生れる。大阪外国語学校蒙古語科卒業。昭和35年、「梟の城」で第42回直木賞受賞。41年、「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。47年、「世に棲む日日」を中心にした作家活動で吉川英治文学賞受賞。51年、日本芸術院恩賜賞受賞。56年、日本芸術院会員。57年、「ひとびとの跫音」で読売文学賞受賞。58年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。59年、「街道をゆく〝南蛮のみちⅠ〟」で日本文学大賞受賞。62年、「ロシアについて」で読売文学賞受賞。63年、「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。平成3年、文化功労者。平成5年、文化勲章受章。著書に「司馬遼太郎全集」（文藝春秋）ほか多数がある。平成8(1996)年没。

文春文庫

司馬遼太郎

功名が辻（二）



文春文庫

功名が辻（二）　司馬遼太郎

し 1 18

文春文庫

476 ＋税

9784167105181

1920193004762

木下藤吉郎（豊臣秀吉）の手についた伊右衛門の出世は、遅々としてならない。そして日の出の勢いだった織田家に転機がきた。信長が本能寺で斃されたのである。跡目をねらう諸将の中で、いち早くとび出したのは秀吉であった。伊右衛門にも運がむいてきた。四十歳を目の前にして、彼はやっと大名になった、わずか二万石の……。

し 1 18

ISBN4-16-710518-7

C0193 ¥476E

定価（本体476円＋税）

文春文庫

文春文庫　司馬遼太郎作品リスト

最後の将軍―徳川慶喜―　新装版
十一番目の志士（上）（下）
世に棲む日日（一）～（四）
酔って候
竜馬がゆく（一）～（八）　新装版
功名が辻（一）～（四）
故郷忘じがたく候
歴史を紀行する
幕末　新装版
夏草の賦（上）（下）
義経（上）（下）
坂の上の雲（一）～（八）　新装版
日本人を考える　対談集
殉死

余話として
翔ぶが如く（一）～（十）
木曜島の夜会
歴史を考える　対談集
対談　中国を考える
菜の花の沖（一）～（六）　新装版
ロシアについて　北方の原形
手掘り日本史
この国のかたち（一）～（六）
八人との対話　対談集
対談　西域をゆく
歴史と風土
ペルシャの幻術師
司馬遼太郎の世界（文藝春秋編）

カバー・村上　豊

文春文庫

功名が辻

（二）

司馬遼太郎

文藝春秋

功名が辻（二）

司馬遼太郎

文春文庫

文春文庫

功名が辻

(二)

司馬遼太郎

文藝春秋

目次

功名が辻（二）

鳥毛の槍

中国征伐はすでに長期戦にわたっている。
馬揃えの翌年（天正十年）の春、信長は秀吉に三万の兵をあたえて攻撃の再興を命じた。
むろん伊右衛門も従軍した。
長浜出発にあたって、
「千代、そなたが買ってくれた馬の手前、こんどは生涯の開運の働きをするぞ」
といった。
おもしろいものだ。あたらしい馬を与えるとそういうぐあいに、気分がすっかりあらたまるものらしい。
千代も、いつもの出陣よりもいきいきして別人のようにさえみえる伊右衛門を送りだすのが楽しかった。
秀吉の大軍団が山陽路をくだって、前線基地である姫路城に入ったのは、三月の半ばである。

四月、さらに軍をすすめていまの岡山県境三石を越え、備前平野に入り岡山城をもってあたらしい前線基地とした。

攻撃目標は、備中高松城である。

「伊右衛門、大物見（将校斥候）に行ってくれぬか」

と、羽柴秀吉はたのんだ。

伊右衛門はよろこんだ。秀吉が数ある将校のなかから伊右衛門を指名したというのも、例の馬の一件でかれの名が有名になっていたからであろう。

伊右衛門は二百五十人の家来をひきつれて岡山城を出発した。

西へ三里。

備中高松城がある（高松という地名は讃岐にもあり、安芸、加賀、駿河、羽前などにもあるからまぎらわしい。この備中高松というのは、現在でこそ岡山県下の田舎町にすぎないが、当時はその城によって讃岐高松よりもむしろ知られた地名であった）。

城は三方山にかこまれた盆地の中央にあり、城兵五千。

守将は、清水宗治である。

伊右衛門は、敵城のホトリに馬を立てた。

「ほほう、これは要害でございまするな」

と、五藤吉兵衛が馬を寄せてきていった。

なるほど、要害である。

城は平地にあるが、背後に連山をめぐらし、西方には足守川（大井川）という大河をひかえ、しかも城のまわりはひどい沼地で、わずかに城の大手門までのあいだ一筋の小道がついているにすぎない。攻めるとすればこの道だけである。

伊右衛門は地図をつくる絵師を連れている。

山野を歩きまわってすっかり地図を仕あげ、三日後に岡山城にもどった。

秀吉はその地図を見ているうちに、この土木好きな男はとほうもない攻撃方法をおもいついた。

「来月は梅雨じゃな、伊右衛門」

と、思いもかけぬことをいった。

「はい、梅雨でございます」

「川の水かさがふえるだろう」

「左様でございましょうな」

「ここに土手を築き、このあたりには」と地図の山麓を指さし、「溝を掘って足守川の水を、城の方角へ流しこんでくれれば、高松城は水に浮くな」

「ははあ、浮きましょうな」

伊右衛門は、秀吉の構想の雄大さにあいた口がふさがらなかった。

（とても力攻めはむりだ）

と秀吉は思ったのである。攻めれば人の命をそこなうばかりであろう。信長は火攻め、秀吉は

水攻め、といわれる。秀吉は人命を傷つけることのきらいな男で、そういう人徳がかれに天下をとらせたともいえる。とまれ水攻めをして敵の降伏を待つほうが、敵味方とも人命の損害がすくないのである。

人夫をあつめた。

何千という人夫があつまってきた。大規模な土木工事がはじまった。

が、それだけでは戦さにならない。秀吉は城兵の士気がどれほどのものかを知るために、一度だけ戦さを仕掛けた。

二千の部隊が組まれた。

伊右衛門もそのなかに入っていた。

「殿、殿、これはむずかしい」

と五藤吉兵衛がいった。

「とても勝ち目はありませぬ。進みすぎて命を落すとなにもなりませぬ。ほどほどに進みましょうぞ」

攻撃がはじまった。

例の沼地の中の一本道を、一列縦隊で進んで城へ近づくのである。

城兵にとって、恰好な射撃目標であった。

城内の鉄砲、弓を正面の城壁にあつめ、さんざんに射た。

面白いようにあたり、織田方はまばたきするごとに十人、二十人と矢弾にあたって沼地にころ

がり落ちた。

「殿、殿、下馬されよ」

と、吉兵衛はやかましくいったが、伊右衛門はかまわずに馬上でゆく。

馬は、抜群の大馬である。自然、城兵の射撃の目標になった。

伊右衛門は馬をおりない。ここで下馬すれば、人は臆病というであろう。

(死ねばそれまでよ)

——評判を作るのが武士です。

と千代がいったことがある。評判を作るためには、つねに死を賭けねばならない。

伊右衛門はついに城壁の下にたどりついたものの、城壁の上から岩石、材木、矢などが落下してきて、瞬時もふみとどまれない。

味方の死傷は続出している。

ついに退(ひ)き鉦(がね)が鳴って総退却になった。

味方は潮のように退きはじめたが、その機を待っていたのであろう、城門がいきなり八の字にひらき、城内からどっと数百の人馬が繰り出してきた。

「吉兵衛、われらは退くな」

伊右衛門の隊だけが踏みとどまり、狭い一筋道で敵味方揉みあいの戦いをはじめた。

伊右衛門はこうなると妙に勇気の出る男で、馬を乗りまわしつつ戦ううち、あきらかに敵の一手の物頭(隊長)と思われる頭形(ずなり)のカブトに鬼の面の前立、緋(ひ)の陣羽織をはおった武者が一騎、槍

をまわしつつ伊右衛門にせまった。

「よき敵と見えたり」

と、鬼の前立がいった。

「毛利家にてさる者ありと知られる宍戸修理良近なり」

馬をあおってやってくる。伊右衛門を打ちとってあわよくばその馬がほしいらしく、カブトの下の眼は、伊右衛門の乗馬にそそがれていた。

「いやーっ」

と槍をくりだしてきた。伊右衛門はあやうく避けたが、敵はさらに繰り出してくる。そのすさまじさ、とうてい伊右衛門が太刀打ちできるような相手ではない。

敵は武者がすぐれている。

伊右衛門は、馬がすぐれている。

敵が二度目の槍を繰りだしてきたとき、伊右衛門の手綱さばきを待たず、馬が、ぐわっと地を蹴って避けてくれた。

（あっ、千代、たすかった）

と思わず感謝した。

伊右衛門はこの馬に、唐獅子という名をつけていた。面上に唐獅子のような白い巻き毛があったからである。

騎ってみるとまったくの大悍馬で、猛獣といっていい。戦場に出れば平素おだやかな眼が朱を差したように赤くなり、怒気をおび、口取りなどが油断すると歯をむいて噛もうとし、時におどりあがって抱きすくめようとする。

伊右衛門の馬術も、これだけはこの男の能力のなかで尋常ではない。唐獅子の猛気をたくみにこなしている。

もともと、馬などという動物は自分も戦っているのだとは思っていない。そこが犬とちがうところで、犬なら主人がけしかければ同類の犬に飛びかかってゆく。

馬は、主人の意のとおりに運動するだけのことだ。ところが、唐獅子には猛犬の質があるらしく、自分でも伊右衛門を乗せて戦っているつもりらしい。

「逃げるか」

と、宍戸修理は馬腹を蹴って追ってきた。

「なんの、逃げはせぬ」

伊右衛門は踏みとどまり、トットットットッと駈けさせるや、槍を突きだした。

「推参」

と相手は槍を伊右衛門の槍へからませてきた。伊右衛門はそれをきらって手もとへ引こうとしたが、そこを、

「見たか」

と、槍ではねあげた。伊右衛門の槍は天高く飛んでしまった。

（いかん）
と、ムチをあてて逃げた。逃げながら太刀をひきぬいた。
宍戸修理は、馬をあおって追ってくる。伊右衛門は逃げ、やがて手綱をひいてくるりと馬首をかえした。
「唐獅子、往(ゆ)けっ」
ムチで力まかせに叩いた。唐獅子は地を蹴り、天をつかんで駈け出した。
宍戸はひるんだ。
なによりも宍戸の馬がおびえた。
そこへ伊右衛門が太刀をきらめかせながらとびこみ、槍をたたき、槍の間の中につけ入り、そのまま宍戸の馬の胴中を唐獅子の巨体で、
ぐわぁん
と当てた。馬当て、という法である。
わっ、と宍戸の姿勢がくずれ、右足があぶみから離れた。
その浮いた右足を、伊右衛門は力まかせに蹴りあげた。
どっと宍戸が落馬した。そこへすかさず唐獅子を近づけて蹴り倒し、起きあがろうとする宍戸をさらに駈けもどって蹴り、三度目に駈けもどったとき、よろめいて立ちあがった宍戸の体を馬上からすくいあげ、首を鞍壺(くらつぼ)に押しあてて押し切ってしまった。
「山内伊右衛門、宍戸修理を討ち取ったり」

と、敵味方に大音声(だいおんじょう)をあげたとき、ふと自分の槍がない。
槍が、ない。
「吉兵衛、吉兵衛、わしの槍はどこじゃ」
と、伊右衛門は宍戸にはねとばされた槍をもとめて、そのあたりを駈けまわった。
その間、ぴっ、ぴっ、と弾丸が伊右衛門の耳ぎわをかすめ、矢が幾本となく足もとに突きささった。
「まだござりませぬか」
「ないわい」
伊右衛門は泣きだしそうになった。あの槍は柄こそ剝(は)げているとはいえ、むかし尾張羽栗郡黒田に住んでいた亡父の唯一の形見で、いわば山内家重代の槍なのだ。
「あっ」
吉兵衛は、沼をみた。遠くで葦が生えているように、槍が一本、泥につきささって柄が水面に出ている。
そうやりとりしているあいだも、城壁の上から矢が雨のようにそそいでくる。
「やむをえませぬ。この宍戸修理の持ち槍を分捕って参りましょう」
と、吉兵衛は死体のわきへ駈けて行って二間半黒塗りの槍をとってきた。
そのあと、矢に追われるようにして主従二百五十人がいっせいに退きあげた。

陣中にもどってきてあらためて戦利品の槍をみると、肝がふるえるほどみごとなものである。

銘は、来国俊。

これに梵字が一字に三王大師の文が刻まれている。

「来国俊とはおどろいたな」

織田家の家中でもこれほどの名槍をもっているのは万石以上をのぞいてはまずすくないであろう。

しかもしごいてみると、穂の長さ、柄の重さ、長さ、にぎりぐあい、ひどくぐあいがいい。

伊右衛門はこれを秀吉にみせた。秀吉も流石に驚いて、

「いや、信長様も来国俊の太刀はもっておられるが、槍はお持ちでない。かねがね欲しいとさがしておられるときいている」

「されば献上いたしましょうか」

「伊右衛門」

秀吉は苦笑した。

「それは阿諛（おべっか）というものだ。信長様はよろこばれぬ。この槍をもっていよいよ功名をあらわすこそ、侍の道だ」

「はっ」

「しかし、いい槍じゃな」

物凝りのせぬ秀吉でさえ、ほれぼれとみている。

「天下の名馬に天下の名槍、ふたつながらを得たとは伊右衛門、世にめずらしい果報だぞ。もっともそなたには千代どのという宝もあるな」

このの ち、伊右衛門は、どの戦場にもこの槍をもって出かけた。

ちなみに、後年土佐二十四万石に封ぜられてから、奇抜な鞘をつくった。

これも意匠を考えることの好きな千代の考案によるといわれるが、鞘はちょうど南蛮人の大帽子のようなかっこうをし、尾長鳥の真っ黒なしっぽを無数にあつめて作ったものだ。「土佐の大鳥毛の御槍」といえば有名なもので、徳川時代を通じて土佐の殿様の持ち槍になり、大名行列の先頭に立ててゆく。

いまは、この大鳥毛の鞘は高知城に常時展観されている。槍はたしか国宝で、山内旧侯爵家に所蔵されているはずである。

本能寺ノ変がおこった。

信長が死んだ。

が、備中高松城攻囲戦にくわわっている伊右衛門は、むろん知らない。ましてこの事件が、かれの生涯に大きな幸運をもたらす契機になろうとは夢にも知らなかった。

「吉兵衛、あれを見よ」

と、その日の早朝、陣屋で眼がさめると、眼の前の高松城を指さした。

昨日にまして水かさがふえている。

城は、水面に浮いていた。

なにしろ秀吉は、この人工湖をつくるために、高松城の西北にある門前村から東南へかけて二十六丁の長堤を作っている。土手の高さは四間。

水は、足守川を門前村で大土塁を作ってせきとめている。長堤が完成するや、足守川の左岸を切った。

どっと、城にむかって水が奔流した。

それだけでなく、城の東北の山麓を流れる長野川をもせきとめ、これを西南方角、城にむかって切り落したから、いよいよ水かさがふえた。

おりから、梅雨期である。秀吉の運のよさは、長堤が完成した直後に、三日にわたる豪雨がふったことである。

「なんと羽柴様は御運のよい人でござりましょう」

と、吉兵衛はいった。伊右衛門も同感であった。それまでは水攻めなどが果して成功するものかどうか、疑問に思っていたのだ。

「あのおひとには、天がお味方についているらしい」

というと、吉兵衛もうなずき、

「古来、日本、漢土、天竺を問わず、天下をとるひとには器量だけでなくそういうふしぎがある、ふしぎのないひとは英雄ではない、と奥方様が申されました」

「千代がそんなことをいったか」

まるで軍師のようなことをいう、と伊右衛門はおかしかった。

「侍は運よき大将をえらべ、とも申されました」

「だからわしは羽柴殿をえらんだ。ああいう人の下にいる、ということがそもそもわしに運がついていることだ。そのわしの譜代の家来のそちも、運よくうまれついた、というわけだ」

「……まったく殿は」

吉兵衛は苦笑して首をふった。さほどの才もないのに運よくできたひとだ、といいたかったのである。

「吉兵衛、あれを見よ」

と伊右衛門が半ば水没した敵城を指さした朝、京都では信長がその旅館本能寺で死んでいた。この六月二日未明、信長の部将光秀が兵一万余をひきい、にわかに京に出現して本能寺に乱入し、信長を自殺せしめたのである。

変報は、その翌三日の夜、備中の陣中にある秀吉のもとにとどいた。

伊右衛門も知らない。いや、秀吉指揮下の全軍が知らなかった。秀吉は敵の毛利方にもれるのを怖れ、その飛脚をとじこめていっさい人を近づけなかったのである。

毛利の本軍は、そのすこし前から、秀吉に対し和睦を申し入れ、条件の交渉をしていた。秀吉の外交官は黒田官兵衛、毛利方のそれは、安国寺恵瓊である。

毛利方は、「織田氏へ五ヵ国を割譲する」という条件で交渉していたが、秀吉はきき入れない。その程度の収穫では信長が承知すまいと思ったのである。

その信長が変死した。

秀吉はそれを秘し、その朝、なにくわぬ顔で土手の上に馬を立て、日課にしている戦線視察をはじめた。

秀吉は伊右衛門の陣小屋にきたとき、

「伊右衛門、そちも来よ」

と上機嫌であった。

秀吉には中間が長柄の唐傘をさしかけ、前後には百騎ほどの御馬廻役が装束も美々しくつき従い、金瓢の馬印が、さみだれのなかでにぶく光っている。

「伊右衛門、そなたの来国俊の槍、必ず武運がつくぞ」

と秀吉が、ふとそんなことをいった。その意味が伊右衛門にはわからなかった。

秀吉は、高松城の背後にいる毛利の本軍を横目にみながらゆうゆうと行く。京の変報はまだ毛利には達していないであろう。

自軍の動揺をみせてはいけない。なにもかもいつものとおりだ、ということを、敵味方に印象させるためである。

秀吉は馬上、狂歌さえよんだ。へたな狂歌である。

両川が一つになって流るれば
毛利高松藻屑にぞなる

というものだ。両川とは、毛利本軍の両大将吉川、小早川にかけている。

「どうだ、伊右衛門、よう出来たであろう」

と大得意で祐筆に写しとらせ、それを敵陣へ送りつけた。毛利の本陣はなによりもその歌の下手さ加減におどろいたであろう。

その間も、黒田官兵衛と安国寺恵瓊のあいだで和平交渉が続行中であった。黒田が秀吉の内意をうけ、にわかに毛利方の条件を容れて和平を受諾したのは、ちょうどその刻限であったろう。ただ、高松城主清水宗治の切腹だけが、あたらしい条件としてつけ加えられ、毛利方は受諾した。宗治は白装束で城を出、舟を人工湖上にうかべて腹を切った。

和議が成るや、秀吉はいそぎ兵をめぐらせて山陽道を東上した。

このひきあげは天正十年六月六日午後二時すぎである。

雨中の猛行軍であった。その夜は備前沼城で一泊し、翌日、秀吉の居城姫路までのあいだ二十里の行程を、全軍一気に駈けとおした。

しかも、この七日は終日風雨で、途中ところどころの河川がはんらんしていた。秀吉軍はそのなかを駈けた。

もはや、信長の死は全軍に知れている。その弔い合戦にゆく。光秀を討つ。されば天下は秀吉のものになるであろう。雑兵にいたるまでこのとき歴史の檜舞台に立った。功名の次第では大名

も夢ではない。みな、必死に駈けた。

伊右衛門も駈けた。運命へむかって駈けのぼってゆくような、異常な昂奮がかれとその家来を必死の走者にした。

秀吉が、備中の陣地から姫路まで一日一夜で駈けとおして城に入ったのは、八日の早朝である。かれはすぐ湯殿に駈けこみ、入浴した。入浴しながら、

「出陣はあす。みな、寝よ」

そう命じてから、湯殿へまず金奉行（会計官）を召した。金奉行は、あたふたと湯殿の揚屋（脱衣室）へ駈けこんできた。

「何事でござりまする」

と、不審げにきいた。戦さのことなら軍師、侍大将など作戦担当者をまずよぶのが当然だろう。

秀吉は素っぽだかのまま、いきなり「金はいくらある」とたずねた。

「金子が八百枚、銀子は七百五十貫でござりまする」

「それを一分一厘もあまさず分限に応じて、将士にわけあたえよ」

戦う前に総花のほうびをあたえてしまったのである。ただしこれは知行取り（将校）だけであった。つぎに蔵奉行をよんだ。

「おん前に」

と蔵奉行が平伏した。

「城中に米はいかほどある」

「八万五千石ばかりござりまする」

「それを、扶持取り（従士、足軽）にすべて与えよ。籠城などはせぬから米は不要のものだ。足軽どもの妻子が、せめてせんじ茶でもゆるゆるのめる費えになろう」

さらに、高松陣の野戦会計官をよび、

「どのくらいの金が残った」

ときいた。

「銀子は意外な出費にて……」

「どのくらいかときいている」

「わずか、十貫目でござりまする。ただし金子は四百六十枚ござりまする」

「それを早く申せ。さればその金は陣中、荷駄に積んでもってゆけ。武功によってはその場でほうびをあたえたい。そのための用にする」

秀吉は湯室から出た。

衣服をつけたときには、出陣に関するすべての指令がおわっていた。

そこへ、馬鹿がきた。馬鹿、とは参謀の黒田官兵衛がひそかにそうよんでいた山伏である。陣中にはこういう者がいる。馬鹿というのがその職で、秀吉は迷信ぎらいな男だが、軍陣の慣習としてこういう役目の者も従軍させていた。

「おそれながら申しあげまする。ただいま御出陣の日を占いましたるところ、明日の御出陣は何

とも面白からず……」
「なぜじゃ」
「二度と帰らぬ悪日、と出ましてござりまする」
「ああ、そうか」
秀吉は大笑いした。
「そちどもの世界ではそうであろう。しかしわしの世界では一段の吉日じゃ」
秀吉は横になった。ぐっすり眠った。
夜十時になって、一番貝を吹かせた。
「出陣の飯を食え」
という合図である。
伊右衛門は城内の陣屋ではね起き、めしを食った。
二番貝が夜十二時。これは荷駄隊の先発を命ずる合図である。
午前二時、将士の人数揃えを命ずる三番貝が鳴りわたった。

秀吉が昼夜兼行で摂津尼崎についたのは、十一日午前八時ごろであった。
尼崎といえば、いまは大阪湾に臨む工業地帯で煤煙天をおおっているが、当時は白砂青松の絵のような浜をもち、港があり、対岸の堺港とともに瀬戸内海貿易の基地になっている。
「この辺に禅寺はないか」

と秀吉が土地の者にたずねると、栖賢寺という寺がござりまするると答えた。
その栖賢寺で休息した。
尼崎には日蓮宗の本興寺という大寺もあり、また小城ながらも四方五丁の堀をめぐらせた尼崎城もある。
なぜ秀吉が、その宿陣にことさらに小さな禅寺をえらんだのか、わからない。想像するところ、禅宗というのは仏教各宗のなかで油っこい料理のできる唯一の宗旨である。この宗旨は、宋時代の中華料理を伝えており、いまでも「雲水料理」「普茶料理」などと称して、珍重する食通が多い。
だから秀吉は、禅寺を宿所に選んだ。寺に入るや、まっさきに、
「ニンニクはあるか」
と僧にいった。僧どもは仰天した。
よく禅寺の山門わきに石柱があり、「葷酒不許入山門」と刻まれている。葷というのは、ニラ、ニンニクのような精気のつよい野菜のことである。僧侶は、肉類、酒類とともに、そういう野菜も禁じられていた。むろん理由は、体に無用の精気を生じて女人を思い、ついには女犯の罪をおかすことを警戒したもので、そのために葷酒山門に入るを許さず、とわざわざ禁制をかくのが慣例になっていた。
秀吉はニンニクを要求しただけでなく、
「獣肉、鳥肉をも食わせよ。いまから主君の仇を討つ大戦さをやるのだ、腹中の力をつけたい」

といった。

もっとも、普通なら主君の喪中だから精進をすべきである。「不敵にも精進をしなかった」とあとで攻撃する者があるといけないと思い、秀吉はこの寺で頭をまるめてしまっている。

「拙者も頭を剃ります」

と側近の将堀久太郎がいったが、

「いやいや、オコトまで丸めずともよい。前髪をすこし切っておきなさい」

と秀吉はいった。

これが尼崎の陣中で流行し、伊右衛門も吉兵衛に命じてニンニクをさがさせ、それを食ったあげく、びんのあたりをすこし剃った。

「吉兵衛、そちも食え。新右衛門にも食わせろ。いやいや、小者、口取りにいたるまでニンニクを食っておけ」

と命じた。激闘は何昼夜にわたるかわからない。体力だけが、頼りである。

当時、砂地の排水のいい地方では、どの農家でもニンニクを栽培していた。七月ごろ菜の枯れるのを待って採り、軒下に吊るしてあったものである。

むろん、韓人のように常食にはしない。唐人のように料理の調味料には使わない。家庭薬として用いていた。そういう用途のほか、「精」がつよいために魔物が退散するといわれ、上古からこれを家の出入り口に吊るしたものである。

尼崎は砂地だから、魔よけのニンニクを吊るしている家が多い。

吉兵衛、新右衛門は、他の部隊にとられないために近在の農家をかけまわって、この魔よけのニンニクをうんとかきあつめた。

みんなで食った。

「功名まちがいなし」

というところである。

とにかく伊右衛門の隊は、秀吉麾下(きか)の他の将士よりもふんだんにニンニクを食い、鳥獣の肉を食った。

吉兵衛の働きによるものだ。

「殿、このたびの戦さは、右大臣様のあだうちというようなものではござりませぬ。天下分け目の大合戦でござりまするぞ」

と、この合戦の本質をみごとに見ぬきとおしている。

「そのとおりだ」

伊右衛門には、故主信長への感傷などは実のところ、ない。そこが戦国武士である。感傷は皆無ではないが、それより自分の功名、栄達、名誉を思う気持のほうがはるかに強い。

(世が変わるぞ)

秀吉をして天下を取らしめれば自分たちの栄達は期して待つべきである。

(千代、やはりおれはよい主をえらんだ)

もっとも千代が暗示して、信長の馬廻から一格下の秀吉の与力衆になったのだが、伊右衛門は自分が選んだ道だと思いこんでいる。とまれそれが途方もない幸運の門扉(もんぴ)をひらくもとになった。

秀吉は、この摂津尼崎栖賢寺で一泊した。

兵を休めるためではない。

摂津、河内、大和などにちらばっている織田家の大小名を誘いよせるためである。

かれらは、ぞくぞくとやってきた。池田信輝、中川清秀、高山右近。……

みな、秀吉とは禄高の大小こそあれ、織田家の部将としては同列である。

当時、秀吉の織田家における地位は、三番番頭ともいうべきものであった。一番番頭は柴田勝家、二番番頭は丹羽長秀。

要するに三番番頭にすぎない。ところが、秀吉の運のよさは、故信長が諸方に手をひろげていた多面作戦のうち、中国攻めという最大の作戦を請け負っていたことであった。

信長から付けられた部将の数が、圧倒的に多いのである。大軍団であった。その大軍団の七割までが、信長の将士である。借り人数であった。借り人数とはいえ、とにかく、一番、二番番頭よりも大兵力をもっている。

それに、京都にいるにわか将軍光秀ともっとも地理的に近く、迅速に決戦できる。

本来なら、

「弔い合戦」

は一番番頭がすべきである。が、不幸にも柴田勝家は北陸にいた。一番番頭でなければ客将であり同盟軍である徳川家康が主座にすわって諸将を招集すべきであろう。が、これも不幸にして小人数の供をつれて、堺を見物中であった。

さらに幸いなことには、秀吉の軍団はたったいままで中国で戦さをしていた戦闘隊列のままでいるのである。兵を動員したり、弾薬や兵糧を用意したりする必要がなく、そのまま決戦場にのぞめるのである。

運。

という。人は手軽に考える。秀吉は運がよかったから英雄の名を得たのだと。しかし運というのは英雄の最大不可欠の条件である。憑(つ)いている者を英雄という。才能器量があるだけでは、英雄の条件ではない。

十二日、尼崎進発。

西国街道を、二万六千五百人の秀吉の軍がひしめくようにしてのぼりはじめた。

先鋒は高山右近、ついで中川清秀、池田信輝とつづき、最後尾に秀吉の本軍一万余が進んだ。

伊右衛門はこのなかにある。

山崎合戦のおこなわれた天正十年六月中旬は、太陽暦にすれば七月中旬である。その酷暑は推して知るべきであろう。

その上に、この夏は雨が多かった。

秀吉軍の先鋒がはやくも山崎駅（宿場）に進出した十二日は、午後から豪雨が降った。

秀吉は軍令を発し、
「雨に濡れるな、在所々の民家に入って雨宿りせよ」
と、無理な行軍をいましめた。さいわい、秀吉軍の進路には人家が多い。伊右衛門らは軒を借りる農家に不自由しなかった。

秀吉が雨中行動をいましめたのは、将士の健康を考えたわけではない。足軽衆めいめいが携行している煙硝（えんしょう）に水気が含むことをおそれたのである。雨中突進しても、いざ合戦で弾がうてなければなにもならない。

ところが明智光秀の側は。――

この豪雨の十二日、行軍中であった。

光秀が、中国征伐中の秀吉が、おもいもかけず敵と講和して軍をひるがえして東上中であるというおそるべき報告をきいたのは、十日の夜であった。

「猿め、毛利に足をとられて動きがとれぬと思いしに、はや軍を旋回しおったか」

光秀は狼狽し、しかしながらこの織田家で最も秀才の作戦家といわれたこの男は、すばやく手配りした。光秀はこの日、京都の南郊下鳥羽（しもとば）から所用あって洞ヶ峠（ほらとうげ）に足を運んでいたが、すぐ下鳥羽にもどり、まず淀城を修繕させた。合戦を前に城の修繕からはじめねばならぬ光秀の心境は悲痛なものであったろう。

ところが、指折って数えていた秀吉の行軍速度が、光秀の予想以上に早く、十二日その先鋒が山崎のあたりにあらわれたのを知りあわてて全軍をあらたに部署し、進撃を命じたのである。

豪雨である。

が、手遅れた光秀は、雨であろうと風であろうと、とにかく進撃せざるをえない。

なぜならば、山城平野と摂津平野をヒョウタンの二つのフクラミとすれば、山崎の地形はそのクビレというべきものである。ここを先に制する者が、勝つ。

戦術の常識である。

光秀は、諸事行動をあせった。豪雨の中を行軍し、かつ、水かさのふえている桂川（かつらがわ）を渡った。橋などはないころである。

光秀は小舟で渡り、騎馬隊は水馬でわたり、足軽隊は全身ずぶぬれになって渡った。この川渡りで足軽どもが腰につけていた火薬がほとんど濡れてしまった。鉄砲は役立たなくなった。

「これでは戦さはできませぬ。さればここを捨て、京を捨て、近江の湖畔の坂本城まで軍を退いて後図を策しましょう」

と侍大将の斎藤利三（としみつ）が口をすっぱくして諫（いさ）めたが、光秀は、

「いや、やってみる」

といった。光秀は本能寺で信長を討って臨時政府を京都にうちたてて以来、ほとんど眠るいとまもなかった。

疲れている。

疲れほど人間を無残にするものはない。光秀はかれの最も重大な時期において、その叡智は枯れ、判断力はにぶり、果断心がなくなり、しかもかれだけでなくその兵は疲労しきっており、火

薬さえなかった。
　とまれ、十二日、光秀は御坊塚に本営を進め、諸隊は、勝竜寺、西ヶ岡などに宿営させて、
「あす、払暁には山崎に進出せよ」と諸隊に命じた。
　よく、いまでも勝負事や重要なことなどをするときに、
「ここが天王山だ」
という。勝負のキメ手の場所をいう。その場所を先に奪れば勝ちだという場合につかう。
　天王山は、山崎にある。
　予定戦場である淀川河畔を見おろす低い岡である。
　北軍は光秀、南軍は秀吉。
　その中央に天王山がある。
　光秀はこの小山の戦術価値の重大さを早くも察し、十二日の深夜、松田太郎左衛門という物頭（隊長）をよび、
「今夜中にあの山を占領しておけ」
と命じた。松田はかしこみ、兵七百に弓鉄砲三百を携行して登った。
　ところがひとの智恵というのはかわらぬものだ。同刻ごろ、秀吉も足軽大将堀尾茂助をよび、
「茂助、恰好な山じゃないか」
と気軽にあごをしゃくった。行け、というのである。茂助はかしこみ、鉄砲足軽わずか三十人

を連れて南道からのぼった。
　登山路は、南北二道ある。二道は山頂まであと一丁というところで交叉している。
　両隊、ここでかちあった。
「それ、者共、勢えっ」
と茂助は雷のような声を出した。茂助は秀吉の藤吉郎時代からの家来で、いまは丹波黒江三千五百石（のち遠州で十二万石）、石高の多少はあるが伊右衛門と同格である。
　兵はわずか三十人。
　光秀方の松田太郎左衛門の兵は七百、人数ははるかに多いが不発火薬をもっていて、鉄砲は役立たない。
　茂助の鉄砲足軽が三十挺の鉄砲をならべ、
　ぐわぐわぁーん
と射ち出した。
　なにしろ闇夜に鉄砲である。見当をつけて射っている。
　それだけに明智兵は大軍の襲来と思って動揺したうえ、将の松田太郎左衛門が茂助の最初の射撃の一弾にのどをつらぬかれ、声をもたてずに即死した。
　明智方は不運の上にも不運がかさなっており、秀吉方はその逆であった。
　山の下でこの鉄砲の射撃音をきいた秀吉は、
「すわ、はじまったぞ」

と、堀久太郎秀政の隊を走らせた。伊右衛門も走った。

「吉兵衛、ぬかるまいぞ。一番首はおそらく茂助にゆずったれど、よき者の首を獲れ」

「殿こそぬかるな」

「頼むから、尻を押せ」

と伊右衛門は年若の郎党二人に命じた。このところ伊右衛門は肥ってきて、千代から、

「殿御のお尻の大きいのは見よいものではございませぬ」

と笑われているのだ。

「押せ、押せ」

と山頂ちかくについたときは、激闘もほぼおわって明智方の占領隊は崩れ立っている最中だった。

「遅かったか」

と、伊右衛門は熊笹をかきわけ、松の根を縫って駈けた。

が、徒労におわった。

敵は山麓へころぶように逃げおりてしまった。

本格的な戦闘は、十三日午後、秀吉がその本陣を山崎に進めたときからはじまった。

この日、雲が満ちていたが、昨夜来の雨はあがっている。淀川の水かさがふえ、上流の山土が溶けて水流は赤かった。

秀吉の山崎着陣は、午後四時である。着陣までのあいだ沿道にびっしりと腰をおろしている将士どもに、気軽に声をかけ、

「みな、主の仇討ぞ。無用の功名だてをわすれ、この野で死ぬと決めよ。秀吉もそうきめておるぞ」

といいながら駒を進めた。が、この男のことだ。陽気なのである。

古来、妙なことだが陰気な大将が勝った例はまれである。

将士はみな秀吉を仰ぎ、

「筑前様、骨になっても光秀殿が首を打ちまするぞ」

と叫ぶ者もあり、叫ばぬ者はみな血色のいい笑顔を秀吉にむけていた。

言葉こそ、死ぬとか生きるとかという物騒な内容だが、真実は、

――働け働け。死力をふるって働け。されば天下はわれらがものだぞ。

という裏の意味をこめている。秀吉のカラリとした調子でそれが将士につたわってくるのである。

（やるぞ）

と、伊右衛門は武者ぶるいした。日本に武士が何十万あり、鎌倉以来何百万の武士が栄枯盛衰してきたが、いまの伊右衛門ほど幸福な機会の上に立っている武士がはたしてどれほど居たろうか。

――そこに階段がある。

駈けあがれ、と伊右衛門は自分に叫んだ。

ただ駈けあがるだけで天下取りにつながる身分になってゆけるではないか。

午後四時、秀吉は山崎着陣とともにただちに突撃命令を発した。

先鋒高山隊、中川隊は山崎街道を。

第三隊の池田隊は淀川右岸の細道（馬一頭がかろうじて通れるほどの）を進撃し、羽柴秀吉の先鋒隊は天王山付近から進み、本軍は加藤光泰隊を右翼、堀秀政隊を中央、最後尾で最大の人数をもつ秀吉直属軍は予備隊。

伊右衛門は、天王山麓の先鋒隊に所属していた。

貝が鳴り、太鼓が鳴り、銃声が摂津山城の天地いっぱいに響きわたり、武者押しの声、馬のいばえ、叫喚、まったく前代未聞の大野戦が展開された。

秀吉は後尾にありながら、

「進め、進め」

と声の嗄れるほどに叫び、どんどん馬印を進め、いつのまにか最前線近くへ出て、

「戦士たちは、背後に秀吉がぴたりと追っついてくるので、槍の石突が当たりそうで働きにこまった」

というほどに大将みずから前進した。

秀吉も、必死だったのだ。この一戦に負ければ、むろん死。勝てば思いもよらぬ日本国が獲られるのである。

「進め、進め」

という秀吉の声が、淀川畔の葦の原にすさまじく駈けまわり響きわたり武者どもの耳朶を打ち、いかなる攻め太鼓よりもかれらを勇奮させた。

「おのおのの功名、手柄は、わしがこの眼で見ているぞ。働け、働け、働け、働け」

秀吉は、天下三大声といわれたほどの大声の持主だ。雲間までとどろくかと思われた。

光秀は、御坊塚の本営にいた。

戦況を淀川の川上から眼の前に見ているのだが、床几から腰をあげようとしない。

臆病なのか。

この男は本来そうではない。疲労しきっているうえに、悪運がかさなりすぎていた。打った手が、ことごとくはずれた。たとえば大和の筒井順慶こそわが味方、と思っていたのにこちらへは来ず、かえって順慶は秀吉のほうに密使を送ったりしていた。

（もう、どうでもよい）

と思う心が、半ば去来したであろう。秀吉はやることなすこと運がつき、光秀はその逆だった。賭博の神から見すてられている。それがわかるだけに、光秀の気落ちははなはだしかった。

「猿め、調子づいてあのように来おるわ」

と、光秀は、軍の先頭に立って揺れている秀吉の金瓢の馬印を遠望しながらつぶやいた。

光秀の軍も、よく働いた。

家老の斎藤利三隊、同盟軍の近江の阿閉秀貞隊などは火の出るように奮戦しつつあり、午後四時半ごろの形勢ではどちらが勝つかわからなかった。

が、なにしろ鉄砲が射てない。火薬が濡れている。これが致命的だった。

それに天王山を奪われたこと。

この山麓から秀吉の支隊が横なぐりに銃撃してきては光秀軍をなやますのである。

ついに戦勢を決する事態がきた。

秀吉は予備隊をどんどん繰り出し、

「いまが切所ぞ、いまが切所ぞ」

と、どなっていたが、ふと光秀軍の予備隊がひどく手薄になっているのに気づき、使番（伝令将校）をもって戦闘中の加藤光泰に連絡させ、

「淀川河中の中洲ぎわを駈けて戦場を迂回し敵の後方をつけ」

と命じた。

加藤隊は、勇躍、駈けだした。

光秀は驚き、これを防ごうとしたが、もはや繰りだす予備隊がほとんどいない。

そのうち前線で激闘中の家老斎藤利三から使番が駈けてきて、

「もはや退きぎわでござる。このままでは全滅でありましょう。兵数がまだ健在なあいだに近江坂本に退かれまするように」

と伝言した。

そのうち、部将の御牧兼顕からもおなじ伝令がやってきて、

「お退きぎわのシンガリはそれがし、一死をもっておつとめ申す」

といったから、光秀はやむなく退き鉦を鳴らさせた。

軍は、どっと退却しはじめた。秀吉はその機をはずす男ではない。

「それ、功名はいまぞ」

と叱咤したから、秀吉軍は猟犬のようになって敵の背後にとびかかって行った。

いったん崩れると、軍などというものはどうしようもないものだ。たちまち四分五裂し、光秀の身辺でさえわずか七百人、それがやがて数騎をあますのみとなった。

光秀、馬を東北にかけた。

「坂本城へ」

と思ったのであろう。

十三日も、深夜になっている。光秀は左右数騎を従えたまま敵の重囲を脱出し、間道を通り、伏見の北部丘陵をすぎ、大亀谷から小栗栖の竹藪のなかの小道にさしかかったとき、落武者狩りをしていた土民の槍に刺され、死んだ。

さて、伊右衛門、敗走の敵を追っている。

「馬鹿な話さ」

と、長浜の屋敷に帰ってから伊右衛門は千代にいった。

娘のよねは、よちよち歩きできるようになって可愛いさかりであった。

千代はよねを抱きながら、

「どういうわけでございます？」

と、合戦の模様をきいた。

「どうもこうもない。わしは槍をかかえて夢中に駈けまわっていただけで、気がついてみると戦場はお味方ばかり、合戦は済んでいた」

(そういう頭の人なのだ)

と、千代はやや失望しながら思った。伊右衛門は頭の素質のわるい男ではないが、全体の中の自分というものをするどく見きわめようとしない。

だから、その瞬間その瞬間において、自分がどうすべきであるかがわからない男なのである。もっとも人の九割九分九厘まではそういう人間ばかりであるが。

(しかし、それでは一国一城のあるじになれませぬ)

千代ははがゆかった。

「合戦は、お味方の押し、押し、押し、でな、お味方の人数の中でもまれているだけで槍働きもできず、よき敵にもめぐりあえなかったわ」

(千載一遇のときに)

千代は口惜しがった。男として山崎合戦ほどの天下分け目の舞台に勝利軍の側で登場するなど、ありうべからざる好機といっていいほどなのに、伊右衛門はただ体を動かしていたにすぎなかった。

(もしわたくしが男ならば。——)

千代は、くやしい。千代がもし伊右衛門のそばについておれば、もっと頭のつかい方があったであろう。

「まあ、惜しい」

千代は、戦況と地形を逐一きいた。

とにここにこした。

なぜいちはやく淀川の葦の間を縫って敵が薄手の左翼を衝かなかった。

光秀軍の崩れはもっと早かったであろう。伊右衛門の名は天下にとどろいたであろう。

「いや、千代、左様なことをそなたはいうが、わしは淀川べりにもっとも遠い天王山の山麓にいた。山麓から横なぐりに敵へ突いて出る隊の中にいたのだ」

自分の創意を加える余地のない場所に自分はいた、と伊右衛門は弁解した。

「それはやむをえませぬな」

千代は、さからわない。

「しかし、乱軍のなかでも御坊塚の光秀殿の馬印はみえたでございましょう」

「みえたとも。それを目あてにわれわれは全軍押して行ったのだ」

(馬鹿なこと)

千代はまったく、なぜ自分が男にうまれなかったのか、と口惜しいほどである。みな阿呆のよ

うに光秀の本陣をめがけて押して行ったとは、なんとばかであろう。

「いざ敗軍となれば光秀殿はどこにお逃げなされます」

「知れたことよ、近江坂本か、丹波亀山かの二つの城であろう」

「いずれにしても京は通れませぬ、小栗栖の間道を通るのはちょっと考えてもわかることではありませぬか。なぜ、先に駈けてその間道をお抑えなさいませなんだ。されば土民に御大将の首をとられずとも、旦那様の手でとれたはずでございます。戦さは人の波と共に駈け退きしていては、名は立てられませぬ」

光秀はとにかく十数日、天下をとった。

それを倒したのは秀吉で、なんと幸運な男であったことか。

率いた部下は、自分の家来はその全軍の何割ほどにもあたらず、ほとんどは信長の番頭どもを率いて光秀を討った。秀吉自身、信長の三番番頭にすぎない。

ところが山崎の野で光秀を討つや、光秀が天下取りであったために、討った秀吉も天下取りのような、一種の立場を得た。

山崎合戦がおわって山野にまだ硝煙がのこっている刻限、秀吉は戦場のあちこちで疲労をやすめている将士をねぎらっているとき、そこに鹿の前立(まえだて)の一将が、路傍の岩に腰をおろしてめしを食っているのを見かけた。

摂津茨木(いばらき)城主中川瀬兵衛清秀である。

信長の部将で、そういう点では秀吉とは同格であったが、とにかくこの合戦では秀吉軍の先鋒を駈けて働いた。

要するに秀吉とは朋輩なのだ。

ところが秀吉、この日から自分が天下のぬしという顔をした。演技でも何でもそういう顔を出来るかできないかで、秀吉の一生の政治生命はきまるわけであった。

秀吉は戦場巡視に、馬を使わなかった。

輿(こし)をつかった。もはやかつての信長気取りである。

中川瀬兵衛の前に通りかかるや、輿の戸をすこしくあけさせて、

「瀬兵衛、骨折り」

とのみ言い、打ち過ぎた。

瀬兵衛は腹が立って、箸を投げすてた。

「ちえっ、あの男、もう天下を取ったつもりでいやがる」

といった。

その声、秀吉の耳にきこえていた。聞こえていたが、平気である。この一日の芝居が、ひとをして、

――ああ羽柴様は天下取りになった。

と錯覚させるか、それとも、

――三番番頭が、主人の弔い合戦をしたことよ。

という仇討というごく感傷的な一事件の印象をもたせるか、どちらかのわかれ目であった。

秀吉は巡視しつつ、織田家時代の同僚にあうとかならず名前を呼びすてにし、

「ご苦労であった」

とか、

「働き、古今に比類がない」

とか、主人がいうような言葉と態度をふりまいてまわった。

みな、

(猿め)

と腹をたてた。高山右近のような寡黙な男でさえ、

(逆上しおったか)

と側近の者に吐きすてたという。

が、こうなれば秀吉はずうずうしい。このにわか主人の演技で押し通した。

信長の家来であったころ、あれほど信長に対してはむろんのこと、同僚に対しても腰がひくく、動作の軽々しすぎる男が、この日から人変りがした。参謀の黒田官兵衛が、

「そうしなされ」

と智恵をつけたのだともいう。

伊右衛門はその話を、千代にした。千代は眼をまるくした。

(やはり見込んだとおり天下を取りなさる)

機微を見る眼、演技力、すべてが秀吉に備わっていた。

要するに、伊右衛門はこれほどの大合戦でなんの功名にもめぐまれなかった。

秀吉が論功行賞をしたとき、

「伊右衛門は、いかがであった」

と、左右にわざわざきいたくらいである。

雑兵首の幾つかを得たのみであった。

ところが、秀吉は、この山崎合戦の直前、まだ中国征伐の軍旅にあるころ、伊右衛門について何でもないうわさをきいたことをこのとき思いだした。

東播州の三木城包囲戦のころ、ある夜、秀吉の直属部隊が大根畑の多いあたりに露営した。

そのころ兵糧の輸送が一時とだえていて、将士は飢えになやんだ。

さいわい、大根がある。

五藤吉兵衛は陣中で大焚火(おおたきび)をし、大根をほうりこんで焼き大根をつくり、その一本を伊右衛門にさしだした。

「食べぬ」

と、伊右衛門はいう。

なにしろ、戦国武士にはめずらしく行儀のいい男で、めしを食うときも箸さきをわずかに濡らす程度で食う主人だから、吉兵衛は、

「殿は大根は下物と思いなされて、食されざるや。戦陣にあっては、時にねずみ、いたちの類まで食い申すぞ」

と、声をあらげていった。

「そうではない」

伊右衛門は口をつぼめていった。

「大根を食うと、口臭がにおう。筑前様（秀吉）のお前に出てもし匂うようなことがあっては申しわけない」

こういう武士も、この時代めずらしかった。

退屈な包囲戦だから陣中はうわさに飢えている。このうわさが諸陣にひろがり、ついに秀吉の耳に入った。

（可愛い男よ）

と秀吉が思ったのもむりはない。さしたる武辺者ではないが、伊右衛門のとりえはそういうところだ、と秀吉はみていた。

それを、山崎合戦後の論功行賞の時に秀吉は思い出し、

「伊右衛門は槍さきの働きこそなかったが、天王山から光秀の先鋒へ打ちかけた鉄砲は、伊右衛門の足軽の弾がもっとも当りが多かったように思われる」

というあいまいな理由でその働きをほめ、石高は三千石、わずかに加増した。

そのかわり、その居住地である長浜の地をあたえた。

もはや、伊右衛門と千代は長浜に屋敷をもつというだけではない。

領主である。

しかも、長浜にはかつて秀吉が信長の大名に取りたてられた当初に築いた城がある。

その城に入れてもらった。

もっとも、城主ではない。

城番である。

とはいえ、石垣の上から、琵琶湖と近江平野を見おろす城住いの身分となった。

「千代、とうとう一城のぬしになったぞ」

伊右衛門は無邪気によろこんだ。

が、三千石、城番。要するに秀吉の役人にすぎない。

最初の夢の一国一城ではないのである。

（この人は、まだまだ作りあげてさしあげねば、そこまではゆけぬ）

山内一豊が、多少とでも英雄の名に値いするとすれば、すべて千代の作品であった。その千代は、山崎合戦での秀吉の言動、諸将の動きで多くを学んだ。これが後年、関ヶ原前夜に生かされるとは、千代自身も予言者でないため、夢にも思わなかった。

とまれ、戦後の論功行賞で、伊右衛門は、長浜三千石になった。

秀吉の所領が、光秀の旧領丹波、近江を合併したため飛躍的に大きくなっているのだが、その

中級将校である伊右衛門に対しては分け前がすくなかった。
実のところ、山崎合戦での伊右衛門は、
（あわよくば万石の大名に）
と念願したのである。
それほどの働きが、伊右衛門になかったことはたしかであった。
千代は、ある日、ふと憂わしげに、
「天下の形勢はどうなってゆくのでございましょう」
と、伊右衛門にきいた。伊右衛門などより千代のほうがはるかにカンがいいのだが、こういう会話の形式が、千代がつくったこの夫婦の習慣になっている。
「むずかしいところだ」
すぐ天下が秀吉の手に落ちた、というぐあいには行かない。
信長の息子たちがいる。足利以前の泰平のころの相続法でいえば、信長が七分どおりまで築いた「天下」は、その息子か孫のいずれかが相続することになろう。
が、戦国の世だ。
わからない。
東海地方には、織田家の同盟者徳川家康がいる。北国には一番番頭の柴田勝家がいる。また信長からとくに信任されて、関東総督ともいうべき任についていた滝川一益が、その本領の伊勢にもどって嵎を負う猛虎のような姿勢をとっている。

ただ、秀吉に対しては、二番番頭で信長から江州、若狭の半国ずつをあたえられていた丹羽長秀が味方となった。
とまれ、織田家の跡目をたれにするかを議する会議が、諸将参集の上、清洲城でおこなわれた。
秀吉は、信長の直孫三法師という幼童を推戴しようとし、柴田勝家はこれに対して信長の第三子信孝を推していた。
このほか、信長には伊勢の北畠氏のあとをついだ信雄という第二子がおり、これはすでに織田姓を名乗っていないため、失格とされていた。ちなみに信長の長男は本能寺ノ変で戦死しており、三法師はその子である。
激論のすえ、秀吉案が勝った。
秀吉は、三法師君の傅役ということになり、この幼童の領地として近江のうちで三十万石が割かれることになった。むろんこの三十万石は秀吉があずかるわけだから、かれ自身のものといってもいい。
他の織田家直属の領国については、諸将が分けあって「あずかる」ことになった。むろんそれは名目で、分け取りといってもいい。
この分け取りも秀吉に有利にすすみ、これがため柴田勝家が激怒し、ついには秀吉を謀殺しようとさえした。
秀吉は、勝家の機嫌をなだめるために、なんと、長浜一帯の領地と長浜城を勝家の飛び領地として譲ってしまったのである。

勝家は越前が本拠だから、中央に進出するには非常に不便であった。足場を近江長浜にもつというのは、いやであろうはずがない。
これには、伊右衛門は驚いた。
たったいま得た長浜での知行地を、はやばやとうしなうはめになったのである。
「伊右衛門、余儀ないことでこういうことになった。播州印南へ移ってくれぬか」
と秀吉はいった。

伊右衛門は、ぼう然として屋敷にもどって、その旨を千代にいった。
「長浜から播州に移れとのことだ」
千代は明るくうなずいた。
「よいではありませぬか」
「そなたは、いつもそういうのんきな顔をする」
播州に居住していては、いざ合戦のときにとても間にあわない。こんどの合戦は、早晩、北国の柴田勝家との間におこなわれることになるであろう。予定戦場は北近江から北国にかけての街道ぞいと思われる。それが秀吉にとって第二の天下分け目の戦いになるわけで、播州に居てはその合戦に間にあわない。
(そのとおりなのだ)
と千代も思うのである。たしかに伊右衛門には、軽微な不運がつづいていた。しかし、これを不運と思うのは愚者である、と千代は考えている。運、不運は、「事」の表裏にすぎない。裏目が出ても、すぐいいほうに翻転できる手さえ講ずれば、なんでもないことだ。
「知行地にはたれぞ代官をやり、お屋敷は京都に頂くようおねがいすればよいではありませぬか」
あっ、と伊右衛門は驚いた。
なるほど、妙案である。秀吉の当分の策源地は京都であろう。そこに屋敷をもつというのは、つねに秀吉の指令の下で働ける態勢をとっていることだ。
が、この千代の妙案は、ちょっと現実的でないのは、信長時代に先例がないのである。信長はその晩年、京都に居ることが多かったが、侍屋敷まで作ろうとはしなかった。
「先例がないからこそ、お願いすればおもしろうございましょう」
と千代はいった。
千代は見ぬいている。秀吉は、京都に侍屋敷を持ちたいはずだということを。そうでなければ、信長の本能寺の奇禍の二の舞をこんどは秀吉が受けるかもしれないし、そういうことがないにしてもいざ出兵となれば軽快に動員できるではないか。
伊右衛門は、願い出た。
秀吉はそれどころのさわぎではなく、対宮廷対策や、旧織田家の諸将への外交で毎日体が二つあっても足りない身だったが、伊右衛門の申し出に、ハタと膝を打った。
「それは妙案じゃ。しかし伊右衛門、それはしばし待て、わしは京よりも大坂を考えている。大坂に巨城を築き、大小名の屋敷を集中させようと思う。それまでのあいだ、安土城下の空屋敷に

でも入っていてくれ」

千代の案は、京と大坂の場所のちがいこそあれ、秀吉の構想と一致していた。秀吉は、大名小名屋敷を大坂城下に集中しようと考えていた。それだけに伊右衛門の着想に感心した。

(これは大名になれる男だな)

とちらりと思ったのはこのときであった。

(ただ、大軍を指揮する能力がない)

それが、伊右衛門の欠点であり、いまなお小部隊の長にすぎないのは、それが理由である。

千代は、安土城下に移った。

移ると、またまた、美濃の実家の不破家に使いを出して、良さそうな若者を伊右衛門に仕えさせるようにたのんだ。

家来の数がふえた。(やがてきっと柴田様とのあいだに大合戦がある)と千代は見ていたのである。

ところが、秀吉の働きは、あまりにめまぐるしい。

その一将校にすぎぬ伊右衛門などは、あっと思うことばかりがつづく。たとえば秀吉の命令で長浜の旧領から、安土城下に引っ越して一ト月目もたたぬ天正十年十二月のはじめ、

「長浜を奪取せよ」

という軍令がにわかにくだった。

柴田勝家に外交上の配慮で譲ったばかりの長浜城をこんどは軍事力で奪ってしまおうというわけである。伊右衛門も従軍した。

とにかくおどろいた。

(なんと、長浜という土地はわしには縁のふかいことだ)

よくよく考えてみれば、かつて千代の亡父若宮喜助がこの土地に住んでおり、千代もこの長浜で生まれた、ということからしてそもそもの奇縁である。

その後、伊右衛門と長浜との宿縁がつづきすぎるほどつづいている。のちに伊右衛門は、一時、この長浜城主になるのだが、それを思えばさらにふしぎな土地である。

「伊右衛門は長浜の地理にはあかるいはずだから、先鋒に加われ」

と秀吉もいってくれた。

長浜城包囲は、秀吉の柴田征伐の最初の手はじめであった。

長浜城は、琵琶湖の東北端にある。ここから北走する街道が出ており、それをたどれば越前へゆく。

越前は、いま、豪雪にとざされている。越前と長浜城をつなぐ北国街道の峠、峠も、雪にとざされて人馬の歩行をゆるさない。

秀吉はそこに眼をつけたのだ。

だからこそ、長浜城攻略の季節を酷寒期の十二月に選んだ。

長浜城は、雪のために本国からの救援がなく、孤城の運命にある。

この城の守将は、柴田勝家の養子柴田勝豊だった（勝家には実子がなかった）。

秀吉は、妙な男だ。

わずかこれほどの小城を攻めるのにみずから大軍を率いて長浜付近に布陣し、そのくせ一発の弾もうたないのである。

みずからは、長浜にほどちかい佐和山城に入り、毎日、茶ばかり飲んでいた。

（殺さずに奪ってやろう）

と、秀吉は工夫をこらしていた。この男の生涯をつらぬいての戦争思想で、敵味方をできるだけ殺さずに城や国をとるのが、名人であった。

――羽柴様は人を殺すのがお嫌いなんだ。

という評判が、当時すでに天下の常識になりつつあった。

信長とは、逆である。信長は、伊賀攻め、叡山攻め、伊勢長島攻めで示したように、地に人間を一人もとどめぬというはげしい殺戮戦で国を奪って行った。

秀吉は、身をもってそれを見てきている。かれは信長を敬慕するところが多かったが、このやりかただけは、性格にあわなかった。

――秀吉は敵を殺さぬ。殺さずに、外交をもって降参させる。降参してきた敵には、命を保証するばかりか、旧領を与える場合が多い。

天下は、そう見た。だからこそあらそって秀吉の敵も秀吉の味方になり、あっというまに天下のぬしに押したてられてしまったのである。

ある雪の朝、秀吉は各陣地を見まわり、伊右衛門の陣にきた。

「まだ戦さははじまりませぬか」

と伊右衛門がきくと、秀吉は、

「とっくに人の心の中ではじまっている」

と、なぞのようなことをいって笑った。

伊右衛門は、秀吉のふしぎな城取り法をこの長浜合戦でまなんだ。

城将の柴田伊賀守勝豊は、養父の勝家に対して恨みを抱いていることを秀吉は知っていたのである。

当時、秀吉だけでなく、織田家の家中でたれひとり知らぬもののない挿話があった。

ある年の元旦、勝家は一族、重臣の拝賀を受けた。

酒宴になった。

小姓が進み出て勝家にカワラケを捧げ、酒をついだ。

勝家はまず飲み、その干したカワラケを、ひょいと佐久間盛政（玄蕃）に与えた。

そばにいた養子勝豊の顔色がかわった。当然順序からいえば自分にこそ一番にくださるべきものではないか。

以前から、不満がつもっていた。

なぜといえば、勝家はオイの佐久間盛政を養子の勝豊以上に愛し、盛政に尾山城（金沢城）を与

えたばかりか、加賀の国の二郡を知行させるという破格な待遇をあたえた。
勝豊は、心が平らかでなかった。あるいは養子の自分をさしおいて柴田家を継がせるのではないか、と。
そのやさきに、この杯の順である。
勝豊、かっとなり、進み出て杯を受けようとする佐久間盛政の袖をおさえ、
「おぬしではない。わし以外にそのお杯、たれが飲むべきぞ」
と争い、杯を養父勝家の手から奪った。
勝家は、不快そうにだまり、拝賀の座は一時に白けた。
この一件から、勝家、勝豊の養父子の間柄はぬきさしならぬほどに冷えた。
秀吉はそれを知っていたから、まず勝豊の家老に使いを出して降伏をすすめ、ついで勝豊自身にも使いを出した。
条件はいい。
長浜城はそのまま勝豊を城主とし、所領も安堵する、というのである。
「だから、開城してくれ」
と、秀吉の使者たちはいった。要するに味方になれ、ということであった。
むろん、秀吉の大軍をもってすれば、長浜城ぐらいの小城を陥落させるのはわけはないことであったし、その攻城法も、秀吉はたれよりも知っている。信長の部将時代、かれは姫路城主になる以前は、この長浜城主だったのである。城の弱点は知りぬいているのだ。

が、秀吉には、別に目的がある。
かれは、
「羽柴筑前守は人を殺さぬ」
という評判を、天下に立てたかったのだ。長浜城をその好例にしたかったのである。
城将勝豊は、会議をかさねたすえ、ついに養父を裏切って秀吉につくことに決した。
なぜならば、たとえ戦ったところで、積雪のために本国から援兵が来るはずがないのである。敗死するより、生きてしかも現在の身分のままでいるほうがいい。勝豊だけでなくその家老以下、すべての心境だったであろう。
長浜城は、開城した。
(なるほど、こういう手があるのか)
と、伊右衛門はあきれる思いであった。伊右衛門がながらく仕えてきた信長ならこういうことはしない。石垣を崩すばかりにして攻めとってしまい、城将以下おもだつ者すべてを殺さずばやむまい。
政局、戦局は、転々した。
秀吉は、北国の雪が融けて柴田勝家の大軍が南下してくるまでのあいだ、勝家の同盟国家のうち最大なものを潰そうとした。
その敵は、伊勢にいる。

信長の大番頭のひとりだった滝川一益で、伊勢長島城が本拠であった。
天正十一年二月、秀吉は総軍七万五千をあげて伊勢路に入り、亀山城をかこんだ。
亀山城は、鈴鹿連峰を背負っている。
城将は、滝川の部将佐治新助で、非常な戦さ上手とされていた。
伊右衛門は、最前線に部署された。その日ちょうど千代からするめ三荷がとどき、伊右衛門はみなにひときれずつ裂きあたえた。
千代の使いの小者に、
「手紙はなかったか」
ときくと、ございませぬ、という。
「されば、ことづて（伝言）は？」
「べつにござりませなんだ」
（妙だな）
と、伊右衛門は、かえって気をさまざまにまわしてしまった。
（さては千代め、山崎合戦でさしたる功もなかったため、この陣で必死に働けということを暗にさとらせようとしたか）
実のところ、この滝川攻め、ついで柴田攻めがおわれば、天下分け目の大合戦はほぼおわってしまう。この瀬戸ぎわの合戦で功名をたてねば、ついに一国一城のあるじになる機会はないであろう。

（千代は、それを申したかったのか）
伊右衛門は、もっともげにうなずいたが、ありようはそうではない。
千代は単に、若狭からするめを売りにくる者があったので、買い送ったにすぎない。
「みな、この城攻めは、伊右衛門一世一代の運だめしのつもりゆえ、火の出るように働いてくれ」
と、伊右衛門はいった。
五藤吉兵衛、家来一同を代表して、
「申されずともわかっております。われら一同、骨になるまで働き申そうわ」
「もっとも、もっとも」
と、祖父江新右衛門も和した。
この一団は、さほどの豪傑がいるわけでもなく智謀あふれるような人材がいるわけでもない。
どちらかといえば、平凡な連中のあつまりである。
ただ一つだけ、伊右衛門には妙な人徳があり、
（このあるじをたすけねば）
という気持は、他の大身武士の家来以上にかれらはつよかった。
着陣した翌日、手はじめの寄せ（攻城）があったが、さほどのこともなくおわった。
城方は城門に入り、秀吉方は陣所々々にもどって、その日が終わろうとした。
どの部署でも、兵糧を炊ぐ炊煙があがりはじめている。

兵気がゆるんだ。

伊右衛門はそれこそ一世一代の智恵をしぼり、その夕は兵に炊事をさせず、腰兵糧をつかわせ、かつ陣列を解かず、戦闘準備のまま待機させた。

「城将佐治新助というのは、戦さの老巧な男だ。この夕、もう一度押し出してくるにちがいない」

と思ったのである。

果然、伊右衛門の予感があたった。

城方のなかで、まだ城門に入らずに城外に野戦陣地を布いていた五十騎ばかりが、にわかに夕闇にまぎれて、突っこんできたのである。

「それ、敵襲ぞ」

伊右衛門、馬にとび乗り、カブトの緒をしめた。

幸い、といっていいかは別として、味方の諸陣とも、みなカブトをぬぎ、馬の腹帯をゆるめ、鉄砲の火縄を消してしまっている。

山内伊右衛門隊二百人だけが、戦闘準備をとっていた。

伊右衛門は、まっさきに駈けた。こうなると、平素の柔和さに似合わず人並以上の蛮気の出る男である。

「者ども、ぬかるな」

「殿こそおぬかりあそばすな」

と叫びながら追いついてきたのは吉兵衛と新右衛門の二騎であった。

負けじと徒歩の鉄砲、弓、槍の足軽衆が、必死に追いついてくる。

「鉄砲、前へ前へ」

と、伊右衛門の指揮は、この日にかぎってみごとなものだ。事を期していただけに指揮にゆとりがあり、声にも張りがある。

「吉兵衛、出すぎるな、鉄砲を前へ、弓はそれにつづけ、槍組は隊伍をみだすな、槍々の隙間をつくるな、何某、馬の腹帯がゆるんでおる、何某、駈けすぎて鉄砲の出足の邪魔をするな」

やがて伊右衛門の鉄砲足軽が横一列にならんで進み出ると、いっせいに折り敷いて敵の騎馬隊を射ち白ませた。

射撃がおわると、さっと退却する。当時の鉄砲は装塡(そうてん)に時間がかかったために、射ってすぐ退かなければ、騎兵の馬蹄に踏みにじられてしまう。

「弓、前へ。射よ射よ」

伊右衛門がりんりんと叫ぶと、弓組は弦音(つるおと)をそろえて、一時に射かけ、さらにもう一矢つがえて射ると、これも退却した。

敵は、弾丸と矢で、隊列が乱された。そこへ伊右衛門の騎馬隊、槍足軽が、おめきあげながら攻めかかった。

その光景が、山上の秀吉の陣地から手にとるようにみえるのだ。

「おお、伊右衛門め、やるわ、やるわ」

と手をうってよろこんだ。

他の諸陣はまだ戦闘準備ができずにうろうろしているし、両翼や後方の陣地などでは、突如おこった銃声が何を意味するものか、それさえもしらなかった。

伊右衛門、敵陣の中に槍をふるって突入した。

敵は、さすが奇襲部隊だけに一騎当千の士がそろっていたが、伊右衛門はひるまず、無我夢中で槍をふるった。

何かが、のりうつったような勢いである。

槍で突き伏せ、柄でなぐり落し、さらに群がる敵の足軽どもを馬で蹴散らした。さすが、千代が購めてくれた馬は、このときこそ、

(よくぞ購めた)

と叫びたくなるほどの働きを示した。

敵は伊右衛門の突進に驚き、攻守ところを変え、ついには総くずれになった。

「追え、追え。一騎も城内に帰すな」

と伊右衛門は、声のかれるほどに叫び、追いすがっては討ち、追いすがっては追った。

(千代、わしは運がつきはじめたぞ)

伊右衛門は、千代というかれの運の神にはるかに拝みたいほどの気持であった。

山上の本営では、羽柴筑前守秀吉が、背後に金瓢の馬印をたて、床几に腰をおろして、伊右衛

門の働きを見ている。

「やりおるわ、やりおるわ」

秀吉は床几から腰を浮かし、手をたたき、頬っぺたを掻き、眼をこすり、洟水をすすりあげ、いそがしいよろこびようだ。

「それ、伊右衛門、もう一押し」

むろん、伊右衛門には聞こえはしない。

とにかく秀吉がよろこんだのは、相手がたとえ小部隊とはいえ滝川軍から突出してきた最初の攻撃に、秀吉軍が一瞬でも崩されるのは、戦さの幸先がわるい。もし伊右衛門が居なければ、息を入れている状態だった秀吉軍の一角は一丁も二丁も崩れ立ったであろう。

士気にかかわるところだった。

それにしても、秀吉のよろこびようは、気ちがいじみている。

ついに伊右衛門隊が、敵の奇襲騎兵を城門まで押しかえしてしまったとき、すぐ使番(伝令将校)の尾藤勘右衛門をよび、

「すぐ、伊右衛門の陣へ駈けおりよ、駈けて行って、伝えよ。勘右衛門、早う行かんか」

「な、なんとお伝え申すのでござりまする」

「そうか、申さなんだか」

と床几に腰をおろそうとすると、うっかり尻の置き場所をまちがえて、すすきの中にころがってしまった。

「こ、この通り申し伝えよ」
「どのとおりでございます」
このあたり、秀吉の言葉を古い記録の表現法で伝えると、
「やよ、よいか。筑州（秀吉）大よろこび、踊りあがり踊りあがり踊りあがり、とうとう尻餅をつき候ぞ」
これが秀吉のうまさだ。かれの場合、手紙にしろ、会話にしろ、表現が形式ばらず、よろこびを伝えようとするときは、自分の心の躍動をナマに眼にみえるように無邪気に語りきる。
こんな表現でほめられれば、伊右衛門ならずとも、秀吉のためには命も要らぬという気持になるであろう。
それに、秀吉のほめ上手は、間をおかぬことだ。即座にほめる。
そこに妙機が生じ、ほめられた者はいよいよ調子づいて次の合戦にはいっそうに働いてしまう。
使番尾藤勘右衛門が伊右衛門の隊のなかに駈け入り、大声をもって秀吉のナマの言葉をつたえた。
この尾藤は、大音勘右衛門といわれたほどの大きな声の男だ。
まわりの諸陣までリンリンと鳴りひびくほどの大声でいった。
伊右衛門、血槍をかかえたまま馬上であいさつし、他の吉兵衛、新右衛門らは、槍をあげ、鉄砲をあげ、おどりあがってよろこんだ。
「殿、殿、あの君（秀吉）ならば死に甲斐がござりまするぞ」

と、吉兵衛は、しまいには泣きだした。
「吉兵衛、よう言うた」
と、新右衛門も抱きついた。戦国の郎党などは、可憐なものだ。
伊右衛門は兵をまとめ、しずしずと山麓の自軍へひきあげた。
（千代、まずは成功じゃ）
その翌日、秀吉はひしひしと城をかこんで、さらに諸隊に命じ、城壁、城門のそばに、仕寄場を築かせた。
仕寄場というのは、攻城用の足場のことである。
城のまわりに柵を打ったり、ときには城壁の高さの井楼を組みあげてそれを接近させ、城内に乱入する攻城装置のことだ。
伊右衛門の隊は、城のタツミの櫓の石畳の下に土塁を積みあげた。
「殿、きのうあれほど筑州様（秀吉）からおほめを頂戴した以上、きょうは全軍にさきがけて一番乗りをせずばなりますまいぞ」
「そのとおりだ」
「殿、殿、殿はへたじゃな。そういうときは筑州様のように、われら家来の胸が躍り血が狂うような言いかたで言いなさるのが、上手の大将と申すべきではありませぬか。――そのとおりだ、では家来はよろこんで死ぬ気にはなれませぬぞ」

「どういえばよい」

と吉兵衛は口うつしに伊右衛門のいうべきことを言いだしたのである。

「吉兵衛、よう申した――」

「殿、よろしうござるか、こう申されよ、わしこそおのれに死に遅れはせぬぞ、おのれとわしとは主従とはいえ幼いときから親がわり同然になってよう育ててきてくれた。きょうの合戦は、わが武門が興るか興らぬかの瀬戸ぎわ、わしが死ねば供養をたのむ、吉兵衛、そちが死ねば永代に供養し、子々孫々、かならず重用してそちの働きにむくいるぞ、とこう申されよ。武士と名のつくほどの者なら、主人からこう申されれば、命も要らずに働くものでござるわ」

「なるほど」

「なんと威勢のわるいお返事であることよ。殿は正直にましますゆえ、大将の演技(ふり)ができぬ。せめて、――吉兵衛、そのとおりぞ、とわしが手をおとりなされてはどうじゃ」

「吉兵衛、頼む」

と、手をとろうとした。

吉兵衛は笑いだし、

「殿はほんにお正直。そのお素直さがまたとない財産(しんしょう)じゃ。殿」

吉兵衛は、すこし酔っている。いよいよ一番乗りを覚悟した以上、自分の臆病心をわずかでもねむらせるために酒を椀に二杯、息もつかずにのどへ流しこんである。武者がよくやるところだ。

「殿、殿のお正直はいい。しかしそれだけでは国主にまではなれませぬ。もし十に一つ、吉兵衛がこの合戦で死にましたるときには、この言葉、よう覚えていてくだされ、何によらず、外での出来事は奥方様にお語りあそばすこと」

「あれは婦人だ。外でのことをいちいち知っておく要はない」

と、伊右衛門は大きく出た。

「それはつねの婦人のこと。奥方様はどうやら、おもしろい女性(にょしょう)でござる。男でも思いもよらぬ御意見をおもらしあそばす。いままではこの吉兵衛が、舌たらずながらも、世間のこと、家中のこと、天下のことなど、聞き知り及びたるかぎり申しあげておりました」

(ははあ、そうであったか)

千代が、屋敷に居ながら妙に世事にあかるかったのは、そのせいであろう。

吉兵衛はあす、山内家興隆のために、全軍の先頭に立って城に入るつもりらしい。

攻城用の土俵を積みあげた「仕寄(しより)」が、たかだかと出来あがったのは、夜が白むころであった。

作業がおわると、

「殿、御免」

と、吉兵衛がまっさきにとび移った。さらに祖父江新右衛門がはいのぼり、伊右衛門の郎党百数十人が、われ先にとのぼりはじめた。

伊右衛門も、のぼった。

「わが尻を押せ、尻を」

と、伊右衛門は必死にさけんだ。具足が重く、体がうまく持ちあがらないのだ。

やっと土俵の山の頂上まではいあがったとき、吉兵衛はもう石垣にとりついている。

「殿、遅れなさるなよ」

と、吉兵衛はふりかえってわめいた。

伊右衛門は石垣にとりついた。ちかごろ肥ってきたせいか、むかしのように身がかるくない。

「吉兵衛、待て待て」

「なんの、戦場に待てしばしがござろうかい」

石垣にとりついているのは、むろん伊右衛門隊だけではない。

諸隊はみな、とりついている。

それを城方は、城壁の上から岩石を落したり矢を射おろしたり、鉄砲で斜めから射撃したりして、こそげ落すようにして落してゆく。

弓なども、上から下をねらって、

びゅっ

と弦音みじかく射おろすと、カブトのてっぺんを射ぬくほどのすさまじい力をもつ。

伊右衛門の郎党も、左右でつぎつぎと殺され、のこる者はつい臆して、わざと落ちたり土俵のかげにかくれたりして、命を惜しむ者が多い。

(わしの生涯の正念場ぞ)

と、伊右衛門は勇を鼓し、槍の柄に手拭を巻きつけて足場をつくり、槍を石垣に立てかけ、ゆっくりとのぼりはじめた。

奥歯が、がちがち慄えている。

石が、いくつも肩をかすめて落ちて行った。

矢が、

かあーん

とカブトの鉢にあたってそれた。恐怖はそういうことだけではない。

登りつめた最後に、死が待っていることであった。

城壁の上に敵兵がひしめいているのだ。

(が、ここで一番乗りの功がたてられねばわしは一生城持になれぬ)

という執心だけが、伊右衛門に自分の重い体を一寸きざみに持ちあげさせた。

吉兵衛が、頭上を登っている。つづいて祖父江新右衛門。

やはり譜代の家来なのだ。

伊右衛門に一番乗りの功をたてさせたいばかりに、かれらは生死を忘れている。

やがて、吉兵衛が城壁にのぼりつめ、山内家の旗をたて、

「山内伊右衛門一豊が家来五藤吉兵衛一番乗り」

と大音声をあげた。

たちまち敵の槍が集まってきたが、吉兵衛は必死にふせいだ。

ついで祖父江新右衛門がのぼり、伊右衛門のために槍の柄をおろした。

伊右衛門はそれにつかまって登った。

わっ、とすすきの中にまぎれこんだかと思うほどに多くの槍の穂がむらがってきた。

伊右衛門は夢中で槍をふるった。

というと勇ましく聞こえるが、敵の槍の群れをふせぐのがせいいっぱいで、巽（たつみ）の櫓の白壁のまわりを、逃げまわっていたにすぎない。

「殿、ご用心を」

と、祖父江新右衛門がピタリと寄りそって伊右衛門にとびかかってくる敵の槍を、叩きおとし、はらい流ししている。

五藤吉兵衛は、十歩ばかりむこうにいた。

「吉兵衛、離れるな、これへ来い」

伊右衛門は叫び、当の吉兵衛もそうしようと思うのだが、敵が吉兵衛を離さない。

十人ばかり、しつこく取りまいて間断なく槍を繰りだしているのである。

「新右衛門、吉兵衛を救いにゆこう」

「心得ました」

と、新右衛門は、息をついていった。

が、この場所と吉兵衛が槍を使っている場所とのあいだに敵の人数の壁がある。

それを突き破ったとたんに死骸になるのではないか。

「殿、それがしが行って参ります」

「わしも行く」

「行きなさるな」

と、新右衛門が突きとばした。伊右衛門はよろけ、どさりと尻もちをついた。

「新右衛門、わしもつれて行け」

と、起きあがろうとしたとき、ポロポロと涙がこぼれた。

顔がゆがみ、わっと泣きだした。泣きながら駈けた。

もう、前後左右の顧慮などはない。自分が泣き喚（わめ）いていることすら、気がつかない。

一種の発狂状態なのだ。

敵の槍がきた。

伊右衛門は、発狂という一種の神通力をもった。素早く跳躍した。

払い落した。

突き伏せた。

泣きながら、駈けた。

吉兵衛は、包囲されている。

この男も、もう人間の人相ではない。槍のハシをにぎり、体をぶんまわしのように回して敵のつけ入るのを防いでいた。

そこへ、敵の包囲の一角がわっと破れ、泣きながら駈けこんでくる武者がある。

わが主人ではないか。
「殿、殿」
吉兵衛にも伝染してわあわあ泣きながら槍をふるった。新右衛門までが泣きだし、泣きながらたたかった。
なんとも奇妙な主従だったが、これが滅法に強い。敵も手こずった。
手こずったが、たかが三人である。
「この泣き武者どもを一人ずつ押しかこんで討ちとれ」
と、敵のうちで、場馴れした武者がさけんだ。このひと声で、いままで無統制だった敵の動きに、機動性ができた。
主従三人のあいだが分断され、たがいにたすけあうことが不可能になった。
吉兵衛が、もっとも疲れている。
こういう場合、疲れこそ敵なのだ。手足の動きがにぶくなってきた。
一人が槍を突きだしてきたのを、吉兵衛はやっとはねあげた。
そのために出来た左腕のつけねの具足のすき間へ、他の槍が吸いこまれるように突き入った。
「わあーっ」
と、吉兵衛は叫び、がくっと腰が砕けた。
吉兵衛の悲鳴をきいた。

が、伊右衛門は救いだしに行くこともできない。
さらに泣き声を高くした。
激しく泣けば泣くほど、敵に抵抗する力が増してくるようで、もう伊右衛門は意識的に泣きわめきつつ槍をふるった。かこみを破って吉兵衛に近づこうとした。
そのとき、味方の大群がぞくぞくと石垣をはいのぼってきて、十人、二十人と城壁の内側にとびおりた。
敵は崩れた。
逃げた。
「吉兵衛、吉兵衛」
と、伊右衛門は泣きながら駈けより、吉兵衛を抱きおこした。
槍傷が三ヵ所にあり血を噴きだしている。
「殿、もはや、いかぬ」
と、吉兵衛は戦場ひげの中からやっとそのひとことをいった。
「吉兵衛、そちの妻子はいうにおよばず、子々孫々にいたるまでわが山内家のつづくかぎり、おろそかにはせぬぞ」
「国持大名になりなされ。そのためにこそ、吉兵衛は殿のために一番乗りをした」
「よし、なろう。なれば、そちの子や孫を家老にするぞ」
当然なことだ。

この時代、家を興すというのが労働の最大の目的であった。百姓が働いて田地をふやすことが子孫のためであるように、武士が戦場の功名をきそい、そのために落命することも子孫のためと思えばかれらのあきらめがついた。

吉兵衛は、氏も素姓もない。

が、その子孫は、土佐二十四万石の家老となり、維新までつづいた。もっとも、この家系は封建時代のどの家系もそうであるように、家祖吉兵衛の創業当時の働きを誇大に思いすぎ、その家名の上に三百年あぐらをかきつづけて、さほどの人材を出したというわけではない。

ただこの吉兵衛の亀山城頭での死によって、その子孫は三百年という長期の安逸をむさぼれたことだけはたしかである。

その日、亀山城は落ちた。

夜、陣中で吉兵衛の遺骸を焼き、その骨を祖父江新右衛門があずかった。

「不幸なことだ」

と、新右衛門は泣いた。

かれの嘆きについて古い記録の表現をそのまま借りると、

「我と吉兵衛のむつまじきこと、親族に越えたり。つねに怒ることなく、隠すことなく、戦場に臨んでも共に励みしかども、我は吉兵衛に毎度劣りし。（中略）かくて我、比翼の友を失ひぬれば、戦場に臨みても勇むことなく、酒宴の席にて楽しむことなし、と、涙を流してぞ語りける」

伊右衛門もまた、平凡な男だけに涙もろかった。

すぐ戦場から使者を差し立て、吉兵衛の遺骨、遺品をもたせて千代のもとにやり、その遺族をなぐさめさせた。

千代はすぐ供養僧をよび、読経させたが、彼女もまた度をうしなった。

数日、泣き暮らした。

「もう武士はいやです」

と、何度もいった。

賤ヶ岳

筆者は、この時期における秀吉と柴田勝家の格闘をかきたくて筆をおさえかねている。秀吉軍における少佐級の一将校にすぎぬ山内伊右衛門一豊の行動を追うより、はるかにそのほうが面白いからだ。

わが伊右衛門は、いま、日本歴史でもっとも面白い数ヵ月のなかにいる。

伊右衛門は動いているにすぎない。

が、秀吉はその頭脳と行動をもって日本歴史を変えようとしている。筆者の興味がつい秀吉の行動にひきずられるのもむりはないであろう。

いや、秀吉の成功は、同時にこの物語の主人公である伊右衛門の運命開拓でもある。その意味では、ここしばらく、ついつい秀吉の行動に物語の重心をかたむきかけるとしても、あながちむだではあるまい。

伊右衛門だけでなく、秀吉加担の織田家の旧将たちは、すべて秀吉によって自分の運命をきり

ひらこうとしていた。

織田家の一番番頭柴田勝家は、ざっとその領国は二百万石たらず。

北陸を勢力範囲とし、越前北ノ庄（福井市）を居城としている。

積雪がかれの南下をはばんでいることは、前にのべた。

その間、秀吉が、勝家の同盟軍滝川一益を攻めたりして中央における勢力を日に日に盛んにしつつあるのを、柴田勝家は、指をくわえて見ていなければならない。

たまらなくなったのであろう、伊勢亀山城が落ちるすこし前、

「沿道の雪をはらいのけい」

と、数千の人夫を動員した。

除雪作業は二月二十八日から三月二日までつづき、その終わるのを待ちかねてざっと五万の兵の南下を開始した。

「動いたか」

と、北方からの諜報をきいてこおどりしたのは、秀吉である。

すぐ伊勢から兵をめぐらせて北上し、北部近江の山岳地帯に入った。

柳瀬（やながせ）

という地名がある。

両軍、この付近まで接近したが、なにぶん付近の地形は、

「この所は山深くして道細く、谷に続きぬれば敵も味方もたやすく駈け合わすことができない」

というもので、にらみあったまま、日をすごした。

とにかく道はガケぎわについた小道で、人ひとりがやっと通れる狭さで、大部隊の会戦など思いもよらない。

「これは、持久戦になるな」

と、伊右衛門も、つぶやいた。

柴田勝家が動かないのである。

両軍、あの山この山におびただしく小要塞をつくってにらみあいの形となった。地形からみて、さきに手を出した者が敵の要塞網にひっかかり、敗亡をとげるにきまっている。

「勝家は老練の者だ。手出しはしまい。こちらも手を出すな。がまんくらべと思え」

と秀吉は諸要塞に命を出し、自分は遊撃軍を率いて美濃地方に攻め入った。

柴田の同盟軍である織田信孝を討つためである。

伊右衛門もこれに従軍した。

——ところが。

柴田勝家にとって不幸だったのは、その部将に佐久間盛政というみごとすぎるほどの猛将をもったことである。

柴田はこの猛獣といっていいほどの男の武勇を愛し、養子にまでした。そのために養子の長浜城主柴田勝豊が養父勝家をうらみ、城をひらいて秀吉に降伏してしまったことは、以前にのべた。

佐久間がかせいだ不幸はこれが一つ。

さらに、現在、北近江における持久戦で、主将柴田勝家が、

「動くな」

と全軍に命じているにもかかわらず、佐久間盛政は動こうとしたのである。

かれは、柴田軍の最強部隊をひきいて最前線に布陣していた。

佐久間盛政はしさいに秀吉軍の要塞地帯をさぐったあげく、意外な弱点があるのを知った。

秀吉陣地のほぼ中央に、中川瀬兵衛砦（とりで）と高山右近砦がある。

ここへ間道が通じている。その間道をつたって夜襲すれば、かならず陥ちるにちがいない。と、佐久間はみた。

「攻撃させてください」

と、本営の勝家に使いを走らせてたのんだ。

勝家はおどろいた。

「ならぬ。手出しはならぬ」

と拒絶したが、佐久間はそれくらいのことでひっこまない。

再三、使いをやって力説した。

「かならず、成功します」

「成功はするだろう。しかし、ならぬ」

と勝家はいった。二つの砦が奇襲で陥ちたところで、なにしろ敵陣の中央である。ぐずぐずし

ていると、敵の諸要塞が活動をはじめて佐久間は袋だたきになる。佐久間が潰滅すれば、全軍の崩壊をきたすことは、火をみるよりもあきらかであった。

「ならぬ」

と、こんどは自分のほうから伝令将校を佐久間盛政の陣にやって、制止させた。

佐久間は、傲然とわらった。

「往年、織田家に鬼柴田ありといわれた義父も老いたわ。これしきのことがおわかりなさらぬか。第一、敵の主将秀吉はいま十三里むこうの美濃岐阜城を攻撃中である。急報をきいて駈けつけるにはずいぶんの時間がかかる。その留守こそ天のたすけというものだ。留守中に右の二つの砦だけでなく諸陣地を潰滅させることは、卵を割るよりもいとやすいこと」

勝家から最後の制止の使者がきたときは、佐久間盛政は、返事もしなかった。

かれは夜襲を敢行した。

予想どおり、中川、高山の砦をたちまちつぶし、中川瀬兵衛は戦死、高山右近は一戦もまじえずに敗走した。

「みろ」

と、佐久間がいい、勝家の本陣に戦勝を報告したが、勝家はよろこばない。

「小僧、ついに大事を誤ったか」

と、嘆息した。

そのころ、大垣の陣中で「お味方の中川、高山陣地潰滅」の急報をきいて狂喜したのは、秀吉

である。

「わが大勝、眼の前にあるぞ」

と、全軍に反転、快速行軍を命じた。

「討死したる瀬兵衛は気の毒なり。されど天下はわがものになったぞ。息のつづくかぎり駈けよ。時こそ勝敗の切所(せっしょ)ぞ。遅れれば天下をうしなうと思えよかし」

伊右衛門らは躍動して駈けた。この中山道がおそらく秀吉軍六万の将士の栄達へ通じる道であろう。

秀吉は、大垣城で気ぜわしく出陣支度をしながら、諸将、諸奉行をよびあつめ、

「筑前(秀吉)はいまから出立するぞ。遅れたる者は馬の息のつづくかぎりいそぎ追いつけや」

この点、信長流である。さらに信長よりもこまごまとした事柄に気づく秀吉は、身体強壮な士卒五十人をえらんで先発せしめ、この者には大声でみずから指図をした。

「よいか、みちみちの在所々々の庄屋、大百姓をよびあつめ、蔵をひらかせ、飯をたかせておけ。飯が焚きあがれば、空俵(あきだわら)を二つに切ってそれぞれに飯を詰め、そこへ塩水をふりかけさせよ。米の勘定はあとで十倍にして取らせると百姓どもに申しておけ。馬糧は合せ糠(あわせぬか)にせよ、合せ糠には、あわてて飯とまちがう者あるゆえ、木の板か紙などでシルシをつけておけ。飯を受けとる者、あるいは欲張って倍とる者もあろうが、とらせておけ。飯は、持ちあわせの手拭か、着る物で包ませよ」

とにかく秀吉、鞭をあげて駈けた。

午後二時に大垣を発し、日没には北近江の本営に着陣していた。

敵の佐久間盛政は、仰天した。

「とても秀吉はあすの午後でなければ着陣できまい」とみて、すべての作戦をその見込みによって実施していたのである。

はじめは偵察した者の報を信ぜず、

「さすれば秀吉は鬼神である。そのようなはずがない」

と人をかえてもう一度偵察させた。

偵察者はみな、びっくりして駈けもどってきた。

「美濃街道は西進する松明の群れで、万燈会のようでございます。ことに近江木之本のあたりは人馬雑踏し、カガリ火、松明のあかりで昼のようでございます」

盛政は、いまこそ主将柴田勝家の心配がまとはずれでなかったことを思い知った。

——あの者（秀吉）は猿が木を渡るよりも迅き者なれば。

と往年の同僚の長所をいい、盛政の猪突をもいましめたのである。

「退けえっ」

と、盛政は、深入りしすぎた自分の軍をまとめようとした。

が、容易には退却できない。一万数千の兵が峰々谷々に分駐しているのである。しかも、深夜であった。

が、退却しなければ秀吉の大軍のために袋だたきになってしまう。

足を踏みはずして谷に落ちる者、そこここで互いに敵かと思って同士討を演ずる群れ、退却命令を知らずに敵中にとりのこされてしまう者、一瞬で軍は組織をうしない、ばらばらになった。

夜半、細い二十日の月がのぼった。

秀吉は、山中を急進した。

「佐久間の潰走に追尾して勝家が本陣を衝くぞ。明け方には大戦さになるぞ」

もはや馬はつかえない。

秀吉自身、苔ですべり、木の枝で顔をひっかかれ、雑兵同然の泥まみれのかっこうで山中を北上した。

ついに両軍は、午前三時、余呉ノ湖の湖畔にそびえる賤ヶ岳で大衝突した。

当面の敵は、盛政の殿軍である柴田勝政の部隊であった。

月がかくれ、闇になった。

敵味方の鉄砲の火光だけが、わずかに闇をいろどっている。

伊右衛門も、闇のなかで泥んこである。

「新よ新よ」

と祖父江新右衛門をよばわった。

「はい、ここに」

「おお、居たか。この山中の夜いくさゆえ、わが顔がどこにあるかもわからぬ。繩はあるか、長いほうがよいぞ。それにつかまってわが家来はみな離れぬようにせよ」

とにかく、戦うことよりも迷わぬようにするだけで精いっぱいだった。

やがて夜があけた。

あたりがしらじらと白んでくると、敵味方の様子がやっとわかり、秀吉の活溌な指揮がはじまった。

じつのところ、敵の隊に味方がいたり、味方の隊に敵がまぎれていたりした。

そのあたりで、すさまじい格闘がはじまった。

伊右衛門の隊は、敵も味方もいない谷の底に、たがいに繩をにぎりあってぼう然としていた。

「これはいかぬ」

伊右衛門は、がけをみあげた。そのがけの上の飯浦坂では、刀槍みだれとぶ戦闘がくりひろげられている。

「みな、のぼれ」

伊右衛門は、草をつかんだ。とにかく、戦さのある場所にゆかねば、功名のたねはない。

そのころ、敵将佐久間盛政は西北の山頂にあり、戦況を見ていたが、もはやこれ以上の戦闘はむだと思ったのであろう、退き鉦をしきりと打ち鳴らさせた。

佐久間隊は、戦いながら退きはじめた。が、退却軍ながらも敵は意外に強く、接戦に勝敗がない。が、秀吉は佐久間の退き鉦を、

（好機）

と、見た。

こういう場合、退き渋っている敵に針で刺すほどにわずかな痛撃でも与えれば痛みは全軍に伝わり、どっと崩れるものだ。

このときである、秀吉が自分の親衛隊のすべてに突撃を命じたのは。

「かしこまって候」

と、加藤虎之助清正、福島市松正則、片桐助作且元、平野権平長泰、脇坂甚内安治、糟屋（かすや）助右衛門武則、石川兵助一光などこの合戦で「賤ヶ岳の七本槍」といわれた鬼小姓どもが槍をそろえて駈けだした。

伊右衛門は、やっと路上に出た。その頭上を、秀吉の親衛隊が駈けすぎた。

「新よ、新よ、遅れたぞ」

新右衛門は何度か落ちて、まだ谷の底にいる。

（こんどの戦さはだめか）

伊右衛門は眼のさきが暗くなった。

が、槍をとりなおした。

（一人で駈けよう）

どどど、と坂の上へ駈けだした。

一ノ郎党の祖父江新右衛門が這いあがって坂を駈けはじめたときには、伊右衛門は敵の下に組

み敷かれていた。

「殿、殿か」

「おう、新右衛門、われを助けよ」

敵の刃が、のどもとまで迫っている。

新右衛門はその男をずぶりと突き刺し、手ばやく首をあげた。

カブト首である。

「殿、幸先がよろしうござる」

「行こう」

といったとき、側面から銃撃をうけ、郎党の何人かが倒された。

かまわず、伊右衛門は乱軍の中へ突き入った。

千代の亭主は、豪傑ではない。

が、農夫のような篤実さで戦場でかせぐ男であった。

賤ヶ岳飯浦坂で懸命に働いた。

相手は逃げ足だった敵である。押し寄せてくる敵とはちがい、半分の力もない。だからずいぶんと首はかせげた。

柴田軍は崩れに崩れ、佐久間盛政は捕えられ、総大将柴田勝家は越前北ノ庄の本城へ逃げた。

秀吉は追撃した。

越前北ノ庄城が陥ち、柴田勝家がその室お市ノ方とともに城に火をはなって自刃したのは、天正十一年四月二十四日である。

秀吉はさらに加賀に進撃し、柴田の同盟軍佐々成政を降し、越後の上杉景勝と軍事同盟を結び、五月七日近江安土城に帰り、さらに十一日同国坂本城に入った。

中央は、ほぼ秀吉のものとなった。

残る強敵は東海の徳川家康だけである。

秀吉は、将士の論功行賞をした。

伊右衛門は、秀吉の奉行から、

「五百石を加増」

といわれたとき、さすがに顔の筋肉がこわばる思いであった。

(たった五百石。――)

合わせて三千五百石。

(羽柴様は天下、わしはあわせて三千五百石か)

心臓が、とまった、としか思えない。伊右衛門はぼう然と、坂本城のイラカの上に動く白雲をながめていた。

吉兵衛の顔が、白雲の中に浮かんだ。

頬が、ゆがんでいる。泣いているとしかおもえない。吉兵衛が亀山城で一番乗りしてくれて、しかもついに討死までしたその功が、たったこれだけか、と思うと、伊右衛門の胴がふるえてき

た。

亀山城包囲戦のとき、日没直前、味方が油断しているとき敵の奇襲隊がおしよせた。そのとき伊右衛門隊のみが突出して撃退し、その戦況を山上の本営から見おろしていた秀吉が、わざわざ伝令を走らせて、

——筑州（秀吉）、よろこびのあまりシリモチをついたぞ、ついたぞ。

とまで激賞してくれたあの功はどうなる。

（羽柴様は、人づかいがうますぎる。あれだけほめられたがためについ気おって、翌日は城へ一番乗りし、吉兵衛までうしのうた。羽柴様は、しょせんは、言葉と笑顔と誉め上手なだけの人か）

伊右衛門は、大名になれるとおもっていたのである。

信長の旗本から転属して秀吉付の将校になり、さらに秀吉の家来になった伊右衛門の経歴は、じつにふるい。

古参将校である。

秀吉が天下の中央をおさめ、北国の柴田の旧領を合わせた以上、五百万石ちかい所領になっている。歴戦の伊右衛門がたとえ一万石であろうとも、

大名

をのぞむのは、無理はないであろう。

（たったそれだけか）

伊右衛門はやがて幔幕を出、草の上にぼんやり腰をおろした。

武士をやめたくなった。

そのとき、奉行の幔幕のなかで、とほうもない大声がきこえた。

やはり、論功行賞に不満だった男がさわいでいるらしい。声にきき覚えがある。

加藤虎之助清正の声であった。

「馬鹿な」

と、わめいている。

虎之助が腹を立てるのもむりはない。

いわゆる賤ヶ岳の七本槍で、秀吉はこの七人の者を一挙に加増した。

虎之助は、秀吉の小姓で、禄高二百石。それが一躍三千石になった。

（あの子供が）

と、伊右衛門などは、自分の加増の薄さにくらべて実は腹にすえかねていた。二十歳（はたち）そこそこの虎之助が、一挙に十倍以上の加増を得たのである。手柄といえば、敵の拝郷五左衛門の鉄砲足軽頭の戸波隼人という者の首をとったぐらいである。

（なるほど、槍を入れたのはわずかにわしより早かったかもしれぬが、わしは歴戦の武者だ。過去、数えきれぬほどの戦場を往来してきたのに、わずかに三千五百石）

だが。

虎之助には虎之助なりの不服がある。

いわゆる賤ヶ岳七本槍で七人がほぼ同時に槍を入れ、みな一様に三千石に加増された、と思ったのに、なんとあとでたった一人だけが五千石だったことがわかったのである。

同僚の小姓で福島市松正則であった。かれのみは、二千石多かった。

虎之助は、

「馬鹿にするにもほどがある。市松とわしとは戦功も同じ、もとの石高も同じ、しかも御一門(秀吉の縁者)という点でもおなじである。それになぜわしが三千石、市松が五千石ぞ。かようなものは要らぬ」

と、奉行の杉原伯耆家次に、秀吉下賜の加増の朱印状を突きかえした。

(虫のよい不平だ。わしを見ろ)

と伊右衛門はおもった。

もっとも虎之助は虎之助で、その腹立ちには十分の理由があった。同じ働きをして加増が市松とちがうとあれば、秀吉は市松の武勇を高しとしたことになる。

「一様に百石の加増でもよい。平等こそ当然であるのに、ことさらに差をつけるとはわが武辺をはずかしめられたのと同然じゃ」

というのであった。

奉行の杉原伯耆家次は青くなって秀吉のもとに報告にいった。

「虎之助は、惣じてうつけ者(馬鹿)じゃ。伯耆、その朱印はそちが手もとであずかっておけ、いずれ五千石を取らそう」

と、そういう形でこの問題を解決した。しかしなぜ秀吉が、虎之助と市松の行賞に二千石という大差をつけたのかはわからない(虎之助にはこの後ほどなく秀吉が姫路城に帰陣した時、市松同様五千石を当て行なっている)。

(しかしわしはどうなる)

と、伊右衛門は思うのだ。

なるほど、福島市松は秀吉のイトコで、加藤虎之助はマタイトコである。縁者をひきたてる武門の例からいえば当然だし、縁者のすくない秀吉にすれば、早くこの二人を累進させていって腹心の大名にまで仕立ててゆきたいのであろう。

(それはわかる。しかし縁者でこそなけれ、最古参のわしが三千五百石であるとは)

伊右衛門は、こだわった。

(いまをとって、徳川家康のもとに走ってやろうか)

と思ったのは、このときである。

帰陣後、これを千代に訴えた。

千代は、戦陣から帰ってきた伊右衛門の額に、どこか以前になかったかげができていることに気づいた。

「牢人したい」

と、千代にいった。

千代は、茶をたてながら、微笑した眼をあげて、伊右衛門を見た。

(どういうご心境かしら)

「不加減でございますけど」

と、茶を伊右衛門の膝の前に置いた。

「千代、聞こえないのか」

「聞こえておりますけど、まずお茶をどうぞ」

「わしは牢人したい」

驚くだろう、とことさらに大声でいってみたが、千代は唇をつぼめ、頬で笑っている。

「なにがおかしい」

「うれしいのでございます」

「嬉しい？　そなたは、変わっている」

伊右衛門はとまどった。

「なぜうれしい」

「もう、飽きましたもの」

「なにが？」

伊右衛門にはわからない。

千代も正直なところ、もうこの夫婦の目標を追うことに疲れはじめていた。結婚した当座、一

国一城のあるじに主人を仕立ててあげてみたい、とおもったのは若気のいたりというものであったろう。

千代はすでに二十七になり、伊右衛門は三十の坂をとっくに越してしまった。

(ばかげている)

と思うのである。起き伏し、功名に憑かれてこの十数年をすごしてきてしまった。人生とは、それだけのものだろうか。

(ではない。もっと別な生き方がある)

と思うのだ。

伊右衛門も、同じことをおもっているのにちがいない。

「牢人をして、風月を楽しみつつ、世を安気に住み暮らしてみたい。馬や具足、太刀、槍などを売れば、田を買い、作男をやとうほどの金はあるだろう。わしも耕す。千代も草を刈れ。そして時には旅の連歌僧などを泊めて連歌を詠んだり、そのあたりの百姓窯から茶わんをもとめてきて茶をたてたりして暮らしたい。春になれば千代は若菜を摘みにゆけ。わしはそのあいだに山に分けいって岩魚でも釣り、ともどもに夕餉の菜を誇る、という暮らしをしてみたい」

「うれしうございますわ」

千代はシンからそう思った。幼な児の手をひいて若菜をつみにゆく自分の姿さえ、ありありと思いうかべることができた。

「どうだろう」

「そりゃ、一豊様のご決心しだいでございます。千代は、一豊様がたとえ乞食をなさろうとつい
て参ります」
「千代、本気か」
伊右衛門は、千代の手をとった。伊右衛門は正直なところ、千代はよろこぶまい、と思ってい
た。結婚後、伊右衛門に、栄達、という足かせをはめたのは千代ではないか、伊右衛門はそう思
っていた。
重荷
といえば、重荷だった。
その十数年、背負ってきた重荷が、はらりと消え落ちたような気がする。
「千代、かたじけない」
「どうして？」
「そなたはよろこぶまいと思った」
「わたくしが？」
千代は、愕然とした。
「わたくしが、そんな？……」
いやな女だったのか、と思ったのである。
夫に功名を強い、栄達を強い、それがこの男の重荷になっていた、とすると、自分とはいった

いなんという女であろう。
「牢人なさるということが、そ、そんなにうれしうございますか」
千代は、取りみだしてしまった。涙が、噴きあげるようにして出た。
これには、伊右衛門がうろたえた。
「千、千代、そなたは、いま、風月を友にする暮らしがうれしい、と申したばかりではないか。
な、なぜ泣く」
「いいえ。おおせのような暮らしをしてみたいと申しましたのは、本心でございます。でも、悲
しくなったのは、それとは全くべつ」
「どう別だ」
「わたくしがわるかった、と思ったのでございます。少女のころ、もし嫁げば夫を一国一城のあ
るじにしてみたい、とそれのみが夢でございました」
「少年もそう思う」
「でも、そのような子供の夢を、おとなになってまで持ちつづけるのは、こっけいなことでござ
いますし、不幸な暮らしかとも思います。いいえ、こっけいとか不幸とかというよりも、いちば
んへたな生きかたではないか、といまさら思うようになりました」
「それで悔恨して泣いたのか」
「いいえ、泣いたのは別でございます。わたくしの他愛ない夢が、それほど一豊様をくるしめて
いたかと、いまはじめて気づいて、それが、切なくて。……悪うございました」

「千代、そなたがわしに強いていたわけではない。わしにも、少年のころの夢が、消えずにありすぎた。われわれはふたりとも、こどもであったな」
「うん」
といったふうにうなずき、千代は泣き笑いをした。
なるほどそう思えば、どちらも、子供のころの夢のどれいになりはてていた。そのばかな夢に、うかうかと生涯を支配されてしまうところだった。
「もう泣くな」
伊右衛門は、千代の眼をぬぐってやった。
「わしは、酒がのめればどんなによいかと思うほどに、苦しかった。しかし千代のおかげで気持が晴れた」
「もともと、わたくしが結婚後ずっとお気持を重くしていたのでございますもの」
「いや、ちがうと申すのに。わしがもともと子供すぎた、とこれほど申しているのにわからぬか」
伊右衛門はあかるく笑った。かつてこの男になかったほどの澄んだ笑顔である。
「うれしそう」
と、千代は手を唇のそばまであげ、伊右衛門の顔を指さした。
半面、情けなく思う気持もなくはない。
(やはり、この人は、凡庸だったのだ)
心の片すみでは、そう思った。男子志をたてれば将軍にでもなれるという世の中なのに、伊右衛門はそういう野望から解放されたとたん、はればれしてしまっている。
(よほど、凡庸なのだ)
その片すみの思いは、伊右衛門の顔を指さしながら、くすくす笑っている。むろん意地のわるい笑いではない。

その夜、千代は寝所の灯を消すと、雨戸のすき間から洩れる月の光が、伊右衛門の枕もとまでのびていることに気づいた。千代はのぞきこんで、
「もう、お寝みになりましたか」
と、ささやきかけた。
「……」
伊右衛門の顔は、かるい寝息をたてたまま答えがない。
千代は、ふと、夫の顔に興味をもち、手燭をつける支度をした。
(意地がわるいかしら)
と、気がとがめた。が、わきあがってくる興味をおさえることができない。きょうの日までずいぶん長い時間、連れ添ってきたとはいうものの、夫の無防備な顔をしみじみと見るのは、いまがはじめて、ということがいえるかもしれない。
千代は、この作業に熱中した。
灯をつけた。

紙でかこい、伊右衛門の顔に近づけた。闇の中に、一個の童顔がうかびあがった。
(凡庸な顔。――)
眉が遠山のようで、武者らしいものではない。それに男には惜しいほどの形のいい唇が顔をひきしめているのだが、感じとして謹直すぎるようであった。
どうみても、武士の顔ではない。が、百姓の顔でもなく僧侶、学者の顔でもない。それらの個性のまだつかぬ少年の顔なのである。
(才気がない)
かといって、度胸も賭博性もない。
伊右衛門は、動いている灯の輪をまるで感じないのか、寝息一つ乱れさせずに寝入ってしまっている。
(安堵なされたのかな)
そうだろう。出世主義を捨て、その承認を千代から得たとたん、なにもかも放下してこの寝顔になってしまったのであろう。
――私は少女のころから、自分の運命を切りひらこうとしない男に、魅力を覚えなかった。
と、千代はふと思った。
(男は辛うじて、そういうときにだけ美しいのではないか)
伊右衛門は、運命と闘うことから逃げようとしている。
その逃げる、というのも、猛然と背後へ驀進するというようなものではない。

物語にある遠藤武者盛遠は、恋で袈裟御前を殺したがために世を捨て、文覚上人になったが、荒行という荒行をすべてやってのけ、何度か死にかけた。歌詠みの西行法師は、北面の武士の境涯をすてるときに世をも捨て、恩愛のきずなを断つために、自分にまつわりついてきた児女を縁側から突きおとした。
が、伊右衛門はそうではない。
――風月を友としたい。
である。
要するに、闘うことから身をかわしただけのあまい逃避にすぎないではないか。
と思うと、千代は腹が立ってきた。
(ゆるせない)
そう思った。塵外人になるならなるで、なぜ自分や娘のよねを捨てて僧にでもなろうという一大勇猛心がおこせないのだろう。
顔をのぞきこんでいるうちに、千代にはまた別な「教育欲」が頭をもたげてきた。
(そうだ、お坊さんにさせよう)
果して坊主になるほどの覚悟があるかどうか。この想像は、千代を楽しませた。ちょうど少女が着せかえ人形を楽しむような心境であった。
翌日、妙な雲水が托鉢にきた。

千代は門前で見かけ、「ちょうどお昼どきでございますからお台所でおときを召しあがってくださいますように」とたのんだ。

僧は、あじろ笠をとった。年のころは三十二、三で、眉がふとく、唇のあつい巨大漢である。

「では、頂戴つかまつろう」

と、台所へまわった。

千代はさいわい、夫の亡父の命日だったので、お精進をつくっていたのである。

「これはうまい」

と、雲水は何杯もおかわりしたあげく、

「いまいっぱいは、ぜにを乞いたい」

ぬけぬけといった。

千代は奥へ入り、めし椀に永楽銭を山に盛りあげて、雲水の前にさしだした。

「これは奇特な」

それを、麻袋になげこんだ。

「いったい、なにをなさるお金でございます」

「わしの住持する寺が荒れておる」

「どこの？」

「そこの法源寺よ」

「法源寺ならば、お年を召した方が住持なされておるではありませぬか」

「あれはたったいま、放逐した」

この雲水は、京の妙心寺僧堂からやってきた笑巌（しょうごん）という僧だという。

朝っぱらからその法源寺にやってきて、住持の僧とやりあい、ついに勝ってカラカサ一本を背負わせて住僧をたたきだしたのだというのである。

「可哀そうに、それほど前住さまは、お覚悟の足りぬお方でございましたか」

「狐狸のたぐいじゃな」

「でも、あのお年で山野をおさすらいあそばすのはお気の毒でございますね」

と、千代は同情した。

が、笑巌は、憎々しげにいった。

「なんの、一所不住、行雲流水がわが宗門のおきてじゃ。当然よ」

「こわいこと」

そういいながら、禅家といえども領国を奪りあう武家とかわりがないことに、なにかしらおかしみを覚えた。

「それに、あの寺は眺めがよい。当分、足をとどめるのに都合がよさそうじゃ」

いよいよ、武家に似ている。

千代はふと、夫の心境をこの雲水にきいてもらいたくなった。

雲水さえ許してくれるなら、とりあえず夫を居士のままで弟子にさせたくなったのである。

千代は、理由をのべた。

雲水は大まじめで、いちいちうなずいていたが、
「さればあすにでも寺を訪ねて来るようにお伝えくだされ」
夕刻、伊右衛門がもどってきた。
「明朝、そこの法源寺へ行ってあたらしいお住持さまにお会いなされるといかがでしょう」
「禅か」
伊右衛門は、かねがねその道に入る機会を待っていた。やってみたいと思っていたのである。
その夜はひとまず寝た。

「なるほど」
翌朝、伊右衛門は、千代の口もとを見ながら、ひどくかたい表情でうなずいた。
「主家を捨てて牢人するより、いっそ徹底して、世を捨てて坊主になれ、と申すのじゃな」
「ええ、おなじ捨てるならそのほうが根こそぎ捨てるのでございますから、男らしうございましょう」
「遠藤武者盛遠というわけか」
伊右衛門は、呼吸をころしたような表情でうなずいた。
「千代も、およねも捨てるというわけか」
「はい。そうでなければ、功名一途の地獄から身をひくという意義が徹底しませぬ」
「千代、それでもいいのか」

嚙みつくようにいった。
千代は、微笑で受けざるをえない。
「よろしうございますとも」
「さればわしが出家したあと、そなたはどうするのだ」
「尼になります」
「ああ、そなたも出家するのか」
伊右衛門はほっとした。とあれば、ふたりとも現状のままで頭をまるめるだけではないか。
「安堵した」
「でも、千代は、入道します以上はただの沙弥ではなく、五戒を堅持したちゃんとした出家になりたいと思います。ですから、千代はおよねを美濃の不破家にでもあずけ、大和の尼寺を頼んで弟子入りしとうございます」
「はあ」
と、伊右衛門は口をあけた。
「わしと夫婦ではなくなるのじゃな」
「ホホホ……、頭のまるい夫婦など、きいたことがありませぬ」
「そうか」
大変なことになってきた、と伊右衛門はおもった。千代のいうとおりである、世を避けて風流韻事を事とするといったところで、やるならばそこまで徹底すべきであろう。

「とにかく、法源寺の笑巌さまをいまからお訪ねあそばすように」
とせきたて、伊右衛門がおろおろしているあいだに支度を手つだい、門から押し出すようにして、出した。
伊右衛門は、荒れ寺を訪ねた。
「来たか」
と、庫裡の障子戸のむこうで声がした。
障子戸をあけると、笑巌が台所でめしを掻きこんでいる。
托鉢であつめてきたためしらしく、玄米、白米、ひえ、粟のいりまじった見るからにきたならしいめしである。
「わしは大食いでな、ひまさえあればめしを食っている。食わぬか」
「いや、結構でございます」
「そうか。すぐ済むから、待っているあいだに、頭を剃る用意をしておくれ。カミソリとミミダライは、その棚の上にある。湯をいっぱい、その釜でわかしておいてもらおう」
「ご坊がお用いになりますので」
「冗談ではない。わしは今朝、剃ったばかりだ。あんたの頭だよ」
「もう？」
伊右衛門は、驚いた。話をきいてから出家するかどうかをきめるつもりだったのだ。
「早いほうがよかろう」

笑巌は、めしに汁をかけた。
湯が沸き、剃髪の用意ができた。
「さあ、剃ろう」
と、笑巌は無造作にカミソリをつかんで立ちあがったから、伊右衛門はいよいよあわて、
「ご、ご坊よ。まずはまず、その前にご法話をおきかせねがえまいか」
「なんの法話じゃ。頭をそりこぼつのに、余計な法話は要るまい」
「で、では、それがしの話をきいてくださらぬか」
「ああ、そうか」
笑巌はうなずき、伊右衛門を日あたりのいい縁側へつれて行って、すわらせた。縁のむこうで、南天が日をあびている。
笑巌だけは、座敷にすわっている。座敷といってもけばだった破れだたみで、ムカデが這いあがっていたりして、気味がわるい。
「さあ、聞こう」
「されば」
伊右衛門は、物語をはじめた。織田家に仕えて数知れぬほどの戦場を往来してきたこと、これこれの手柄をたてたこと、しかしながら新しい主人の秀吉は、いっこうにその手柄にむくいるほどの恩賞はくれないこと、他の同僚や後輩が、柴田討滅後、二倍も三倍もの加増を受けたこと、

などを話した。
「それだけか」
「いかにも、それだけでござる」
「愚痴じゃな」
「え？」
「世を捨てると申されるゆえ、どれほどの動機があるかと思い、わしもおのれの修行、成道の参考になるかと胸をおどらせてきいていたが、なんじゃ、ただの愚痴か」
「愚弄なさるか」
「いやいや、愚弄はせぬ。愚痴がつもったあまり、主家を捨てて牢人になる決意をされ、さらにはいっそ頭をまるめて坊主になろうとまで心をきめられたこと、奇特である。たかが、愚痴がモトでな」
「たかが愚痴、と申されるが、当人の身にとっては愚痴ではすまされませぬ」
「それで、出家か」
「思いきってそうしようと、ふと思うたまででござる」
「ふと、な」
と笑厳は、言葉尻をとらえてうなずいた。
「されば、どうであろう。頭を丸めるまで決意されたのなら、いま一歩、進めてみる気はないか」

「いま一歩？」
「おお、頭をまるめるよりも、もっと解脱の法があるのじゃ」
「どんな？」
「首を刎ねて進ぜよう」
えっ、と伊右衛門はさがった。
「その刀を貸しなされ。わしが介錯してみごと首を刎ねてやる。おなじ浮世から逃げるのなら、そのほうが手っとりばやくてよい」
「まま、待った」
「いや、引導をわたす」
と、笑厳はとびかかってきた。
馬鹿力な男だ。左手で伊右衛門のくびの輪を攻め、右手を働かせてかれの脇差を抜こうとした。伊右衛門は必死にあらがい、とうとう二人は組み打ったまま、縁の下へ落ちた。
「な、なにをするのじゃ」
「覚悟せい」
笑厳は、スラリと脇差をぬき、伊右衛門のくびに擬した。
この笑厳という雲水は、小具足（格闘術）でも心得ているのだろうか。伊右衛門の逆手をぴたりとおさえこんで、身動き一つさせない。

「殺せ」

とは、伊右衛門はいわなかった。そういう棄てばちなせりふは泰平の世の小悪党のいうことで、戦国武者の生への執念というのはおそろしいばかりのものだ。

伊右衛門は、鎌首をもたげて、笑巌坊主の左手くびに噛みつこうとした。

「あっ、こいつ」

笑巌は、手をはなした。そのすきに伊右衛門は笑巌の体をはねあげようとした。

「やむを得ん。殺すわ」

「こ、ころすな」

と、伊右衛門は、わめいた。笑巌がサカ手に持った脇差のキッサキが、ちくちくと伊右衛門ののど輪を刺した。

そのたびに皮膚がやぶれ、血が噴き出した。

「動くな、動くとそのまま、ずぶずぶとのどに入ってしまうぞ」

「勝手にしろ」

「伊右衛門とやら。これしきのわざでよくぞ三千五百石の身上がとれたものよ」

「負けた。ゆるせ」

と、こんどは追従笑いをうかべた。が、笑巌坊主には、効めがない。

「伊右衛門、おのれは、浮世の火宅から逃げるために、坊主になろうとしたそうな。唐の古い書物にもある。敗走して五十歩で踏みとどまるも、百歩で踏みとどまるも、敗走は敗走である、と

いう。それほど浮世から逃げたければ、いっそ命を仕舞えばどうじゃ。楽になるぞ」

「——い、いのちだけは」

「かんべんして貰いたいか。それではおのれの理が通らぬ。浮世から逃げたいと申していたのは、あれはどうなった」

「いや、逃げたい」

「ならば逃がしてやろう」

と、また脇差をもつ手に力を入れた。伊右衛門は、閉口した。

「逃げぬ」

と、さけんだ。そうわめいてみると、なにかしら心機が一転したような気持になった。

体から、力をぬいた。

「坊主、わ、わしは浮世に踏みとどまる。おぬしに白刃をつきつけられて、やっとわかった。浮世とは、生きて戦うしか仕方のないところじゃと、やっとわかった」

「わかったか」

笑巌は笑いだした。

「それが悟りというものだ。逃げずに浮世の主人になれ。われがわが身の主人になれ。禅家に、随処に主となれ、という言葉があるわい」

「わかった」

言うなり、伊右衛門は笑巌をはねとばした。ぐらっと笑巌がのけぞった。伊右衛門はのしかか

った。

「笑巌、見たか」

と、くびを締めた。こうでもしないと、口惜しさの感情が、どうにもならない。

笑巌はばたばたしていたが、やがて気をうしなってしまった。

伊右衛門は立ちあがってその頭を蹴り、つばを吐きかけて、ゆっくりと立ち去った。随処ニ主トナレ、を教えられたとおり実行したものであろう。

家　康

天下の鳴動は、なおやまない。

秀吉は、その最大の敵の柴田勝家をほろぼしたが、東海でぶきみな沈黙をまもっている男がいた。

徳川家康である。

織田家の同盟者だった男であり、信長の天下のあとつぎは、家康であってもふしぎはない。いや、織田家の一番頭にすぎなかった秀吉よりも、家康が相続するほうが、より順当だったかもしれない。

千代も、いったことがある。

「徳川様は、どうなされているのでありましょう」

「世に、乗り遅れられたようだ」

と、伊右衛門が答えた。

伊右衛門のきくところでは、本能寺ノ変がおこったとき、家康はわずかな手まわりの人数をつれて、平装、堺見物をしていた。

この点が、運命のわかれ道だったといっていい。なぜならば、秀吉は戦闘態勢の大軍団をひきいて中国筋にあった。反転、光秀を討つのに、これほど好条件をもっていた部将は織田家のなかにもいない。

家康は、命からがら三河へ帰った。合戦支度をととのえ、いざ光秀討伐の軍を発しようとしたときは、すでに秀吉が光秀を山崎に討ちとったあとであった。

——やんぬるかな。

と、家康は思ったであろう。

そのあと、秀吉はたちまち京を手に入れ、柴田と事を構えたりして、その勢い旭日のようであったが、家康は沈黙した。

なぜならば、自分が地方軍閥に落ちてしまったことを知ったのである。将来、秀吉と天下をあらそうにしても、とにかく現状のままでは兵力が足りない。

——領国をふやすことだ。

と、家康は、まるで中央に何の野心もない者のごとく、黙々と近隣を切りとっていた。

すでにかれの範囲は、三河、遠江、駿河の三国におよんでいるが、それに隣接する信州と甲州がほしかった。

せっせと切りとった。

要するに、日本アルプス以南の中部地方をその傘下におさめたかったのである。秀吉と戦うにしろ、争うにしろ、まずなによりも実力を養っておかねばならなかった。

しかも、またたくまにそれを成就した。秀吉が柴田と戦っているあいだに、家康は、参、遠、駿、甲、信の五ヵ国百三十八万石の大領主にふくれあがった。

が、秀吉も、ほうぼうの大名を誘引しつつ日に日に膨脹している。この当時の秀吉の範囲は、日本六十四州のうち、二十四州六百二十八万石におよんでいた。こころみに列挙すると、山城、大和、河内、和泉、摂津、志摩、近江、美濃、若狭、越前、加賀、能登、丹波、丹後、但馬、因幡、播磨、美作、備前、淡路の二十ヵ国のほかに、伊勢、伊賀、伯耆、備中の一部。

家康は、とうてい勝ち目はない。その動員兵力は、六分の一である。

しかし、利点もある。家康の持っている軍団の質は、日本最強といってよかった。

まず、かれのもつ三河武士というのは、性格が篤実、勇敢で、しかも統制に従順なこと、比類がない。さらに新たに併合した甲州武士は、旧主武田家によって練りぬかれており、信州武士は小部隊戦闘の巧妙さでは天下に名があった。

秀吉と家康とが、ついに戦うべきときがきた。その発端は、秀吉がまだ柴田勝家と交戦状態にあった天正十一年の春である。

家康の岡崎城に、ひそかに訪ねてきた客がある。

信長の遺児、信雄(のぶかつ)であった。知能、性向は普通以下のひとで、まず魯鈍(ろどん)というべき人物であろう。すくなくとも信長の子だとは信じられないほどの人物である。

その信雄が、

「秀吉をほろぼしたいが、同盟を結んでもらいたい」

といってきた。

信雄は、かつて秀吉が柴田を攻めているときは秀吉のために後援をした。つまり一時は秀吉の味方であった。

ところが、信雄のみるところ、秀吉は織田家の遺児を差しおいて天下を望もうとする意図をはっきり見せはじめただけでなく、

——秀吉は自分を亡きものにしようとしている。

といううわささえ高かった。

いくら馬鹿でも、

——このままでは自滅だ。

と思ったのであろう。

家康自身も、そう思っていた。秀吉は家康をひどく怖れ、しきりと懐柔（かいじゅう）政策をとってくるが、その真意は疑わしい。

（このままでは滅びを待つようなものだ）

と思っていたから、この点、信雄と同盟する共通の条件があった。

家康は、決戦に踏みきった。

踏みきった最大の理由は、信雄がもっている兵力である。信雄の範囲は、尾張一国に伊賀、伊勢の大部分を持ち、石高はざっと百万石。兵は二万五千人。

それに家康の百三十八万石、三万四千の動員力を加えると、戦いの仕方によっては、あるいは勝てるかもしれない。

（負ければ？）

滅亡する、と家康は覚悟した。勝てば、どうなるか。いや、相手が強大すぎるために、戦闘で勝っても天下をとれるまでにいたるまい。しかし勝てばその勝利をたねになんらかの活路が見出せるであろう。

秀吉は、軍令をくだした。

伊右衛門は大坂に集結し、進発命令を待った。

（さて、どちらが勝つか）

兵の強さは、家康軍である。兵数の大は秀吉軍である。約三倍はあろう。

伊右衛門が、のちにかれが仕えるにいたる徳川家康という人物に興味をもったのは、このときであった。

この合戦がはじまるまでに、秀吉がどれほど家康の歓心を買うために苦心したかということは、伊右衛門も知っている。

京の宮廷を擁している秀吉は、諸将の官位を自在にあっせんすることができたが、家康のためにとくに「従三位参議」という位をあっせんした。ところが当の秀吉は、「従四位参議」で、わざと身分を低くした。そこまで心づかいをしていたのである。

伊右衛門には、この戦いほど、興味のあるものはなかった。東海一の弓取りといわれた家康の

実力がこれでわかるであろうし、秀吉の真の腕も、この一戦でわかる。
秀吉、四十九。
家康、四十三。

天正十二年三月十九日、大坂は濃霧であった。この日美濃の前線から駈けもどった伝令の報は、秀吉とその軍団をおどろかせた。

敗けた。

という報である。

(本当か)

伊右衛門は、体がふるえてきた。常勝軍だった秀吉の軍隊が、潰滅したという。

むろん、まだ本隊は大坂にいる。

だから一局地戦闘に負けたといえばそれまでだが、最初の野戦だけにこの敗戦があたえた衝撃は大きかった。

隊長は、

「鬼武蔵」

というあだなのあった美濃金山城主森武蔵守長可である。兵三千をひきい、尾張の敵領内に侵入し、丹羽郡羽黒村の八幡林という山林のなかに野営した。

家康の将校斥候の酒井忠次はそれを見、すぐ帰陣して家康に、

「敵は孤軍でござる。森の名は鬼武蔵という異名で評判の男でありますから、秀吉の大軍が到着する前に潰滅させれば、敵の士気をくじくことになりましょう」

「ひと当て、当ててみよ」

家康は命じ、酒井忠次を先鋒隊長とし、奥平信昌、榊原康政などを諸将とする兵五千をさしむけ、十七日の未明に襲い、陽のあがるころには潰滅させてしまった。

「家康は強い」

という印象は、伊右衛門の胸裡にきざみこまれた。

秀吉が、もっとも衝撃をうけた。

「やったか」

と、歯がみし、その二日後、公称十二万五千、実数六万の大軍をひきいて、大坂を進発した。

伊右衛門も、その軍中にある。

なににしても秀吉の出足は遅すぎた。いままでの秀吉ならつねに軍の先頭におり、機敏に戦闘を指揮してこういう失敗もなかったのだが、こんどの敵は大きすぎる。

だから、大坂で「戦略」に没頭した。北国の同盟軍丹羽氏に使いを走らせたり、越後の上杉氏に協力を求めたり、京の宮廷世論を鎮めたり、家康に対する大包囲作戦のほうにいそがしく、戦闘は現地にまかせた。

それが失敗であった。

いかに森武蔵守が鬼の異名をとっていようと、家康にはかなわない。

秀吉は、犬山城に入った。入るとすぐみずから軽騎をひきいて敵情偵察に出かけ、家康討滅の作戦をたてた。

秀吉は、利口である。家康より数倍の兵力を持ちながら、大会戦で一挙に雌雄を決するという作戦をすて、長大な野戦要塞をつくり、敵を疲労させる方法をとった。

（なるほど、おそるべきお人だな）

と伊右衛門もおもった。要塞群で敵を包囲しようという理由の第一は、敵の家康が野戦の駈けひきの名人だということを秀吉は考えたのであろう。

理由の第二は、天下取りの立場上、むきな喧嘩をするよりも位攻めにしようとしたことである。第三に、うかつに小部隊を出して戦闘し、もし負ければその報道が天下に誇大に伝わることを怖れたのである。

秀吉は、数日後、田楽（でんがく）に戦闘指揮所をつくり、家康の本営の小牧山（こまきやま）と相対峙（たいじ）した。

両者の距離は、一里。

秀吉は動かない。

山上から、家康の陣営を見ている。

このときの秀吉の武装は、唐冠（とうかん）のカブトに孔雀（くじゃく）の尾で織った陣羽織を着用し、はるか家康の小牧山から見てもすぐそれとわかるきらびやかなものであった。

「家康め、出て来ぬな」

と、秀吉は日に何度も舌打ちした。

「わが尻、くらえ」

陣羽織のすそをめくり、側近もあきれるほどの品のわるさで家康の陣営にむかって挑発したこともあった。

家康は家康で、秀吉陣地に並行して長大な野戦陣地をきずき、その陣地と陣地をつなぐための軍用道路さえつくっていた。

双方、動かない。

――出てくれば、たたく。

と、どちらも猫がねずみをねらうような眼で、相手の軽率な突撃を待ちに待っているが、どちらも動かない。

後年、秀吉が家康と夜ばなしをしたとき、このときのことを秀吉は思いだし、

――あのとき、そこもとはなぜ出なんだ。

ときいた。家康は、

――御前の御馬が出ましたならば、拙者も出馬、ときめておりました。

と答えた。秀吉は苦笑し、

――わしもおなじだった。山上で碁ばかりを打っていた。

といった。この挿話は、名棋士同士の対局にも似た佳話として当時、武将のあいだで相当に流布（るふ）された。

とまれ。

秀吉軍のなかで、功をあせる者はぼつぼつ滞陣に飽きはじめた。

備前岡山の池田家の家祖である池田勝入斎（しょうにゅうさい）がその代表であった。

秀吉の前に進み出て、

「家康の小牧山の陣地を見るに、日に日に人数がふえております。本国の三河はそろそろ空っぽのころじゃろう。間道よりひそかに攻め入って本拠の岡崎城を奪えば、小牧山の家康は陸にあがった河童（かっぱ）も同然でござる。ぜひそれがしを差しむけていただきたい」

と、しつこく頼んだ。

「中入りは、危険じゃ」

と秀吉はなかなか承知しない。中入りとは当時の戦術用語で、敵と差しむかっているあいだに兵力の一部をさいて後方にまわし、敵の本拠をつく、という方法である。

机上の案としては理があるようだが、現実にはなかなかうまくゆかない。うかつにやるとその奇襲部隊が敵中で袋だたきにあい、それがモトで全軍が崩壊するという例があまりにも多い。現に、ほんの去年、柴田勝家の将佐久間盛政が勝家の反対を押しきってそれをやり、それがために秀吉に大勝利をおさめしめた例がある。

「あぶない」

と秀吉はいったが、池田勝入斎はきかない。

ついにゆるした。

「許した以上は、大軍にしよう」

と、秀吉は、オイの秀次を総大将とし、池田勝入斎を先鋒隊長、森武蔵守長可を第二隊長、堀久太郎秀政を第三隊長とし、総軍二万の大奇襲兵団を編成した。

伊右衛門も、そのなかに入った。

この兵団が、運命的な作戦行軍をはじめたのは、四月六日の夜半である。

秀吉が出した二万の奇襲兵団は、夜間行軍をすることによって、十分家康の眼をかすめえたとかれらは信じた。

が、家康は知った。

最初、土地の百姓二人がひそかに報じてきたのだが、

「まさか」

と、信じなかった。敵が自分をおびき出すためにそういう虚報をばらまいているのだろうと思った。

が、服部平六という伊賀の忍びがもどってきて、

「まちがいござらぬ」

といったのでようやく信じた。ただちに行動をおこした。

敵を追尾するのである。

夜間、家康は、主力部隊をみずからひきい小牧山の前線基地をぬけだした。家康がぬけだした、

ということは秀吉方の斥候のたれもが気づかなかった。

家康は大軍に隠密行軍をさせ、ひそかにぬかりなく、秀吉の奇襲兵団のあとをつけた。

九日、夜明け前。

家康の先鋒部隊である水野忠重らはついに敵の奇襲兵団と接触した。

が、戦場は暗い。

不幸にも、羽柴秀次を総大将とするこの奇襲兵団のたれもが、敵が眼の前までせまっていることに気づかなかった。

夜が明けた。

「めしじゃ」

と、伊右衛門ら将士は、林、畑のあちこちにたむろし、朝の兵糧をつかいはじめた。

のんきなものである。

秀吉の軍は、家康麾下の三河、信州、甲州の武士から、

「かみがた衆」

というよびかたで、あなどられていた。それになんといっても天下を取った軍で、おごりきっている。

警戒もしなかった。

そこへ忍びよった家康の大須賀隊三千が、弓、鉄砲を乱射して一挙におそいかかった。

羽柴秀次の本陣は、わっと崩れたった。逃げる者、鉄砲を射つ者、首を掻き切られる者、さん

たんたる情景になった。

徳川軍は、攻めに攻めた。

家康麾下の勇将とされた榊原康政らは、輜重隊（しちょうたい）を襲った。

総崩れになった。

大将羽柴秀次は、のちに殺生関白の異名をとった若者である。

馬さえなく、徒歩で逃げた。

夢中で逃げた。たまたま、横を逃げてゆく騎馬武者がある。

美濃出身の男で、当時、豪勇をうたわれた可児（かに）才蔵である。

「才蔵、才蔵、その馬を貸せ」

とさけぶと、可児は馬上、ニヤリとふりかえって、

「雨降りの傘に候」

とむこうへ行ってしまった。敗走する者にとって馬は雨の日の傘と同様、他人には貸せぬものだ、という意味である。

伊右衛門も逃げた。

徒歩で逃げた。千代が買ってくれた十両の大馬は、乱軍のなかで置きわすれた。馬をさがそうとしたが、さがしていては命があぶない。

（ちっ、捨てた）

伊右衛門は、カブトもぬぎすてた。具足もちぎりすてた。逃げた。

とにかく、秀吉の奇襲兵団の潰走ぶりというのは、戦史でも例がすくない。大将の羽柴秀次が真っさきに逃げるものだから踏みこたえて戦う者がいなかった。

逃げる、というのも戦国武者の職能のひとつである。

「命あってのもの種」

で、うかつに首になってしまえば、功名、手柄があったところで、主家は遺族に何の保障もしてくれないのである。

奇襲兵団長の羽柴秀次の本隊が蒸発したように逃げ散ったあと、最前線にいた「鬼武蔵」の森長可と池田勝入斎の隊だけは、味方の退却を知らずに予定の行軍をつづけていた。

そこへ、家康が、主力をあげて攻撃してきた。

鬼武蔵はこのとき二十七。さきの敗戦を恥じ、この一戦で死を覚悟して具足の下は真白な死装束でいる。

射撃の目標になり、乱射をあびて落馬、討死。

池田勝入斎のほうは、さんざんに戦って疲労し、家康の旗本永井伝八郎に首を渡した。

後年、家康の天下になってから、勝入斎の子池田輝政(播磨、備前で八十三万石)は、家康と物語し、

「大御所様のご家来にて、それがしの父勝入斎を討ちとった永井伝八郎と申す士は達者でおりますか」

ときいた。

いる、と家康は答え、使いをやって永井伝八郎を御前に伺候させた。

輝政には他意はない。ただ、父の討死の模様などをくわしくききたかったのである。

永井伝八郎は、くわしく語った。輝政は涙を流して聴き入り、あとで家康に、

「あの永井伝八郎という御旗本は、知行はいかほど頂戴しております」

ときいた。

家康は、たしか五千石、と答えた。

「それがしの父を討った者がわずか五千石では、わが家の家名にもかかわります。ぜひ加禄してくださいますように」

と頼むと、家康ももっともと思い、永井を一万石の大名にした。

のち常陸国笠間で三万二千石、この子孫は大いに栄え、徳川の譜代大名として幕末までつづいた。

さて、秀次の奇襲兵団の失敗を知った秀吉は大いにおどろき、大軍を発して敗兵救援におもむいた。

「秀次のうつけ者」

と叱る一方、要塞から這い出てきた家康を、この機会に痛撃してやろうと思い、大いに行軍をいそがせた。

が、竜泉寺というところまできたときに、家康軍の消息がわかった。

「徳川殿はすでに小幡(おばた)城に籠られました」

というのである。秀次の部隊を痛打するだけして、サザエがフタを閉じるようにさっさと城に

もぐりこんでしまったのだ。

馬上、これをきいた瞬間ほど、秀吉がはげしい敗北感をもったときはないであろう。

が、口惜しがっては、その敗北感を部下に告白することになる。秀吉は、手をたたき、感嘆したそぶりをみせ、

「さてさて、花も実もある致し方かな。トリモチにも網にもかからぬ名将ぶりは、日本広しといえども家康のほかにはあるまい。こういう人を、のちのち長袴などはかせて上洛させわが家来にするのは、この秀吉よ」

といった。

秀吉の対家康戦争は、持久戦になった。両軍数万の将士は、めいめいの砦にこもりっきりで、どちらからも仕掛けない。

山内伊右衛門一豊は、秀吉から命ぜられて羽黒村の廃城を修復し、それへ他の将士とともに入りこんでいる。

ある日、陣中で、

「新右衛門、長陣になりそうだな」

郎党の祖父江新右衛門に話しかけると、

「そのことでござりまする。このたびの陣は見ものでござりまするな」

といった。実のところ、敵味方、かたずを呑むような興味で、秀吉と家康がたがいにどう出る

かを見まもっている、と新右衛門はいうのである。

「どちらも稀代の器量人であられるからな」

と、伊右衛門は、かれはかれなりにこの合戦からさまざまな智恵を学びとろうとした。

名人の対局といっていい。

どちらも並の武将とはちがって、合戦を、単に合戦としてみず、政治としてみていた。

双方、要塞線ににらみあいながら、全国的な外交を展開している。

家康は、四国の覇者長曾我部元親とすでに連絡がつき、かれを大坂に上陸せしめて秀吉の本拠を衝かせようとしていた。

さらに大坂の奥座敷とでもいうべき紀州平野も、家康方になっている。紀州平野の郷士団である「雑賀党」と連絡し、その三万の軍勢がすでに反秀吉の旗をあげていた。ついで北陸の佐々成政をして北陸秀吉党である前田利家、丹羽長秀を衝かしめ、さらに北関東の大豪族佐竹氏とも結び、芸のこまかい外交の腕を発揮している。

秀吉はさらに外交の名人であった。

家康党の佐竹氏をたくみに懐柔して抱きこみ、北陸の佐々成政に対しては越後の上杉景勝を抱きこんで牽制させ、四国の長曾我部氏の渡海攻撃に対しては毛利の水軍と淡路の仙石秀久とをもってはばませ、紀州の雑賀党の大坂攻めには部将の中村一氏、黒田官兵衛、蜂須賀家政を派遣して、道路を遮断し、家康の外交政策のすべてを封じつくしてしまった。

一方、家康の緊張をやわらげるために、

「わしはあれほどの名将をほろぼそうとするのではない。家来にするつもりさ」

と側近にうそぶき、それを、家康が送りこんでいる間諜にきこえるようにくりかえしくりかえし言った。

秀吉の外交政策最大の傑作は、家康の同盟者である織田信雄に打った手である。

信雄にとって魅力的な条件を出して講和を申し入れると、信雄はころりと参ってしまい、家康には相談もせずに単独講和を結んでしまった。もともと事のおこりは、信雄が「秀吉は織田家をつぶそうとしている。卿こそが頼りだ」と家康に泣きついてきたからこそ家康は立ちあがったのである。この軽率さは、本来の暗愚にもよるが、苦労知らずのお坊ちゃんだからこそであろう。

あっという間に、家康は、その強大な同盟軍をうしない、戦う理由もうしなってしまった。

家康はうわさでこれを聞いた。当然、信雄の裏切りと秀吉のずるさに激怒すべきところだが、使者を秀吉と信雄に送り、

「いや、めでとうござる。御和睦は天下万民のよろこびでござれば。――」

と言上させた。外交の極というべきものであろう。

秀吉は、家康と停戦した。

が、あくまでも戦闘を休止しただけで、円満な外交がひらけたわけではない。

家康は、秀吉に臣従しなかった。いよいよ国境のまもりを固くした。

そのころには伊右衛門は、秀吉のあたらしい根拠地である大坂にもどっていた。

千代が、近江長浜の知行地から大坂見物にやってきたのは、明けて天正十三年の早春である。大坂の城下では、家康に対する論議がやかましかったので、自然、伊右衛門と千代とのあいだの会話もそのことがおもになった。

「徳川様は、いよいよ意外でございますね」

と、千代はひどく興深げな口ぶりでこの話題に触れた。意外、と千代がいうのは、やすやすと秀吉に臣従するかと思った家康が、一子於義丸（のちの結城秀康）を人質として大坂に送っただけで、自分は東海の地を動かない、という奇妙な形勢を指したのである。

――家康は、おかしなひとだ。

という評判はすでにあった。小牧・長久手ではなるほど秀吉の大軍はほんの一部を家康によって破られたが、かといって、秀吉はこの次も負けるとはかぎらない。

なにしろ、秀吉は天下の主であり、家康は地方大名にすぎない。

「英雄とは、あのひとのことでしょう」

と、千代はいった。千代の眼には、家康がすばらしい男にみえてきたのであろう。

天下の七割を征覇した秀吉に対し、毅然たる独立をたもっている家康に、千代は恋に似たものを覚えた。

だけではない。

家康の疑いぶかさに、巨大な政治家を見るような思いがしたのである。懐柔の名人といっていい秀吉は、あらゆる手をつくして、家康を自分の陣営にひき入れようとしていた。

が、家康は、動かない。うかつに従えばなしくずしに亡ぼされる、とみていた。

「しかし、いまのままで徳川殿はどうされるおつもりなのか」

「きっと」

千代はいった。

「すべてを見通していらっしゃるものと思います。羽柴様にはついには臣従されるとしても、できるだけじらせ、そのあいだにほうぼうを切りとり、羽柴様の軍勢が寄せてくればそれを破り、やがては対等に近い形まで自分をもってゆき、そののちで臣従されるおつもりでしょう」

臣従でなく、合併という形にもってゆきたい、と家康は思っているようである。

「自分の値を高くしているのか」

「ホホ、うまいことをおおせられました。馬あきんどが、うんと馬を肥やしてから売りつけるのに似ているようでございます」

「観(み)ものだな」

「もともと、織田家での筋目から申しますれば、羽柴様が天下の跡目をとるよりも、徳川様がおとりになるのが順当だったのではありますまいか。信長様と義兄弟の盟を結ばれたいわば対等のかたでございましたもの」

「千代、いやに徳川殿の肩をもつ」

「いいえ、肩はもちませぬ」

「あははは、好きなだけか」

と、伊右衛門は、敏感に千代の感情を察した。千代は、首を横にふった。

「千代だけではございませぬ。おそらく天下の武将は、いま油断なく徳川様の動きを見ておりましょう。一豊様も、ご関心をお持ちあそばすように」

千代が大坂に滞在しているあいだに、この夫婦にとって悪くない変化があった。七千石に加増されたのである。あたらしい知行地は若狭国西懸(にしかた)郡であった。

「千代、よろこべ」

と、その日、伊右衛門は帰ってくるなり、いった。

千代は、伊右衛門が期待した以上によろこんだ。千代はもともと物よろこびすぎるたちで、それが彼女の美徳の一つといってよかった。

「どうだ、おれもまんざら捨てたものではあるまい。大名には程遠いとしても。——」

伊右衛門は威張った。

が、千代の内心は、その笑顔ほどにはよろこんでいなかった。

(なんと、遅々たる御出世であることか)

と思っている。

石田三成という若い男がいる。秀吉が長浜城主のころ、少年の身で見出され、その才気によってまたたくまに立身し、いまではわずか二十六歳の身で、近江水口(みなくち)四万石に封ぜられていた。

伊右衛門はもう四十の声をきこうとし、秀吉の麾下では最古参であるというのに、まだ七千石

の物頭にすぎなかった。石田三成にくらべれば、伊右衛門の不遇が、ありありとわかるのである。

「おめでとうございました。またまたよい家来をさがさねばなりませぬな」

七月になった。

羽柴秀吉は、内大臣からさらに官位をすすめられ、関白になった。

ついでながら、秀吉は武門の出だけに、最初、源頼朝、足利尊氏の先例にならい、征夷大将軍を望んだ。が、これは歴史的に源氏の家系の者が任ぜられる職で、先例主義の宮中では任じようとしても任ずることができない。

幸い、中国の毛利家に亡命して落魄の身を養っている前将軍足利義昭に使者を走らせ、その養子になり源氏の姓を冒そうとした。が、気位の高いこの没落貴族は自分の家系を売ることをこばんだ。

秀吉は当惑した。

それを見かねたのが、かねて秀吉に取り入っていた公卿の菊亭晴季である。

――関白という手がござる。

と、菊亭晴季がいった。なるほど官位からいえば関白は征夷大将軍より上である。

が、関白は公卿の最高の家格である五摂家でなければその職につけない慣例がある。

秀吉は、前関白近衛前久の猶子にしてもらい、ようやく関白になった。

関白には、諸大夫が要る。秀吉はこの諸大夫に、子飼いの部将十二人を任命した。

そのなかに、若い石田三成も入っている。官位は、治部少輔にすすめられた。さらに三成は、五奉行の一人に任ぜられた。

「三成という男、たいした出世だな」

と、伊右衛門は千代にいった。

ところが、これら三成の昇格人事のあと、年来、不遇だった古参の物頭たちにも、それぞれ抜擢がおこなわれた。

伊右衛門にも内示があった。

かれは天にものぼるような思いで、屋敷にもどった。

「千代、大名ぞ」

奥座敷で、千代を抱いた。千代も、容易にそれが信じられなかった。

近江北部において、二万石。

長浜の城を賜う。

城主になったのである。

伊右衛門が、近江長浜二万石の城主になったとき、伊右衛門は秀吉に御礼を言上したが、同日、秀吉夫人はとくに千代を大坂城内によんでいる。

千代の場合は、異例のことであった。

秀吉の妻寧々は、この七月、秀吉が関白になるとともに、朝廷から「北政所」という称号をたまわっていた。

もとは織田家の下士杉原（木下）助左衛門の次女で、秀吉が二十六歳のとき、寧々の妹のおやや

が継いでいる浅野家の長屋を借り、板の間にワラを敷き、その上にウスベリを敷いてタタミに似せ、それを座に祝言をあげた。

まず、美人といっていい。肥満質で色が白く、そのうえ子供を生まないから、としよりも若くみえる。

気さくで機転がきき、冗談がうまく、かつての織田家の将校夫人のなかでは英気溌剌(はつらつ)という点で、出色の婦人であった。

従三位北政所になってからも、むかしとちっともかわらず、侍臣のいる前で関白の秀吉とにぎやかな口喧嘩をすることが多い。双方、早口なうえに尾張言葉まるだしと来ているから、座にいる者はどれほどの喧嘩かとはらはらする。

あるとき、乱舞を見ている最中に、この口喧嘩になった。秀吉はふとその場の能役者たちに、

「これをば何と言うぞ」

と、発言をもとめた。

太鼓打ちがすかさず、

「夫婦喧嘩が、太鼓のバチにあたりましたようで」

といった。ついで笛吹きが、

「どちらが理やら非やらひゃら」

と当意即妙にいったので、夫婦がころげまわって笑った。

じつに世話な夫婦仲といっていい。

秀吉がはじめて大名になったころ、他の女性に手を出したことで寧々が嫉(や)いた。そのとき信長が、寧々へ手紙を送っている。

手紙の書きだしに、寧々から届いた進物の礼をのべている。「そちからの進物があまりにみごとすぎて、筆にもつくしがたい。このため、自分のほうから返礼をしようと思ったが、わざとやめた」と書き、つづいて寧々がちかごろ美しくなった、と書いている。

「そちらの眉目(みめ)ぶり、容姿(かたち)にいたるまで、これはこれはと思った。むかしよりは、十のモノが二十に見えた（倍になった）。藤吉郎がそれでも不足を申すよしだが、ごんごどうだん（言語道断）、とんでもないことだ。もっとも、あのはげねずみ（藤吉郎のあだな）ほどの立派な亭主は、もう二度ともとめることはできぬ。そこを考え、いかにもかみさま（妻）なりに心映えをおもおもしくし、悋気(りんき)などは病まないほうがよい」

そういう女性である。

千代は、両家たがいに織田家の侍として岐阜にいたころ、多少のつきあいがあったが、その後ずっと会っていない。

いまは身分が懸絶しているため、わざわざ呼ばれるということさえ、体のふるえるほどの光栄なのである。

その北政所が、

「おや、肥りましたね」

と、いきなりいったから、平伏している千代はどぎまぎしてしまった。

上段の間にすわっている従三位北政所が、寧々のころとちっともかわらないことにおどろいたのである。

が、利口な千代は、瞬間、微笑した。

「北政所様も、おふとりあそばしたように思います」

とやりかえした。

この時代、婦人の肉置き(ししお)の豊かさが美人の要素のひとつになっているから、かならずしもふとった、といわれることがわるいことではない。

「千代どのもかわりませぬな。よね姫は大きくなりましたか」

あっ、とおもったのは、北政所が十歳になるよね姫の存在を知ってくれていたことである。

(会う前に、お調べあそばしたか)

と思ったが、それにしても心憎いほどに人の心のとらえ方を知っている。この点、秀吉夫婦の特技といってよかった。

「はい、十歳になりました」

と、千代はさわやかに答えることができた。寧々のそういう心づかいが、人柄のせいか、人心収攬術(しゅうらんじゅつ)などとは思えぬのである。

「千代どののことは、ときどき思いだします。岐阜のころ、わたくしは子のないことをなげき、なげくたびに、千代どのもそうじゃ、とおもって自分をなぐさめておりました。いまでは、負け

ましたな」

「いえいえ、そのような」

「遠慮にはおよびませぬ。わたくしは思いもかけぬ天運にてかような席にすわる身の上になりましたが、そのようなことは女としてなんの意味もありませぬ。それよりも、子をもつこそ女の仕合せのように思います」

「北政所さま」

千代は、にこにこしていった。

「わたくしのような者が、返事にこまるようなことを申されてはなりませぬ」

「そうでした」

北政所は、千代の受け答えの機敏さに、すっかり満足している。この婦人はこういう頭の働きをする同性がだいすきであった。

千代は、「申し遅れて相済みませぬ」と前置きして、伊右衛門が長浜二万石を与えられ諸侯に列せられたことの礼を申しのべた。

「対馬守(つしまのかみ)になられたそうな」

と、北政所はいった。諸侯らしく、そういう除目(じもく)がおこなわれたのである。伊右衛門は奉行によびだされ、但馬守、志摩守、対馬守の三つのよびかたのうち、どれを好むか、と内々の相談があった。なんとなく、対馬守をえらんだのである。

「山内対馬守、とはなかなか語呂もよく、字づらもよいようですね」

北政所の話は、とりとめもない。

（なぜ、およびなされたのか）

千代は、見当もつかなかった。

自分の夫が、関白秀吉にもこの北政所にもとくに可愛がられているとは思えないのである。

「千代どの、長浜城に入れば、四季に一度ずつは訪ねてくれませぬか」

「はい。……」

「西ノ御丸に大きな山桃の木があるのです。その木は元気であるとか、お城下の惣持寺に来ている猿が、ちかごろどうしたとか、そのようなことでよいのです」

「ああ」

と、千代は自分のうかつさに気づいた。北政所が、なぜ千代をよんだかがわかったのである。

北政所が近江長浜を懐しむのはむりもなかった。

夫の秀吉が、最初に信長の大名になり、城をあたえられたのは、この長浜である。長浜城は、北政所にとって、旧居なのであった。

もっとも秀吉は、いきなり十八万石を領している。伊右衛門の二万石とはくらべものにはならないが、かといっておなじ長浜の城主であることにはかわりのないことだ。

とにかく、千代の新居になる長浜のお城は、秀吉夫婦にとって記憶すべき城なのである。

「あのお城だけは、余のひとには入ってもらいたくありませんでした。伊右衛門殿がお入りくだ

さるときいて、これほどうれしいと思ったことはありませんでしたよ」

「……」

と、顔を俯（ふ）せながら、千代はふと思った。あるいは、伊右衛門の長浜二万石は北政所の口添えではなかったか、と。

「わたくしも伊右衛門どのも、おなじ尾張でございますもの。血縁同然とおもっております」

「かたじけのうございます」

と小さく頭をさげながら、いよいよその直感に確信をもつようになった。

北政所は、人事にまで意見をのべるということはきいている。ときに、

――たれそれを大名に。

といえば即日なったこともあった。

千代が察するところ、譜代の家来もなく、また血縁や縁者もすくない秀吉夫婦は、腹心の大名、旗本をつくるのに腐心していた。自然、かれら夫婦とおなじ郷国の尾張出身者を血縁に準ずるものとして取り立てる傾向があるようであった。

ところが、秀吉はちかごろかつて信長によってほろぼされた近江小谷の城主浅井長政の遺児茶茶（のち淀殿）を愛しはじめている。

愛するだけでなく、この側室の系列の近江武士をしきりと採用し、彼らのなかから数多くの大名をこしらえた。

石田三成がその一例である。関白就任とともに抜擢した十二人の諸大夫団の顔ぶれをみても、尾

張うまれの北政所のなじみうすい近江者がまじっており、五奉行の顔ぶれをみても近江色がある。

おそらく北政所は秀吉に対し、

「御生国の尾張衆をないがしろになされるようなことでは、あなた様の手足をうしなうことになりまするぞ」

とおどしたのにちがいない。尾張閥があるとすれば、北政所がその党首というべきものであった。

千代は北政所の尾張びいきについてはうすうすきいている。

(するとこの方は恩人ということになる)

と、あらためて上段の中年女性のつややかな顔を見あげた。

「あるじ対馬守が」

と、千代は言い馴れぬ呼称で夫の名を呼び、

「お城を命がけでおまもりいたしますのは当然のことながら、わたくしも北政所様お大事のお城を命をかけておまもり申しあげるつもりでございます」

「西ノ御丸の山桃の木も」

と、北政所は特別な親しみをこめて千代にいった。

「大事に見まもってくれますように」

千代夫婦はこの日からどうやら北政所党にさせられたようであった。これがのちのち思わぬ運命になってゆくであろうことまでは、さすがの千代も予想できなかった。

伊右衛門と千代は、湖北にそびえる長浜城に入った。

(大きい)

と、千代はこの「住い」の大きさにとまどわざるをえない。

西の石垣は、琵琶湖の水が洗い、城下には中山道が走り、城の三方の窓から北近江の美田を見はるかすことができた。

千代はすこしやつれた。

いままでの小さな屋敷住いとはちがい、体がこの住いの巨大さに適合しないのである。

が、千代の仕事は気が遠くなるほど多い。

まず、二万石の身代だけの武士を召しかかえねばならなかった。人さがし、人選といった仕事は伊右衛門にはふむきで、むかしから千代にまかせきりなのである。

「ゆくゆく、百万石のご身代になるかもしれませぬ。それをまかなうだけの人材をできるだけ多くあつめましょう」

と、千代はいった。

千代は、実家のある美濃へ行き、美濃を中心に人材をあつめた。

ついでながらこの前後に侍大将の格で召しかかえられた者を列挙すると、まず乾(いぬい)彦作。千五百石。美濃池田郡東野村のうまれで、この彦作の家来で乾姓をあたえた者の子孫のなかから、幕末、乾(板垣)退助が出ている。

福岡市右衛門。もとは大和添上郡狭河のひとで、美濃に流寓していたとき、千代の眼にとまって召しかかえられた。のち家老になり、その家系から、幕末維新の福岡孝弟（子爵）が出た。

深尾湯右衛門。美濃山県郡の出身で、千代の実家不破家とは姻戚の関係にある。のち家老になり、伊右衛門の土佐入国後は一万石を領した。この家系から、幕末維新の深尾鼎（子爵）が出た。

さらにのち代々土佐藩家老になった安東家の祖太郎左衛門佐もこのとき仕えた。

千代はもっぱら、人事をうけもった。

伊右衛門は、軍事を担当している。

このほうもいそがしかった。

というのは、秀吉が北国に拠る佐々成政の征伐を開始したのは、伊右衛門の長浜入城の直後で、長浜城が地理的に北国征伐の後方陣地になったからである。

秀吉は伊右衛門に命じ、討伐に必要な兵糧弾薬をどんどん集積させた。

伊右衛門は、その番人のようなものだ。

さらに、長浜の城下を、毎日のように秀吉の軍勢が通過してゆく。

その宿割りを、伊右衛門がした。いわば、宿場役人のようなものである。

「千代、わしも数えきれぬほどの合戦に出たが、こういう仕事ははじめてだ」

といったが、こういう仕事に伊右衛門はわりあい才能があった。

実際のところ、伊右衛門は、刀槍をとっての武者ばたらきならともかく、国の運命をかけて大軍を進退させ、勝ちを戦場に決するような軍事的才能はまるで無い男である。

城主になったのがふしぎなほどで、伊右衛門に長浜城があたえられたとき、

「あの男が」

と、家中でも不審がる者が多かった。

とにかく、律義すぎるほどの伊右衛門の性格が、この兵站事務にうってつけであった。

かれの過去の武功はかれをすこしも有名にしなかったが、この兵站事務の篤実さによって、かれの評判はにわかに高くなった。

この秀吉の北国征伐中ほど、千代と伊右衛門の楽しい期間はなかった。

はじめての城主の生活だし、しかも伊右衛門のこの長浜城が兵站基地になっているため、仕事も多く、ひどく張りのある毎日だった。

「まあ、こんないそがしい目に遭ったことがありませぬ」

千代は、朝から上気していた。

城主夫人といっても、二万石程度の身代だから千代はたすきがけで夫の仕事を手つだった。

高山右近様人数五百人到着、となると、かねて書き足してある宿割りを右近の奉行に示し、さらに自分の家来に命じて宿へ案内させる。

兵糧が不足なら、倉から出させ、煙硝が必要なら、それを渡した。

人数はとめどもなく来る。城下には泊まらずに通過してゆくだけの部隊もある。そういう者には、沿道の庄屋、大百姓に命じて、湯茶の接待をさせ、兵糧、馬糧が必要なら出させ、出した分

はすぐ城の蔵からかえした。
千代は、このはじめての経験に金を惜しまなかったから、各城下を通過してゆく武将のあいだでは、
「長浜がもっともいい。山内対馬守殿はご内福じゃな」
という評判が立った。
伊右衛門は、結婚後千代がはじめてみせたこの浪費ぶりにおどろき、
「千代、気が触れたのではないか。そのようにどんどん蔵のものを出せば、いざ当城が合戦というときに負けるしかないわい」
と、眼くじらをたてた。
千代は微笑(わら)っている。
「なにがおかしい」
「ここ当分、このあたりで大きな戦さはございますまい。あったところで、大坂の関白様が後詰めでございますし、米一粒がなかったところで、おすがりすればよろしうございましょう」
「それはよい。将来にかけての貯えということもある」
「あの、まさか一豊様は、将来かけて二万石だけでおさまっておしまいになるおつもりはございませんでしょう?」
「それもまあ、そうだが」
「それならばよいではありませぬか。すえはきっと国主様でございますもの」

千代は陽気にいった。伊右衛門は苦笑するほかしかたがなかった。
陽気といえば、これは千代のもともとの性分だが、城主夫人になってからは、少々はめがはずれたような気配がないでもない。
そのせいか、なま傷の絶えまがなかった。城郭内の急傾斜な段ばしごを二、三段踏みはずして落ちたり、針上手の彼女が、伊右衛門の白小袖のえりを背に縫いつけてしまったり、尋常ではない。
「千代、どうかしたのではないか」
伊右衛門は、一日に一度はにがい顔をしないわけにはいかなかった。
「いいえ、普通でございます。千代は落ちついております」
「それそれ、そういうことをわざわざいうことからしておかしい。以前のそなたは、早口の繰り返し言葉などはいわなかった」
とにかく、千代がいくら落ちついているつもりでも、うまれてはじめての城主夫人の経験というものは、彼女を多少変化させた。
伊右衛門のほうがむしろ、百年城主をつづけてきたように、地味でおちついているのである。
千代はとにかく、幸福だったといえる。
——長浜の春と秋までが一番たのしうございました。
と、晩年になっても、千代はいった。
しかし、千代の長浜時代を一変させるほどの異変が、秀吉の北国征伐もおわったこの年の冬に

おこった。

あとから人の話などをきくと、この異変にはさまざまな前触れがあったらしい。

その数日前、城中から、ねずみが居なくなったというのである。自然、猫もいなくなった。

千代は、あとで思えばなるほどねずみが消えたようにも思われるのである。

数夜、夜鳥がなきさわいだという。それだけでなく、城下ではしきりと犬の遠吠えがきこえ、そう言われれば千代にも、

(変だな)

と感じた記憶がある。

もっともまざまざとおぼえている記憶は、その数時間前、城内の森で雉(きじ)の夜啼きがやかましかったことである。

「おおかた、狐におそわれているのでございましょう」

と、よね姫の乳母の初野がいった。初野は足軽頭大石主馬(しゅめ)の妻女で、うまれるとすぐ奉公にあがった。

「今夜はさびしいから、よね姫も初野もわたくしの寝所でやすみませぬか」

と、千代はいった。

伊右衛門が留守なのである。京都に滞在中の秀吉のもとに伺候していた。

ところが、よね姫は、寝所が変わるのはいやだという。

「お母様こそ、わたくしたちの部屋へいらしってください」

と、十歳のよね姫はいった。

「ではそうしましょう」

よね姫はよろこんだ。子供にとって、変化がいちばんうれしい。彼女にとって、自分の部屋に母親という客を迎えて泊まるというのは、平素の習慣にないことだった。

「ではお母様、お待ちしておりますから、お早くに」

と、よね姫は初野につれられて部屋を出て行った。

よね姫が住んでいる建物は、伊右衛門夫婦の部屋からは、廻廊でつながれて、別棟になっている。

千代は、手みやげの菓子を用意し、すこしおくれて、その建物を訪ねた。

廻廊を通らず、庭へまわり、おどけて旅人のまねをした。

念の入ったことに、千代は市女笠(いちめがさ)をかぶり手に竹杖をついている。

「よね姫様、ここはよね姫様のおうちでございますか」

「はいはい、どなたでございます」

と、紙障子のむこうからそんな声がきこえてきた。

「行き暮れて難渋している者でございます。一夜のやどをお貸しねがえませぬか」

「生国(しょうこく)は、どこでございます」

「はい、美濃でございます」

「まあまあ、美濃から参られたのでございますか」

「はい」

といってから、千代はおかしくなった。
よね姫はこのあそびがすっかり気に入って、なかなか、なかへ入れてくれないのである。
外は、寒い。
城内の森で、雉がしきりと鳴いている。

そのあと、三十分ばかり、千代はよね姫を相手に、お伽草子を読んでやったり、自分の子供のころの話をしたりした。
「ええ、お母様は、よね姫のお年ごろにはもうお父様はいなかったのです。討死なさったものですから。それにくらべると、よね姫はお仕合せですね」
そんなことをしゃべっているうちに、千代は不安でたまらなくなった。
理由は、わからない。
相変らず、森で雉がなきさわいでいる。その声が、わけもなく千代を不安にしているのかもしれなかった。
「初野、胸さわぎがしませんか」
「いいえ、そのようなことはございません」
初野は、いつものこの女のゆっくりした物のいい方であった。
「よね姫はどう?」
と、今夜の千代はどうかしていた。十歳のむすめにそんなことをきいても、満足な返答がえら

れるはずがない。
「なにが、どう」
と、よね姫は小首をかしげた。
「いいえ。……」
千代はさすがに、苦笑している。その様子に、
「奥方様。——」
と初野はさすがに声をたてて笑いだした。
「お気のせいでございますよ。殿様がお留守でございますから、なんとなく御不安なのではございますまいか」
「あ、火の用心」
伊右衛門からいわれていたことをおもいだした。
城の警備は、各丸に屋敷をもつ家老たちが責任をもっている。だから、千代は奥だけを取りしきればよかった。
宿直（とのい）の侍女たちをよんだ。
「三人一組ずつで火の始末を見まわってください。すぐ」
言ってから千代も腰を浮かしていた。
自分の眼で、奥の建物の内外を見まわらなければ気がすまなくなったのである。
千代は、どうかしていた。

「薙刀を」

そう命じて持って来させた。夜警にまわるとき、原則として女の場合薙刀をもつことになっていた。

自分で手燭をともして立ちあがった。

「お母様、いらっしゃらなくてもよいではありませぬか」

と、よね姫がいった。

「よね姫は、もうやすむのです。すぐもどってきますから」

千代は、廻廊を渡った。別棟のぬれ縁まできたとき、ぐらっ、と体が沈んだ。

同時に身のまわりで大音響がきこえ、やがて柱が折れ、建物がすーとむこうへ泳いだ。瞬間、城が裂けた。千代は失神した。すぐ気がついた。が、体が動かなかった。

屋根が、千代の体を埋めているのである。

激震はつづいている。有名な「天正地震」が進行しはじめたのである。

天正十三年十一月二十九日の夜のことであった。

伊右衛門が長浜二万石に封ぜられて、四ヵ月目のことである。

（よね姫が。――）

千代は、世の常の母親とおなじように、その懸念のみが体じゅうを掻きむしった。

夢中で、体を動かした。幸い、右肩の上の角材を押しのけると、やや自由になった。

千代はやっと這いあがった。

地は、まだゆれている。

千代は、倒壊した建物の上を歩き、何度かころび、二度も古釘で足を踏みぬいた。

血だらけになった。

「よね姫。――」

叫んだ。答えがない。

そのうち、人々が駈けあつまってきて、千代のまわりをたいまつで取りまいた。

「奥方様、ご無事で何よりでございました」

「よね姫が」

うわずっている。

人々は、そのことに気づいた。

「さがしてください」

千代は、駈けた。

が、十歩も行かぬうちに足がすくんだ。

たったいままで闇の中にそびえていたよね姫の居室のある棟が、地に落ちている。

ひとびとがあつまってきて、瓦や材木をはらいのけつつ、よね姫をさがした。

作業は小一時間ほどつづいた。

やがて、よね姫が発見された。

すでに死体になっていた。
そばに、乳母の初野が死んでいる。どちらも倒壊と同時に即死したものらしかった。
（死んだ。――）
と知ったときの千代の取りみだしかたは、こういう場合の普通の母親とかわらない。
「よね姫」
と、その体をゆさぶりながら、去って行った魂を呼びもどそうとした。何度も何度もそのむなしい動作をつづけながら、やがてわれにかえった。
そばに、中年の武士が平伏している。
その者が、初野の亭主の大石主馬であることに気づき、ふと初野の死体を見た。
そのままに放置されている。
みな、よね姫の死と千代の歎きに遠慮して、初野の死体に手をふれることを遠慮しているのである。
千代は、悲しみを殺さねばならなかった。
実のところ、初野の死をも悲しむ余裕などいまはない。
が、こういう場合、戦国の世の統率者というのは、家来の心服をかち得るために偽善者にならざるをえなかった。
「大石主馬」
と、千代は平伏している亭主をよび、よね姫の死体をすてて、初野のそばに寄った。

「かつぐのです、手を貸しなさい」
千代は、初野をだきおこし、主馬にその足をもつように命じた。
「も、もったいのうございます」
と、主馬をはじめ、家来の者が駈けよったが、千代はきかなかった。
「さ、早く」
と、亭主をせきたて、そこから十間ばかりはなれたムシロまで初野を運び、しずかに横たえた。
そのあいだに、たれが持ってきたのか錦の小袖がよね姫の死体にかぶせられていた。
夜があけて、僧がきた。
翌日、京から伊右衛門が駈けつけてきた。
伊右衛門は、ぼうぜんとした。
この男は三日間、お経を誦（ず）するのみで、ついに口をきかなかった。よほどの衝撃だったのであろう。
よね姫を喪（うしな）って、この夫婦はひと月あまり廃人同然になった。
ようやく夫婦でまとまった会話がかわされるようになったのは、その年も暮のことである。
「禍福はあざなえる縄のごとしというが、われらは大名になって思わぬ仕合せを得たかわりに、天はよね姫を奪った」
伊右衛門はそういっては、泣いた。

男親のくせに、千代が意外に思うほど伊右衛門はだらしなかった。
「出家をしたい」
とさえいった。
千代は、夫の歎きがあまりにもとめどがないため、だんだん自分が歎いているわけにはいかなくなった。
「一豊様、お気を丈夫にお持ちくださりませ」
と、はげまさなければならなくなった。
歎いていることができなくなった。
「左様にお歎きあそばすと、死んだ者の冥土のさわりになると申します。いつまでもお歎きあそばしませぬように」
子供をたしなめるように、いった。
「しかし千代、よね姫を奪られてしまえば、われらはもはや生涯、子無しになる。たれのためにこのさき、生きて働くのか」
「左様におおせられずに」
千代は、もてあました。
この夫婦は、よね姫の菩提をとむらうために宗旨の日蓮宗を改宗して禅宗に帰依し、この翌年、京の花園の地にある臨済禅の妙心寺本山に塔頭を建て、当時高名の禅僧南化禅師を住持にむかえて供養している。

が、こういう間にも、時代がはげしく変転している。
仏事ばかりをしているわけにはいかなかった。
家康がなお東海に鎮まって、豊臣の天下に対し一敵国をなしているのである。
この間秀吉は、家康の機嫌をとるために、あらゆる外交手段をつかったが、そのもっとも珍妙な手は、婚姻政策であった。
秀吉には、異父妹がいる。朝日姫といい、佐治日向守という凡庸な武士の妻であった。美人ではなく、老いてもいた。四十四歳であった。
この朝日姫を家康にあわせようと思い、夫の佐治に、
――なにごとも天下治平のためだ。
と説得し、離縁させた。佐治はこのことを恥じて切腹して果てている。
家康は、この婚姻をよろこばなかったが、結局は受けた。そのかわり秀吉の使者に対し条件をつけた。
「わが家にはすでに世継ぎ（のちの二代将軍秀忠）がござれば、もし今後朝日姫との間に男子が出生するとも、その者には家督をつがせない」
ということであった。
秀吉は諒承し、天正十四年五月、婚礼の行列が美々しく東海へ下向した。
それでも、家康は秀吉の真意を疑い、自分の根拠地から動かず、上洛して秀吉に拝謁しようとはしなかった。

「家康様とはなんと強情なかたでございましょう」
千代も、感心した。
家康の強情ぶりもみごとだが、その家康を手捕りにしようとしている秀吉の心境はさらにおもしろい。

伊右衛門夫婦は、秀吉と家康の虚実をつくした大芝居の観覧席にいる。それを観ることによって、わずかによね姫をうしなった不幸をわすれることができた。
秀吉は、しつこく家康に対し、上洛をすすめた。
家康は、辞を低くして、なお応じない。上洛は、臣従である。故信長に対してさえ、同盟者としての対等の位置をたもってきた家康は、信長の足軽あがりの秀吉に臣従するなどは、考えられぬことである。
それだけではない。
上洛は死である、ともいえた。取り籠めて殺されるおそれが大きいのである。
家康は、頑として出てこない。
「なんと、三河殿は強情な」
と、千代は感嘆し、そういう家康に、秀吉に見る以上の男性を感じた。
秀吉は、まだ九州、関東、東北を残しているとはいえ、すでに京をおさえ、関白となり、日本の中央部で三十余国を範囲とし、信長をはるかに越える支配者になりつつある。

家康は、五ヵ国のぬしでしかない。
その男が、秀吉の懇請をあくまでもはねつけているのである。
ついに秀吉はおどろくべき手を打った。自分の生母の大政所を家康のもとに人質につかわし、それによって上洛後の家康の生命を保障しようとまで申し出てきた。
これには秀吉の重臣たちが驚き、反対し、異父弟秀長などは涙を流して諫止した。
「わが母を質にして相手の機嫌をとるなどは、匹夫も恥じるところでござる。なぜ天下の大軍を動かし、越後の上杉景勝と呼応してかれに家康の背後をおびやかしめつつ、正々堂々家康を討伐し給わぬのか。とにかく、為さりようは、先例にもないことでござる」
そういった。が、秀吉は鼻の頭にしわを寄せて笑い、
「わしはいままで日本の先例にないことをしてきた。この一事にかぎったことではない。わしが先例になるのだ。まあまあ、見ておれ。わしを小牧・長久手で痛い目に遭わせた大将を、弾丸刀槍を用いずに手取りにしてみせるぞ」
秀吉の実母は、三河岡崎にくだった。
家康はそれを城内にとどめ、ついに上洛に決し、天正十四年十月二十日、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政らを諸将とする一万の軍勢を率いて西上した。
対面は京ではなく、大坂城内で行なわれることになり、家康は二十六日大坂着、豊臣秀長の屋敷を旅館とした。
明二十七日城内で対面、ということで家康が秀長邸でくつろいでいるとき、夜陰密かに訪ねて

きた人物がある。
なんと、秀吉である。
「三河殿は、もはやお寝みか」
といいながら、二、三人の小姓を連れたまま、邸内の居室に通った。
家康がおどろいてあいさつしようとすると、秀吉は大きく手をふり、
「いやいや、あいさつは明日。今夜はむかしの藤吉郎にもどってかるがると徳川殿にお願いに来申した。いかに。願いをかなえていただけようか」
「おそれ入りまする。この家康にできますことならばいかようにしても叶えて差しあげとうござる」
家康は、秀吉という男が薄気味わるくなっている。いま、秀吉を殺す気があれば簡単に殺せるというのに、当の秀吉は意にも介していないらしい。

秀吉は膝を進めて家康の手をとり、
「このたびの御上洛、忝のうござる。おかげさまにて、この秀吉、名実ともに天下をとったことになりますぞ。いや、取らせていただいた」
その手を押しいただいた、というから秀吉も非常な芸達者である。やがて秀吉は持参した弁当をひらき、酒も肴も自分で毒見してみせ、家康にすすめたあと、声をひくめた。
「されば、今夜、単身うかがったわけは、あすの対面のことでござる」

秀吉はさらに声をひくめ、家康の耳もとでささやいた。
「ご存じのとおり、秀吉は匹夫よりあがってこんにちの地位を得た。なるほど、官位は人臣をきわめ、天下の兵馬の権をにぎり、四海の英雄豪傑の半ばを家来にしたとは申せ、ありようは故主織田殿の旧臣ばかりで、むかしの同僚朋輩どもでござる。そのため、かれらは心から秀吉をうやまう実がござらぬ」
「……………？」
何を言いだすのか、と家康はおもった。
「さればそこでおたすけ願いたい。あすの対面には諸大名が登城して列席します。そのとき、徳川殿はぜひぜひ、ごいんぎんに敬礼してくださらぬか」
「致しまするとも。そのつもりで上洛したのでござりまするので」
「それはそれはありがたい。そのときこの秀吉は、すこぶる尊大のていで答礼いたしまするゆえ、お気を悪くしてくださるな。諸大名よりみれば、徳川殿でさえ秀吉めにああも鄭重に敬礼しなさる。秀吉もまた、いかにも譜代の家来に対するように答礼する。されば秀吉は敬うべきものかな、と自然々々とわかりましょう」
「ははあ」
家康はさすがに笑いだした。
秀吉は家康の背をたたき、
「頼み参らせまするぞ。このこと、あらかじめ打ちあわせするために参った。なにごとも天下を

静めるためと存ぜられ、ひとえに頼み申す」
「痛み入ります」
家康は、このときはじめて秀吉に好意をもったといっていい。
「なにしろそれがし、御妹君と添い奉り、しかもこのようにお膝もとにのぼって参りました以上は、何事も関白殿下のよきようにはからうつもりであります」
「それで安心しましたぞ」
秀吉は大よろこびで帰って行った。
その翌日、大坂城の大広間で秀吉とのあいだに正式対面がおこなわれた。
家康は、平伏した。
そのいんぎんさ、どう見ても秀吉の威に屈し臣従を誓いにきたすがたである。
秀吉は打ちあわせどおり尊大に答礼し、そのあと、新庄駿河守に家康の献上品の目録を読みあげさせた。太刀一振、駿馬十頭、黄金百枚、などであった。
そのあと、酒宴になった。
秀吉はこのとき、赤地に桐唐草（きりからくさ）を縫いつけた陣羽織を着ていたが、家康がたわむれにそれを下賜されんことを乞うた。秀吉は「これはわしの軍用の品だから呉れてはやれぬ」とことわると、家康の演技はさらに秀抜であった。「それがしが幕下に侍（はべ）って犬馬の労をとりまする以上、殿下にはもはや甲冑を着せませぬ」といった。
秀吉は手をうってよろこび、陣羽織をその場でぬいで与えた。

秀吉

秀吉が京に聚楽第（じゅらくだい）という華麗宏壮な第館を築こうとおもいたったのは、千代がよね姫をうしなった翌年、天正十四年四月のことである。
秀吉は、ひどく建築好きであった。この点家康とちがっている。
家康は、信長、秀吉とちがって、実利一点ばりの男で、芸術への嗜好心（しこうしん）がない。こういうあたり、家康の印象は、信長、秀吉にくらべると、ひどく貧相になっている。田舎の実篤な働き者の旦那に似ている。
家康の美徳は多い。
が、いずれも倹約、用心深さ、実直、といった自分一個の自衛的な美徳ばかりで、世間に対してどうこうというひろがりのある美徳ではない。この男の面白さはそこにあるだろうし、かれが後世にいたるまで人気をもたなかった理由は、そういうところにある。
とにかく、家康一代で残した建築上の遺産といえば、岡崎、浜松城といった田舎の実用的な小

城ぐらいのもので、江戸城といっても、現今の千代田城で想像されるようなものではない。

余談から余談になるが、家康が秀吉の大名として江戸に入ったときの江戸城といえば、草ぶきの小城であった。その草屋根も、柿（こけら）ぶきでさえなく、日光ソギ、甲州ソギといった草でふき、その上に火よけの泥をぬったりしたから、その湿気のために畳敷物はすっかり腐り、玄関なども、古舟の板を二枚かさねて板敷がわりにした程度であった。

家康は、それに手を加えた。しかし天守閣も作らず、西ノ丸だけを作った。

天下をとってから、大いに規模をひろげるべく西国諸大名に手伝いを命じたが、このときはすでに家康は駿府（静岡市）に隠居し、二代将軍秀忠が工事主宰者になった。江戸城が、将軍の居城として名実ともにその規模威容がそなわったのは、三代将軍家光のときからである。

だから、家康の作品とはいいがたい。

秀吉は、ちがっている。

その側室のために、淀城をつくるような建築道楽な男である。山崎の野で明智光秀を撃滅したとき、すでに大坂城を計画していた。

大坂城は、世界的な規模で造営された。これが竣工するや、かれみずから南蛮人を案内して、城内を見せた。よほどの建築好きでなければできないことである。かれ一代の建築上の作品といえば、信長の部将時代の長浜城はのぞくとしても、大坂城、聚楽第、伏見城、淀城、肥前名護屋城などがある。大坂城以外の四つの城は、攻防のための実用城ではない。

建てたいがために建てた遊び城といっていい。

秀吉は、遊び人であった。秀吉のこういう華麗な無駄が、無駄のない家康よりも後世の人気を得るゆえんであろう。

さて、聚楽第。

これが、京の旧大内裏あとに着工しはじめたのは、天正十四年四月二十三日のことである。

千代も、そのうわさは聞いていた。

「極楽のようなお城ができるそうな」

そんなうわさが高い。

伊右衛門は、京、大坂へ伺候しているときが多い。

長浜城に帰ると、京、大坂での見聞などを千代にくわしく語るのである。

千代は、聞き上手であった。

聞き上手にほだされて、家来とさえ終日ものもいわない無口な伊右衛門が、千代にだけは、世間なみ以上の饒舌（じょうぜつ）家になった。

「もう、聚楽第は、どれほど出来ました」

「金銀を惜しまず、夜を日についでの工事がおこなわれている。京の者は、公卿から庶人にいたるまで、この世でお浄土が拝める、といまから楽しみにしているようだ」

「でも、秀吉さまは大坂城をおもちなのに、なぜ、京に聚楽第をおつくりになるのでございましょう」

「そういえば、贅沢なお人だな」

伊右衛門は、それだけの感想しかない。

が、千代はこう思っていた。

建築は、天下のものなのである。秀吉はこの大工事によって京の土地をうるおし、竣工すれば、ここ数百年貧乏暮らしをしてきた公卿たちや、戦野から手取りにして家来にした天下の英雄豪傑に華麗な礼服を着せて荒ぎもをやわらげさせ、聚楽第をもってそれらの社交場にしようと思っているのにちがいなかった。

遊びではあったが、秀吉はちゃんとその中に政治を含めている。

「出来あがれば、わたくしたちも見せていただけましょうか」

「そのおつもりだそうだ。北政所（秀吉正夫人）が、千代ら大名の奥をお招びなされるということをきいている」

そのうち、聚楽第の工事進行とはべつに、秀吉は九州進攻というかれの統一事業の仕上げを開始していた。

九州、といっても、要するに薩摩の島津征伐である。島津氏は戦国の風雲に乗じ、薩摩から範囲を次第に北へひろげはじめ、その勢威は九州全円に及ぼうとしていた。

その島津氏が、秀吉に従わない。

島津氏は、九州の古豪の大友氏をしきりとおびやかしている。大友氏はその救援方を秀吉に頼んできた。

秀吉は、救援するつもりであった。

が、九州ともなれば、秀吉にとってかつて試みたことのない大遠征になる。麾下の兵力のほとんどを動員しなければならなかった。

が、秀吉はほんの最近まで動けない事情があった。

東海に家康がいたからである。

京、大坂を留守にすれば家康があるいはその留守を衝くであろう。

秀吉が、その身関白でありながら、東海五カ国の領主家康に、辞を低くして和平を願わねばならなかったのは、ひとつは九州のことがあったからである。

家康からの脅威は去った。

秀吉は、京に聚楽第を造営しつつ、一方ではかつてない規模の軍事行動をおこそうとした。

諸大名に軍令がくだった。

部署もきまった。

「千代、千代」

と、伊右衛門が帰ってきて告げたかれの部署は、戦闘部隊ではなかった。

京都留守居である。

（それでもいい）

と千代はおもった。伊右衛門は戦闘よりも後方の留守居にむいているようである。

千代が秀吉の建築好きに興味をもたざるをえないのは、山内家じたいが、建築に追われているせいでもあったろう。

長浜城の修理もしなければならないし、大坂屋敷も造営しなければならなかった。

それに、京の聚楽第のまわりには諸大名が京都屋敷をつくるといううわさがあるから、山内家でもつくらざるをえない。

(物いりなことだ)

とおもう。万石以下の身分なら、こういう出費はないはずである。

小大名の家計というのはつらいものだ、とおもった。

もっとも山内家が大名になってからは、勘定奉行がおかれて、家計のことは千代の手から離れている。

しかしその勘定奉行を統理しているのは伊右衛門こと山内対馬守一豊で、その伊右衛門が一から十まで相談する相手は千代だから、千代は現実上の長浜城主といっていい。

屋敷を造営する費用にも、あたまを痛めねばならないのである。

伊右衛門には、頭痛のたねだった。

「千代、京都の留守居をつとめる以上、早く屋敷をつくらねばならんな」

「まず、縄張りをすることでございます。費用など、なんとかできましょう」

「千代、当分、ご加増はあてにならぬぞ」

軍役に出るわけでないのだ。戦場の功名はのぞめないのである。

「関白さまは末広がりの御運でございますもの。九州を御平定なされば、こんどは関東、奥州でございましょう。一豊様のご所領がこれっきりということはありませぬ」

「それもそうだが」

伊右衛門は、千代の強気にあきれている。

「京都のお屋敷は、分不相応なものを建てましょう」

「おいおい、費用がないという話をしているのに、なんということをいう」

「関白殿下は、大気（たいき）なことがお好きでございます。山内対馬守はまだまだ望みが大きいとみえる、ときっとお思いあそばすにちがいありませぬ。さればつぎはもっと大きな役目を頂戴できましょう」

千代は、このさい、妙に節約して小ぶりなことをするより、思いきって無理をしたほうがいいと思っていた。

「われわれは、いつまでたっても内々は火の車だな」

「火の消えたようなことよりましでございましょう」

「千代にはかなわない」

伊右衛門は、苦笑した。

千代は、秀吉の趣味に迎合しているわけではないが、その熱気にあてられている気味は多少ある。

千代が伊右衛門にきいたところでは、秀吉はこの正月、純金の家をつくって、正親町（おおぎまち）天皇の第

一皇子誠仁親王に献上したという。

玩具ではない。本物の茶室である。天井も敷居も障子の骨もすべて純金であった。そこで、茶を点てることができるのである。

秀吉は、佐渡金山を持っている。かれが天下をとるとともに湧くように佐渡ヶ島が黄金を産みだしたのだから、この男ほど運のいい男はないのだが、それにしても純金の家をつくるなどは、いかにも秀吉らしい。

伊右衛門の京都屋敷は、地を室町のあたりにえらんで着工された。

当時、諸国の大工が京に集まり、いたるところで作事、普請がおこなわれていた。どの大名もあらそって屋敷を建てている。

工事なかばで、千代は京都に移った。

さらに大坂屋敷に移った。どちらも工事中で、なかば監督の目的も兼ねている。

そのころ九州出陣の諸侯がぞくぞくと進発してゆく。

秀吉とその親衛隊の出陣は、まるで華麗なショーのようなものであった。

馬数三千、人数二万五千。

黄金好きの秀吉は、駿馬十二頭をはなやかに飾って、その背に黄金を背おわせた。

武者たちの綺羅をかざった武装はもとより、女房どもも出陣させ、その輿、服装、けんらんたるものであった。

秀吉は、唐冠のカブトに緋オドシの鎧をつけ、赤地錦の直垂を着、白馬に乗っていた。

千代は、それを大坂城内で見送り、その数日後に、京都へもどった。

秀吉の留守のあいだの総大将は、オイの秀次である。

留守大名は、加賀の国主前田利家をはじめ、中村一氏、一柳直末、堀尾吉晴、山内一豊らで、その兵力は三万である。

かれらは、京都に駐留した。

「千代、たいくつなことだ」

と、伊右衛門は、いった。秀次の屋敷に伺候するほか、用がないのである。

が、千代にとってこの期間は、ひどく楽しかった。

結婚後、戦乱につづく戦乱で、伊右衛門はほとんど戦いに出て留守ばかりをさせられてきたし、それに伊右衛門の身の安危を案じて心の安まるときがなかった。

「千代は、楽しうございますわ」

人がかわったように毎日外出した。

「千代、都暮らしをしてどうかなったのではないか」

と伊右衛門が本気で心配したほどだった。

千代は、京の名所を見てまわった。

つてを求めて、門跡寺院などに保存されている宝物類を見せてもらった。

とくに、古い時代の衣類に興味をもった。

むろん、あたらしい織物にも興味がある。

舶載品の唐織（からおり）なども、大すきなようだった。

「千代は、妙なものが好きなようだな」

と、伊右衛門はいった。

かねがね自分の妻が衣料がすきだとは思っていたが、これほど強い関心を示そうとはおもわなかったのである。

かといって、それらの布をどんどん買い入れるほど、千代は豊かではない。

見るのが好きなのである。

縫うことも好きであった。好きなだけでなく、柄、生地の見たて、縫いのたしかさなどは、尋常ではない。

千代には、そういう点で、万人に一人といっていいような天分がそなわっているのかもしれなかった。

千代は、さまざまな唐織の裂（き）れを際限もなくあつめはじめたのである。

「いったい、どうするのだ」

伊右衛門は、あきれた。

「手すさびをします」

と含み笑いをしているが、なにかこんたんがあるらしい。

ひまさえあれば、縫いはじめた。

ある日、なにげなく千代の部屋に入った伊右衛門が、

「あっ」

と声を出して、立ちすくんだ。

衣桁（いこう）がある。

そこに、地上のものともおもわれぬほどの美しいものがかかっている。

小袖であった。

「千代、これはそちが縫ったのか」

「はい」

千代は伊右衛門のために茶の支度をしながらうなずいた。

（これが？）

あのやくたいもない小裂れがモトなのか。

千代紙という。さまざまな色を四角い紙に刷りだした絵紙で、のちの世の女児のあそび道具だ。あるいは、千代のこの小袖作りがおこりかもしれない。

むろん、紙ではない。唐織の裂れなのである。裂れだが、形は後世の千代紙とそっくりなもので、その真四角なものを千代はたんねんに縫いあわせて小袖に仕立てあげているのである。

色の配合がおもしろかった。

配合の妙のために、全体がおもいもよらぬ色調にできあがっている。

「そなたは、妙な才があるな」
伊右衛門は、ぼんやりしている。つばを何度ものんだ。眼の前にいる妻に、別の人格を発見した新鮮さに打たれているのである。
「つい、退屈でございましたから」
謙遜でいっているのではない。むかし、米をはかるマスを裏返してマナイタの代用にしたころとちがい、小なりとはいえ大名の奥方なのである。
家事から解放された。
そのあまった時間が、千代にあたらしい人生を拓(ひら)かせたのかもしれない。
「こ、これを着るのじゃな」
さぞ、美しくみえることであろうと伊右衛門は無邪気によろこび、千代もつりこまれて微笑したが、しかし、
「わたくしは着ませぬ」
といった。
伊右衛門はおどろいた。
「着もせぬ小袖をつくるとは、どういうことだ」
「道楽」
千代はわらっている。
伊右衛門は、いま一度、千代のあたらしい面を知らされた。

「えっ、人にくれてやるのか。たれにやるのだ」
「これの似合うひとに」
千代はたしかに変わっている。
その翌日から、物詣(ものもうで)と称して侍女数人をつれ、京の町を歩きはじめたのである。
清水寺、北野天神、誓願寺、東寺、祇園社、三条の往還、などを歩き、この小袖に似あう若い娘をさがした。
三条の往還で、眼をみはるような美しい娘に出あった。
麻の粗衣を着ている。このあたりの町娘のようであった。
「そなた」
と、千代は虫の垂れぎぬをあげて、娘をよびとめた。
娘は、仰天した。
この小袖をやる、というのである。

千代は、たしかに変わっている。
京の町の娘に呉れてやるために、彼女の小袖作りはひどくいそがしくなった。
意匠を考え、侍女を動員して、縫わせた。日に一枚は出来た。
「これは色白で丸顔の娘に似合いますね」
といいつつ、町へ出てそれにあう娘をさがすのである。

「あのこは、眼が大きすぎる」
「いや、あのこは、この意匠にはふとりすぎているようです」
などと、物色はむずかしい。
（なんのために千代はあんなことをするのだろう）
伊右衛門には、いまひとつ、なっとくできなかった。
芸術的意欲からか。
おそらくそうでもあろう。苦心して作ったものを自分が着るだけならば、芸術的な表現欲は満足できない。人にあたえて町を歩かせてこそ表現の満足は完結するのである。
（それもあろうが）
ひょっとすると、亡いよね姫への供養のつもりかもしれなかった。
思いあわせてみると、よね姫が存生のころ千代は、
——姫が大きくなれば、きっとこういう色合いの小袖が似合いましょう。
とか、
——婚儀のときの衣裳はぜんぶ千代が縫ってあげたい。
などといっていたようであった。
（小袖供養のつもりか）
とすれば、艶な思いつきではないか。そういう供養はきいたこともないが、千代はいかにも千代らしく独創的に思いついたものにちがいない。

（風変りな内儀どのだ）
わが妻ながら、そう思うのである。しかし伊右衛門はわるい気がしなかった。
従六位対馬守になっても伊右衛門はこの妻が自慢であった。
世間でもそういった。
「対州殿に過ぎたもの」
などとかげ口をたたいた。このかげ口は伊右衛門にとって不愉快ではない。
千代は、その作品の二番目のものは、紫の色調で仕上げた。
紫は、なかなか着こなせないものである。
（さて、たれにあげたものかしら）
また、千代は市女笠をかぶって、京の町を歩きはじめた。
聚楽第の工事場に行ってみた。
一条の南、二条の北にある。
東は大宮を境にし、西は朱雀通（いまの千本通）を限りにしている。
七分どおりできあがっていた。
殿閣は七宝をちりばめ、諸国から名木奇石をあつめ、秦の阿房宮、前漢の未央宮におとらぬ宝閣といわれた。
多勢の工匠が立ち働いている。運ぶ者、削る者、組みあげる者、そのあいだに立ちまじって、煎茶を運んでいる女たちもいる。

多くは、工匠の妻女、娘らしい。
千代は、一人の娘に眼をつけた。
大床几の上に緋毛氈を敷き、その横に大茶釜に湯をたぎらせ、疲れた工匠が来るとひしゃくをもって茶をあたえている。

色が、透けるように白い。
頬がやや伸びているが、ひきしまった唇もとがその欠点を救っている。
手が、華奢であった。そういう手が、なによりも紫の小袖にいい。
(似合う)
千代は、胸がおどった。
「もうし」
——え？
という表情で、娘はふりむいた。
可愛い驚きが、眼の表情にある。
千代の行装をみてそれが容易ならぬ身分の女性と気づいたらしく、草履をぬぎ、身を沈め、膝を地につけた。
千代はわざとこまった表情をしてみせた。
(ここがむずかしいのだ)

とおもうのである。
小袖を与えるにしても、唐突にいっては相手は変におもうであろう。気味わるく思うかもしれない。施し、ととられたくもないのである。
千代にすれば自分の作品を着てほしいので、いわば頼みこむ立場だと思っていた。
「おねがいがあるのです」
と千代はいった。
「聞いていただけますか」
「どのような……？」
娘は、幸い、わるびれもせずにはきはきした態度でいった。
「いいえ、ご迷惑をおかけするようなことではありませぬ。ちょっとそこの寺の方丈でも借りましょうか」
娘は、返事にこまっている。
「来てくださる？」
千代は、明るい声でいった。かえってあっさりといったほうがいい。このあたりをねっとりとやると、とたんに薄気味わるい印象を与えることを千代は知っている。
「なんのご用かは存じませぬが、わたくしでお役に立つことでございましたら」
と、娘は千代に好意をもってくれたらしい。

千住院という尼寺がそばにあった。

門を入ると、椿が白い花をつけている。秀吉が好きなために、当節はやりの庭木であった。

方丈に通された。

「これです」

と、千代は小袖をとりだした。

娘はその美しさに、魂をうばわれた様子であった。そのため、自分がいまからどういう運命に見舞われるか、という不安をしばらくわすれた。

「あなたに差しあげます」

「えっ」

娘は、疑わしそうに千代をみた。

千代は、娘の不安を消すために、思いきって明るい声を出さねばならなかった。苦労なことである。

「わたくしが、作ったのです。たれか似合うひとに着ていただくために」

「はあ」

娘は、疑いを濃くした。千代はあわてた。狂人と思われてはたまらない。

事情を話した。

「物好きでしょう?」

と、千代は声をたてて自分を笑った。

「あなたなら、とても似合う」

着せた。

別人が誕生した。

娘は、自分の姿を何枚かの手鏡でみて、恍惚（こうこつ）とした。

千代から紫の小袖をもらったのは、石川承雲という都で高名な宮大工の娘であった。

加乃

といった。

加乃はすぐ父に報らせた。

「なんという家の奥方か」

石川承雲は、気むずかし屋で知られている。

かつて信長が内裏の修復をしたとき、棟梁（とうりょう）の一人にえらばれ、日向守を呼称することをゆるされたほどの男である。

気位も高い。

「狂婦ではないか」

「いいえ、そのような方ではありませぬ」

「では、そなたは施しを受けたのじゃな。石川承雲の娘ともあろう者が施しを受けるとは父の名を辱しめる気か」

当時、棟梁とは大そうな見識のあったもので、小大名ぐらいはなんとも思っていない。
「返して来い」
といった。
加乃は、当惑した。
「どこのどなたとも存じませぬのに」
「紋所を見たか」
「お道具をもった若党などがついておりましたらわかったのでございますけど」
「わからぬのか」
「でも」
「なんだ」
「そのようなお方ではございませぬ」
加乃は、千代と会った感じをこまかく物語った。
承雲はだんだんわかってきたらしい。
「世にふしぎなひともいるものだ」
そこは棟梁である。
下働きの工人が、百人はいる。仲間の工匠の数も多い。それらはいずれも諸侯の屋敷に出入りして、内情にくわしい。
山内家に出入りしている山田喜右衛門という棟梁が、

「対馬守様の御内室ではあるまいか」
といい、内々調べてみると、いよいよそうであることがわかった。
承雲は、山田喜右衛門を介して、山内家に拝謁を申し出た。
簡単にゆるされた。この時代の諸侯夫人というのは徳川時代とはちがい、格式もごく気楽で、それほど世間と隔離したものではない。
ただ、屋敷うちでは、身分がちがいすぎて会うわけにはいかない。
例の一条の尼寺を借りた。
千代が物詣に来る。偶然来合わせた石川承雲に言葉をかける、という形式である。
とまれ、方丈で会った。
承雲はひと目、千代を見て、
(これはこれは)
と平伏してしまった。
美しくもある。
それに、眼に滲み入るような笑顔を、千代は持っている。
もう、説明をきく要もなかった。
ただひたすらに小袖の礼をいった。
千代はそれをさえぎり、
「わたくしのほうこそ、お礼をいいたいくらいです。加乃殿は、着てくれておりますか」

「そ、それはもう……」
承雲は工匠だけに、千代の創作意欲というものがわかるのである。
承雲の口から、千代の噂はぱっと市中にひろまった。
それが、九州征伐中の秀吉の耳にさえ入ったというから、うわさというものはおそろしい。
千代のために弁護しなければならないが、都での彼女の奇行は、売名のためではない。
ところが。
結果は、北政所の耳にまで入った。
千代は、大坂に召された。
「ああ、よく」
と、北政所はいった。
「来てくれましたね。無心があるのです」
関白の正室という貴婦人にはなっても、寧々といったころの尾張言葉は、まるだしなのである。
とくに千代のような、信長の岐阜時代から知っている間柄の婦人と語るときには、京の女房(女官)言葉などはいっさいつかわない。
そこが、北政所の魅力で、尾張出身の部将たちには圧倒的な人気があった。
「どういうことでございましょう」
「唐織(からおり)の小裂(こぎ)れでつづりあわせる小袖を、わたくしもほしいのです」

「ああそのような」
千代は当惑した。
北政所は三十代の半ばを過ぎている。そんな年ごろの婦人にあう小袖は、千代の興味にない。萌(も)えだした嫩葉(わかば)のような娘の、神秘的なまでにうつくしい生命のために、千代は創作欲を駆(か)られ、ついついあのような「奇行」を演じてしまったのである。
(頼まれて作るのでは仕立屋ではないか)
創(つく)りたくて創るからこそ、千代の場合は芸術なのであった。だからこそああいう奇妙な発表方法も、洛中洛外からあふれるような好意でむかえられたのである。
「無理でしょうかしら」
と、北政所も決してたかぶらない。
かしこい婦人なのだ。
「それならあきらめますけど」
といわれてみれば、千代もことわれなかった。
「きっと北政所様のお気に召さないかもしれませぬ。そのような出来ばえでもよろしうございましょうか」
「まあ、うれしい」
北政所は手をうってよろこんだ。
「こしらえてくれますか」

このひとの無邪気さは、昔とちっともかわらない。物よろこびするたちなのである。
千代までうれしくなった。
「やってみます」
と、退出した。
あとで、つくづくと北政所という人柄の大きさに気づいた。当然あのとき千代は、
——光栄に存じます。
というあいさつはすべきであったろう。それが、一小大名の妻女としてはありきたりな礼儀というものだ。
が、北政所のふんいきは、そういう通り一ぺんなあいさつを言わせるような冷たさ、権高さなどはまるでない。
むしろ、北政所が頼むのである。千代はついつい、
——やったげますわ。
といった恩着せがましい態度で退出してしまった。
(わたくしとしたことが)
とあとで悔いたが、それが北政所の魅力であろうと思いなおした。
千代は以前よりもいっそうにこの同性をすきになった。このことが、千代夫婦の将来にどういう運命をもたらすかは、彼女はむろん気づかない。

仕あがった。
みごとな小袖である。
「この世のものとは思えませぬ」
と、千代の侍女たちは、お世辞をぬきにして見とれた。唐織の華麗さに千代独特の諧調をもたせたこの小袖は、おそろしいばかりの美しさをもっていた。
現代のひとには、わかりにくい。
当時、中国（明(みん)）渡来の金らん、どんす、しゅす、りんず、といった特殊な織物は日本では作ることができなかった。
室町幕府時代、対明貿易がはじまるとともに日本に渡来しはじめ、将軍をはじめ富裕な貴族たちは万金を投じてこれを入手した。
とくに、斜文(しゃもん)やしゅすなどを地にしてこれに金銀糸やさまざまの彩糸(いろいと)を用いて模様を織りだした蜀(しょく)の錦ともなれば、その高価さはたとえるものがない。
その小裂れでさえ、家宝にしている家が多かった。
千代のころには、多少の国産の唐織も出まわりはじめていた。明の工人が内乱をのがれて堺にきたのを堺の町人が養って織らせたもので、しかし生産量はなおすくない。
比較的に量産できるようになったのは、これよりすこしあと、秀吉が堺の技術を京に伝えしめ、いわゆる西陣の機業地をひらいてからである。
とにかく、唐織へのあこがれがそれほどにつよい時代であった。

北政所といえども、感動せざるをえない。
千代が出来あがった小袖を献上したとき、北政所は、衣桁にそれをかけて一日、ながめくらした。
その数日後、北政所は千代をまねき、お礼としてかずかずのくだされものがあった。
「千代殿は、天にいる織姫のうまれかわりかもしれませんね」
千代はおもわず微笑った。
「織姫ならつまりませぬ。年に一度しか、夫の牽牛に会えませぬもの」
というと、北政所はまた手をうってよろこび、
「織女はむしろわたくしでした」
といった。秀吉が九州征伐に出かけたまま帰って来ないことをいったのである。
その翌々月に、聚楽第に入っている。
ほどもない天正十五年七月二十五日、秀吉は九州を平定して京に凱旋した。
さらに秀吉は後陽成天皇に聚楽第行幸を乞い、それがゆるされるや、この行幸を史上最大の華麗、豪壮な盛儀にするために準備をはじめた。
秀吉は、聚楽第行幸を思いきった規模にすることで、自分の天下平定（まだ関東以東は残っているが）の偉業を飾ろうとした。
だけではない。
自分が、天子の次位であることを自分の配下の諸大名をはじめ天下に、その眼で見させて実感

させようとした。
秀吉は、園遊のすきな男であった。
しかしこの聚楽第行幸ほど大きなものはなく、さらにこれほど秀吉にとって政治的効果の大きなものはなかった。
伊右衛門は、行幸準備の一分掌をもらい、その仕事に没頭した。
――千代は。
それを語るのが、このくだりの目的である。

秀吉ほど腰軽な男はない。
この空前の盛儀に、みずから儀典係長のように諸奉行をあつめてこまごまと指示し、当日でさえ指揮をやめなかった。
当日、後陽成天皇は、山鳩色の束帯の御衣をお召しになり、まず御所の南殿に出御された。
南殿から長橋までの地面には、毛氈を布いて渡御の道路にしてある。贅沢ずきの秀吉らしい着想であった。
天皇は、南殿を出られた。
その毛氈の道を歩まれるとき、秀吉は腰をかがめて進み出、天皇のすそを取って従いあるいた。
あと、鳳輦にお乗りになる。
天子がその乗物である鳳輦に乗られるのは何代ぶりのことであろう。

鳳輦が動き、御所の四脚門（よつあしもん）を出て北へ、正親町通を西へ、さらにめざす聚楽第まで十数丁。

辻。

沿道。

六千の秀吉の配下の武士がかためている。

壮大な行列であった。

まず、天皇の行列がゆく。烏帽子（えぼし）姿の前駆の武士の列がゆき、国母の新上東門院以下女御（にょうご）、女官の列、それだけで輿がざっと三十挺もつづく。輿わきには百余人の下級女房がつき従っている。

その女房行列がおわると、親王、公卿、殿上人の行列がえんえんとつづき、それに随身、青侍、雑色（ぞうしき）などの従者数百人がくわわり、やがて楽人四十五人が「安城楽」を奏楽しつつ鳳輦がゆく。

そのあとに、左大臣近衛信輔（のぶすけ）、内大臣織田信雄（のぶかつ）、それに公卿の烏丸光宣（からすまるみつのぶ）、日野輝資（てるすけ）、久我敦道（あつみち）とつづいて武家の徳川家康。

家康のあとに秀吉の異父弟の秀長、そのあとに大納言、中納言がゆく。

秀吉の行列は、そのあとである。

前駆の大名は、増田長盛、石田三成をはじめ七十余人。

騎馬である。

そのなかに、烏帽子大紋姿の伊右衛門こと山内対馬守一豊もゆく。

関白秀吉は、輿にのっている。

その前後をゆく武士の数は千人をくだらなかったであろう。

やがて鳳輦は聚楽第についた。

さまざまの儀式があり、饗宴があり、善美ことばにもつくしがたい。

とまれ、戦国百年にわたって貧窮の極にあった天皇、公卿にとってこれほど楽しい園遊はなかったにちがいない。

御滞在は三日、という予定であったが、公卿たちがよろこび、天皇にすすめ、

「五日ほどもこうしていたい」

と秀吉にいわせたので、秀吉も大いによろこび、さまざまの遊びを演出した。

雅楽、酒宴、詩歌、さらに日も足らず夜におよんで夜遊の宴さえおこなわれた。

そのときである。

聚楽第の一室に、千代が北政所のためにつくった小袖がかかげられたのは。

秀吉は天皇をその小袖のそばまで導き、

「わが家臣の妻女が考案して縫ったものでござりまする」

といった。

若い天皇は、その美しさに驚嘆した。

「このように美しいものを作れるとは、どういう女性（にょしょう）か」

といわれた。

千代の小袖を聚楽第に展観したのは、北政所が秀吉にそうすすめたからである。

余談だが、一種の個展といっていい。美術や工芸品の作品展の最初ともいうべきことではあるまいか。

それが意外に天皇、公卿に好評だったことに、秀吉はひどくよろこんだ。

秀吉は、聚楽第行幸の盛儀がおわったあと、

「寧々よ、あれは成功だったな」

と、北政所にわざわざいった。

「京は衣裳については眼の高いところでございますもの」

北政所がそういったことには、多少の意味がふくまれている。

秀吉といっても、尾張の微賤から成りあがった田舎者にすぎない。

かれの諸侯の多くはそうであった。しかつめらしく衣冠束帯して行幸の供奉こそしたが、モトをただせば尾張、三河、美濃あたりの地侍、野武士、農夫の出にすぎない。

猿、いや群猿が、かんむりをかぶって行列しているようなものである。

（わしも出世したものぞ）

とおもう半面、京の公卿に対して劣等感がある。

秀吉にはとくにそれがつよい。

聚楽第をつくったのも、そういう心理から出たものだ。

だから、千代の手作りの衣裳を天皇、公卿にみせ、

――われわれは野蛮人ではない。

というところをみせたかったのである。

――これだけの感覚の者がいるのだ。

といいたかった。

しかも期待にたがわず、千代の小袖はそれを雄弁に物語ってくれたのである。

秀吉はいった。

「よい妻女だな」

「主人の一豊は、吏才は石田三成にはるかにおよばず、武勇は加藤清正の指ほどにもない凡庸な男だが、妻女だけは日本一であることよ」

「日本一でございますか」

「いや」

秀吉は大笑いした。

「そなたをのぞけば、だ」

「そう申せば」

と、北政所は話題をかえた。

「山内対馬守一豊殿は、わが家にとってふるき侍でありますけれども、さまでの出頭（出世）もいたしませぬな」

「あれは、長浜城主であったな」

秀吉は、伊右衛門の印象を思いだすような表情でいった。

「高は、何石だった」
「二万石あまりでございましょう」
北政所は、大小名の配置、石高を、よく覚えている。
彼女は、行政上の人事に関心がつよい。秀吉がやろうとする人事によく口出しすることがあった。べつに私心や好みで口出しするわけでなく、秀吉の思い至らざるところをおぎなおうとしていたにちがいない。
だから、彼女の「口出し」の多さのわりには弊害がすくなかった。
「少なすぎるようでございますな」
と、彼女はさりげなくいった。
「なるほど」
秀吉の脳裏に、伊右衛門の処遇のことがきざみこまれたのはこのときからといっていい。
小袖のおかげなのである。

春日遅々

その後、ほどもない。
ある朝、山内家の京都屋敷で小さな変事があった。
門番が朝、門前を清めるために出てみると、路上に赤児がすててある。
「捨て児か」
とよくよくみると、いかにも仔細（しさい）ありげであった。
庶人が捨てたものではなく、相当の身分の武士が捨てたらしく思えるのは、赤児が母衣（ほろ）で巻かれていることでも知れた。
母衣、とは甲冑の背にせおって矢をふせぐ布で、鯨のひげで母衣かごをつくりそのうえに布をかぶせる。
実用よりも、装飾といっていい。
いや、装飾というより、その武士の身分をあらわす名誉のシルシといったほうが、より正確だ

ろう。

「母衣衆」

という言葉があるほどで、大将からとくにそれをゆるされている上級の武士のことである。

騒ぎは門番小屋から上へ上へとつたわって、ついに伊右衛門と千代の耳に入った。

耳に入れたのは、すでに重臣になっている祖父江新右衛門である。

「まだ赤児ゆえ利鈍はわかりませぬが、よく動く瞳をもっております。ふしぎなことに、泣きませぬな」

といった。

千代は興味をもち、連れて来させた。

なるほど、紅色の母衣に包まれている。だけでなく、きんらんの裂れでつくった石清水（いわしみず）八幡宮の守り札がそえられており、母衣をとくと短刀ひとふりが出てきた。

美濃の関モノで、わるい銘ではない。

「相当の身分の武士の子でございますね」

と千代が伊右衛門にいった。

（物好きな）

という顔つきを伊右衛門はしている。

依然として、泣かない。

どころか、

「にこっ」

と千代に笑みかけるのである。千代はおもわずよね姫をおもいだしてしまった。

「ね、この子、育ててやりましょう」

「わが家でか」

千代がいう意味は、尋常ではない。

山内家は子がないのだ。たとえ捨て児でもひろって育てた以上、家を継がせる場合もありうる。

「千代、そなたにも似合わぬことをいうものだ。わが家はすでに大名だぞ」

「そうです」

それがどうした、という顔を千代はしてみせた。

「こういうことが先例になれば、つぎつぎと子を捨てる者があるかもしれぬ。いちいち拾って育てるつもりか」

「そんなお話をしているのではありませぬ。この拾君（ひろいぎみ）を育てたいと申しているのでございます」

「拾君？」

千代はそんな愛称までつけてしまった。

「素姓も知れぬ児を、酔狂な——」

「ホホホ……、人は素姓ではありませぬ。この子がもし利発で勇気があれば山内家をそっくりあげてもよいではありませぬか」

当時、このうわさは京の上下にひろまり、「さても運のよい捨て児よ」といわれ、山内対馬守

という物好き大名の名は、庶民まで知らぬ者はなくなった。
この児、通称拾(ひろい)
千代が予感したとおり、のちに才質かがやくような少年になった。
伊右衛門の猶子(ゆうし)ということにし、おりから家臣の五月蔵(さつき)右衛門の妻が男児をうんで乳があるため、命じて養わせた。少年は家中の上下から大いに愛せられたが、猶子から養子にはならず、ついに山内家を継ぐことはなかった。
武門は血統を尊ぶものだ。
あきらかに、
捨て児
として家臣もそのいきさつを知っている拾君に、のちのち主人として随順してゆくかどうかがあやぶまれたのである。
話がさきに飛ぶが、拾君九歳のとき、千代はかれを山内家の養子にするつもりで伊右衛門と話しあい、伊右衛門もそれとなく重臣団に相談した。
「おそれながら、お考えちがいでござりまする」
と重臣団はいっせいに反対した。
「ご血縁からお迎えあそばされよ。さもなくば、家来としては必死の忠が成しがとうござりまする」

伊右衛門には、血縁がある。
弟である。
のち山内修理亮(しゅりのすけ)康豊といった者で、拾君をひろったときは、まだ少年であった。
のち、この康豊の長男の「国松」という少年をあとつぎにむかえ、山内家の二代目となった。
土佐守忠義がそれである。
拾君をあとつぎ養子にするせぬというさわぎがおきたころは、この物語のいまの時期より八、九年さきで、そのころには、夫婦ふたりで築いた山内家もだいぶ大きくなっていた。
家臣団も多く、もはや、主人夫婦でもこういう問題は自由にならなかった。
「拾君はかわいそうに」
と、千代は終生、いった。
拾君は十歳で頭を剃り、山内家連枝という身分で仏門に入った。
寺は、伊右衛門夫妻の亡児よね姫の墓のある京の妙心寺大本山で、ここで南化国師(なんげこくし)の弟子となり、長じて一代の学僧とうたわれた。
湘南(しょうなん)和尚という。山崎闇斎(あんさい)の師匠ということで、むしろ知られている。
湘南和尚と千代との母子の情は終生かわらなかった。
右は余談。
はなしを、現在にもどそう。
秀吉の天下のことである。

まだ完成したわけではなかった。
秀吉の天下には、
「異国」
がある。
関東の北条氏であった。
戦国初期の英雄北条早雲からかぞえてすでに五代、百年を経ている。
その領国は関八州の大部分を占め、石高はざっと二百八十万石。
箱根の嶮をたより、小田原に巨城を作り、その城下のにぎわいは、京、大坂に次ぐものであった。
秀吉は、はじめ外交で臣従させようとしたが、うまく事がはこばない。
ついに開戦に決した。
「千代、よろこべ、合戦がはじまるぞ」
と伊右衛門は、秀吉が軍令を発した天正十七年十一月、長浜の城に帰城するなり、そういった。
ひさしくめぐりあうことのなかった功名の機会が、ふたたびそこにある。

この天正十七年における秀吉の勢力範囲は、天下六十四州のうち五十八州におよび、石高にすれば千六百五十万石。
動員できる兵力は、四十一万二千人というものであった。
この武力で関八州の支配者北条氏を攻めるのだが、勝敗は戦わぬ前からはっきりしている。

が、秀吉は用心した。
なにしろ、英雄時代である。配下の諸大名のなかにはなお戦国風雲のころを夢み、あわよくば北条と策応して、豊臣の天下をくつがえそうとする野心家が出ぬともかぎらない。
念のため、配下の諸大名の妻子を京都に移すように命じた。
ていのよい人質である。
「関白殿下は、きっと、徳川様がおこわいのでございましょう」
と千代は、例によって伊右衛門に政治教育をした。
豊臣家最大の大名は、家康である。
家康の所領は東海地方で、箱根以東を領国としている北条氏と隣接している。
地理的に近い。
一丸となれば、あわせて五百万石以上の連合軍になり、天下の権をあらそうに足る実力になる。
それに、家康は北条氏とのあいだに姻戚関係を結んでおり、縁はふかい。
「徳川様の人質だけをとるわけにはいかないために、諸大名平等にそうされたにちがいありませぬ」
千代はそうみた。
彼女は、京に移った。
天下の諸侯の妻子がぜんぶ京にあつまったために、毎日黄金の雨がふるような景気になり、町はおそらく京都市史空前のにぎわいをみせた。諸国から、商人、職人、人夫がどっとあつまり、

人口はほとんどそれ以前の倍になった。

京は、世論の中心である。公卿以下庶人にいたるまで、

「豊臣関白は福の神じゃ」

と、ほめそやした。秀吉の生前の人気はこのときが頂点で、京者の好印象が後世までのこり、史上ずばぬけた人気者になったとも考えられるであろう。

千代の観測は、はずれた。

秀吉は、もっと利口だった。

家康がさしだした人質を、家康に対してだけは返したのである。

家康の人質は長丸という十二歳の少年で、のちに二代将軍秀忠になる。

長丸は、井伊直政、酒井忠世、内藤正成、青山忠成、といったのちに徳川幕府の譜代大名になる家康の官僚につきそわれ、聚楽第において秀吉に拝謁した。

「よい子じゃ、よい子じゃ」

と秀吉は長丸の手をひいて大奥までゆき、北政所にもみせた。

北政所は世話な妻女だから、

「ほんとによいお子」

と自分で髪に櫛を入れてやり、都ぶりに結いなおし、衣裳も着更えさせ、秀吉みずから黄金作りの太刀を与えて帯びさせ、十分もてなしたうえ、

「父君がもとに帰り給え」

といって浜松へかえした。

家康の心を得ようとしている秀吉の細心さが、うわさをきいた千代にもありありとわかった。

ところが、その秀吉が、北条征伐の主戦闘部隊に徳川軍を選んだのである。最大の損害が予想されるはずであった。秀吉の虚々実々の政治といっていい。

関東八州の王北条氏は、五代百年におよぶ老大国であることは、すでにのべた。

時勢に暗い。

秀吉が天下をとったことは知っている。しかしその実力を過小に評価した。

さらに、時勢がわからない。

秀吉を中心にすすめられているあたらしい秩序をまるで理解できなかった。

――臣従せよ。

という意味のさそいかけは、秀吉のほうからくどいほど来たが、北条氏はそのさそいにいかにも鈍重であった。

ついに、

討伐

に決した。

そのほうが秀吉にとって得策でもあった。

なにしろ北条氏は、小さな飛地領までふくめてこまかく計算すると二百八十五万石ぐらいはあ

るであろう。
　豊臣配下の諸将に分け与えることができるからである。
　開戦と決したとき、北条側は、
「兵は関東という。われら坂東の強兵をもってすれば、上方勢(かみがたぜい)など人形にもひとしい」
と豪語する者もあり、また、
「箱根がある」
と、その峻嶮を戦術上の最大のたよりにした。
　なるほど、天下の嶮である。
　余談だが、のちの徳川幕府の江戸防衛思想もこれであった。徳川幕府の創設以来の仮想敵国は、防長の毛利と薩摩の島津である。
　もし毛利・島津が兵を西国であげて東上してくるとき、まず、姫路でおさえ、姫路が陥れば大坂城でおさえ、それが陥れば名古屋城でおさえる。この三城が徳川時代を通じて最大の城郭であったことを思えば、それがわかる。
　が、そのいずれも陥ちれば、最後は箱根の嶮で迎え討ち、ここで敵を追いおとすというものであった。
　が、維新戦争の結果、箱根はもろくも潰(つい)え去って江戸に官軍を迎えてしまっている。
　頼みにした高名な堅城、峻嶮が役に立った例は、史上あまりない。
　もう一例をあげると、大坂城である。

　秀吉が造ったときはたしかに世界有数の大要塞で、日本史上、これほどの規模をもった城は、あとにもさきにもない。
　秀吉の死後、豊臣の遺臣たちは、
「大坂城に拠れば、天下をこぞる大軍といえども、ものの数ではない」
と豪語し、げんに大坂城の要塞としての価値が高く評価されたために、十万の牢人が大坂方についた。
　結果は、夏ノ陣で落城した。
　さらに幕末、最後の徳川将軍慶喜(よしのぶ)が大坂城に在城し、京にむかって幕軍を進発させ、鳥羽伏見で敗れた。
　が、鳥羽伏見は、単に一戦闘での敗北にすぎず、幕軍は潰滅的な損害をうけていたわけではなかった。大坂城に籠城して死力をつくして決戦すれば、あるいは歴史はかわっていたかもしれない。
　が、慶喜は城をすてて逃げた。
　難攻不落といわれた箱根と大坂城は二度の戦歴をもち、二度とも破れている。
　防衛戦の勝ち目のなさが、これでわかるであろう。
　北条方は、小田原城で籠城準備をした。その人数、七万余である。
　北条の小田原城は、こんにちの小田原城址で想像できるような小さなものではない。
　とにかく、五代百年にわたって築きあげた巨城で、この城だけは、かつて武田信玄が攻め、上

杉謙信が攻めても、つねにしりぞけてびくともしなかった。

「不敗の城である」

という自信が、城中にある。

さらに本城だけではない。

箱根山脈のなかと麓だけで、八つの支城がある。新荘城、足柄（あしがら）城、浜居場（はまいば）城、山中（やまなか）城、鷹ノ巣城、韮山（にらやま）城、徳倉（とくら）城、泉頭（いずみがしら）城。

さらに小田原本城のまわりには、

宮城野、湯本、片浦

にそれぞれ、人数の駐屯地がある。

駿河、伊豆の海岸地方には、浜辺のまもりとして、小塁がおびただしい。獅子浜、重須、安良里（あらり）、田子、下田、の五ヵ所の城塁がそれである。

東海道方面だけでなく、中山道も、松井田城と西牧城でおさえている。

甲州街道と武州方面を防衛する最大の城として、鉢形城がある。

「もし一豊様が」

と、千代は伊右衛門にきいた。

「関白殿下でありましたら、どうお攻めになりますか」

千代の伊右衛門教育といっていい。

「わしは」

伊右衛門は、むくれた。

「秀次様の手に属する小大名にすぎぬ。そういうこととは無縁だ」

「まあ、子供みたいにふくれて」

千代はふきだした。

「そなたは、わしをばかにしすぎる」

「いいえ」

千代もまけていない。

「ばかになんぞしておりませぬ。おりませぬからこそ、一豊様がもし関白殿下ならばどうなさいますか、とおききしているのでございます」

「そなたには、かなわん」

伊右衛門は、苦笑した。

千代にすれば、伊右衛門に大局的な頭の働かせかたを期待している。

出陣。

戦う。

だけでは、いつまでも単なる侍ばたらきではないか。天下の政治、天下の軍事を頭において自分の与えられた小さな部分の仕事をする、というぐあいでなければ、ついには大をなさない。

「わしならば、小田原をただちに突かず、支城をことごとくつぶし、本城を裸かにしてからとりかかる」

そのとおりであろう。秀吉もまたそうするであろう。

が、具体的にどうするか。

伊右衛門にはわからない。

「小田原方では、天下の兵で囲んだところで戦場にはそれを養うだけの食糧がなく、けっきょく関白軍は餓えて退却なさるであろう、と申しているそうですね」

「そうらしい」

「関白様は、兵糧の輸送に大きな計画をおもちだと思います。一豊様ならどうなさいますか」

「わからん」

伊右衛門は、ふてくされた。

が、さて幕があがってからわかってみると、千代でさえ驚いたほど、秀吉の作戦は壮大緻密なものであった。

伊右衛門は、戦場へ進発した。

他の六人の大名とともに豊臣秀次の軍団に属し、近江八幡に集結して、二月十七日、小田原の戦場へむかった。

諸軍の第一集結地は、東海道黄瀬川の平野である。

そこまできたとき、伊右衛門が、

(これはこれは)

とおどろくほどの壮観であった。

野も山も河原も、みわたすかぎり、人と馬と旗でうずまっている。まだぞくぞくと諸国から到着するはずだが、眼でみただけで十万余はいるであろう。

武者のページェントといっていい。

事実、秀吉が自分の政権樹立を内外に誇るための祝賀会にも似た作戦であった。

海上には、水軍がうかんでいる。

巨船がひっきりなしに軍勢や物資を運んでいた。

豊臣家の海軍（水軍）は、おもに瀬戸内海沿岸、志摩半島、四国の太平洋岸の大名が担当している。

歴史のもっとも古い水軍大名としては、源平時代の熊野海賊の流れを汲む九鬼嘉隆（志摩国鳥羽城主）、おなじく村上海賊の末流である来島通総（伊予来島列島の島主）があり、そのほか、淡路知志の城主加藤嘉明、同洲本の城主脇坂安治、土佐の国守長曾我部元親、和泉、紀伊、大和の国主羽柴秀長、備前、備中の国守宇喜多秀家、それに毛利水軍が加わっている。

秀吉は、伊右衛門らより数日おくれて箱根山脈の西方に達し、沼津から三島に入り、

「どれ、敵状をみるか」

と、山をのぼりはじめた。

名だたる箱根の山道である。この道を四里のぼりつめれば、芦ノ湖がある。

が、秀吉は一里ほどしか登れない。

なぜならその前途に、「北条王国」の最前線ともいうべき、

山中城

がある。

秀吉はその方面の地形を視察してから、くだって味方の長久保城に入った。

家康が随行している。

城におちつくや、

「内府」

と例の機嫌をとるような微笑を家康にむけた。

「敵の最前線に、山中城、韮山城がある。その奥の奥の小田原の本城はどうやら前線の支城にたよって、出戦の様子がない。内府ならばどういう作戦をたてられる」

「左様」

家康も世巧者(よごうしゃ)である。秀吉の機嫌を損じぬように肉付のいい顔に微笑をうかべながら、

「山中、韮山の二城を力押しに攻めてゆけば二城のうち一城は破れましょう。その勢いに乗じて元山中の間道からただちに小田原城の東に進出し、本城、支城間の連絡路を断ちます。この先鋒はそれがしがつとめます。そののち、殿下みずから本軍をひきいて城の西口にお迫りくださらば、それで包囲陣は完成します」

といった。秀吉はよろこび、

「徳川殿が先鋒になられ、わしが本軍をひきいてゆけば、明韓（中国・朝鮮）百万の軍も一挙に

つぶれるだろう」

秀吉らしい世辞である。

だけではない。この家康の作戦計画をすべて採用した。これも、家康への懐柔の手であった。

秀吉と家康ほど、微妙で奇抜な人間関係は、古今にまず例があるまい。

陣中にうわさが立った。

うわさ、というのは、家康が秀吉を裏切って小田原に加担し、一挙に豊臣の天下をくつがえそうというものである。

「ほんとうらしい」

というのが、伊右衛門の耳にも入った。伊右衛門などは遅いほうで、同僚の敦賀の城主大谷吉継にきくと、

「ご存じないか。陣中、平士、足軽のたぐいまで存じておるぞ」

と、吉継はいった。

「まことは？」

「あははは、知るものか。いったいにまことというのはこの世にはない。どの事実も真偽両面をもっており、真かと見れば偽、偽かとみれば真。物事はすべてその両面そなわりたるものとして見るのが、真の智者というものでござるよ」

と、わけのわかったようなわからぬようなことを、この哲学的な武将はいった。

伊右衛門は、戦後、どうやら事実らしいことを知ったのだが、まんざら根も葉もないうわさではなかったようである。
例の織田信雄。
信長の遺児で、秀吉はその点に遠慮し、官位は内大臣、城は尾張清洲城で、秀吉の幕下で家康につぐ最大の大名のひとりである。
むろん、亡父の天下を奪った秀吉に対してこころよからず、かつて家康をさそって同盟し、小牧・長久手で秀吉と戦ったことがある。
「三介（幼名）殿、痴鈍」
と当時いわれたが、父信長にくらべてのことで、普通人にすぎない。
凡庸なだけに身の程を知らず、時勢を知らず、ただひたすらに、秀吉を憎んでいる。
こんども一万五千人をひきいて、出陣していた。
その織田信雄が、ある夜にわかに家康の陣へ訪ねてきた。
「これはこれは内府様（信雄）、夜中、いかなるご用で」
家康は如才がない。
「徳川殿」
信雄は家康の側近の諸将を見て、
「お人ばらいをしてたもらぬか」
といった。

家康はこまった、とおもった。さなきだに信雄と自分は人に疑われている。なにしろ互いに、秀吉の天下取りに対し、武力に訴えて反対した仲間である。
「いや、これらはそれがしの手足同然の者どもでござる。人払いの必要などござりませぬ。さ、左様なかたくるしいことよりも、幸い、浜松から今日到来した酒がござる。いかがでありましょう」
と暗に政治向きの話はつつしめ、といったが、信雄にはわからない。
「左様か、人払いの必要がないか。さすがは徳川殿、よい家来を持たれておりますす。それならばこれにて申しあげましょう」
「……」
家康はこまっている。
「じつは、妙策があるのじゃ」
「どのような？」
「秀吉は、沼津にいる。徳川殿の人数は三万人、わしが家の人数は一万五千、これをもってにわかに秀吉の本陣をとりかこみ、火の出るほどに攻めたてて一挙に首級をあげれば、天下は織田家のむかしにもどる」
「左様、むかしに。――」
いまは昔ではない。家康はそれを最もよく知っている男であった。
「関白（秀吉）を殺し奉るのでござるな」

家康は、微笑している。
「いまが好機ぞ」
と、織田信雄がいった。
「なりませぬな」
家康は、ことさらに大声でいった。のちの疑惑をまぬがれんがためである。
「人は、信義が第一でござる。関白殿はこの家康を信ずればこそ、わが領内の三河、遠江、駿河の三州を通行なされてきた。家康に叛心あればそのときに討っております。武士として左様なことはできぬものだ」
家康という男は、それが本性なのかどうか、かれは年少のころからその律義さを売りものにしてきた。
「律義者の三河殿」
といえば家康のことであった。
信長との同盟時代も、何度か信長に煮え湯をのまされてきたが、それでも離れずに信義ただ一つでついてきた。
家康の表看板といっていい。
「徳川殿はお約束に固い」
とか、
「徳川殿にさえ物を頼めばかなえてもくれるし、裏切られもせぬ」

ともいわれてきた。
いまや、これが家康の財産なのである。家康の強味はまずこの世間的な信用と、次いでかれに随順しきっている三河武士団ということができるであろう。
のち、秀吉危篤前後から人変りしたほどに、この男はたけだけしい権謀術数家になって豊臣の天下を奪ってしまうのだが、この人格変化はどういうことであろう。
とにかく信長という天才の強盛なときはいちずに信長に随順し、秀吉の強盛なときは針金ほどのむほんのうわさも怖れる男であった。
奸悪(かんあく)。
と後世印象される家康の奇怪な性格はここにある。かなわぬ、とみれば貞女のような淑徳を発揮するのである。
いまだ、と時機を見ぬくと、老婆のような入りくんだ智恵、底意地のわるさを発揮するのだ。一種の人間妖怪といったほうが、家康にはあたっている。
「そうか」
と、阿呆の三介殿（信雄）は、拍子ぬけしたような顔で立ち去った。
これが、うわさの火種になった。
火種はこれだけではない。
家康が、秀吉の供をして箱根山の敵情、地形視察に行ったとき、だんだん奥に入って秀吉の手まわりの侍が十三、四人になってしまった瞬間がある。

「殿、いまでございまする」

と、家康の幕将の井伊直政が袖をひいた。

家康は知らん顔でいた。

帰陣してから直政が、

「あのときならばこちらの人数は二百、はるかに多うござるによって関白殿を簡単に刺せましたものを。それがしがお袖をひきましたるとき、なぜ知らぬ顔をなされました」

「関白殿はこちらを信用あそばしてああはふるまいなされている。籠の鳥を殺すようなことはせぬものだ」

さらに言葉を継ぎ、

「天下を取る取らぬは、人力以外におのずからの天運というものがある。無理無体に人力で取ろうとしても、天下は来ぬ。明智光秀の例でもわかるとおりだ」

といった。

が、陣中、なお家康謀叛のうわさは絶えない。

ついに家康謀叛のうわさは、秀吉の耳にまで入った。

沼津の陣営でのことである。

告げたのは、石田三成であったともいうが三成ではあるまい。徳川時代に入って御用史家が、わるいことはすべて三成、ということにしてしまったのであろう。

「ばかめ」

と、秀吉は大笑いし、たったひとこと叱りつけただけで、このことは何もいわなかった。

翌日、にわかに支度を命じ、

「徳川殿の陣所に遊びにゆくぞ」

と触れを出した。

秀吉は、出かけた。

人数といえば、侍は一人もつれず、児小姓(ちごこしょう)ばかり五人である。

服装は、甲冑もつけていない。

伊達染めの小袖に緋どんすの羽織をひっかけ、というかっこうだから、現今でいえば粋(いき)なアロハ姿というところであろう。

脇差だけは帯び、刀は従者にもたせている。

途中、例によって大声で冗談を飛ばしつつ正午ごろ家康の陣中についた。

「これはこれは関白殿下」

と、家康はこの気楽な来訪におどろいてしまった。

「遊びにきたわ」

と、酒を出させ、共に飲み、

「興が足らぬな、徳川殿の御陣中に舞など出来る風流な者はおらぬか」

といった。

「田舎者の手すさびでござるが、何人かはたしなんでいるようでござります」
と、それらを舞わせた。
秀吉は大いによろこび日没まで遊びほうけてから、
「まだ興が醒めぬわ。徳川殿、これからどこぞの陣所に遊びに参られぬか。そうそう、内府（信雄）の御陣所がよかろう。あれへ参って酒など出させ、ふるまわせてやろう」
といった。
家康はやむなく、供をした。
従者は、秀吉が児小姓数人だから、家康も遠慮して侍は連れず、児小姓たった一人をつれて出かけた。
やがて信雄の陣所にゆき、門内に入るなり秀吉は、
「酒をせびりに参ったぞ」
と陽気にはしゃいだ。
信雄もびっくりした。
「男ばかりでは面白うない。土地のおなごでもよいゆえ、眉目（みめ）のよろしき者、舞、鼓のできる者などを狩りあつめて、三人で明けがたまで飲み騒ごうではないか」
と秀吉はいうのである。
「さん候」
と、信雄も従わざるをえない。

やがて二十人ばかりの若い女をよびあつめてきて、酒宴になった。
秀吉は、酒はあまり飲めない。
が、こういう遊びの上手で、騒ぎだすと家来や女どもまで浮き浮きするというようなところがある。
さんざんあそび、翌朝、陽が昇ってから帰って行った。
このため、例の不吉のうわさはすっかり消えてしまった。
むろん、うわさを消して人心を安定させるための秀吉の策略である。この点では、信雄も家康も、完全に秀吉の政治じょうずにしてやられている。
とまれ、秀吉軍は、小田原城攻囲戦の手はじめとして、まずその前哨陣地である箱根の山中城を攻撃することになった。
こんにち、箱根の山中新田の西北にその城あとがあり、北に本丸、西に二ノ丸、南に三ノ丸のあとを遺し、遺跡にはわずかに空堀（からぼり）のあとものこっている。
北条方はこの山中城に、松田康長、北条氏勝、間部（まなべ）康俊、朝倉景澄など家中でも選りぬきの剛将を駐屯させている。城兵はざっと四千人であった。
これに対し、秀吉は、総計六万七千八百人を動員して城攻めにかかった。念のためその部署をいうと、右翼は、池田輝政、木村重茲（しげます）、長谷川秀一、堀秀政、丹羽長重。
中央は、羽柴秀次、同秀勝。

左翼は、徳川家康。

となっており、山内伊右衛門一豊は、中央攻撃路をとる秀次の麾下にある。

しかも、先鋒であった。

先鋒第一隊は、中村一氏隊、ついで堀尾吉晴隊、一柳直末隊、山内一豊隊、田中吉政隊とつづく。

伊右衛門はこのときはじめて、異父弟の修理亮康豊を戦列に加えている。

「こわいか」

と、伊右衛門は徒歩で山路をよじのぼりながら、弟の康豊にきいた。

康豊は、十八歳である。青葉のせいか、顔が真っ蒼であった。

「当然なことだ」

と、伊右衛門は説く。

「敵を見たら眼をつぶって槍もろともに前へ前へと踏みこめ。人間、勇怯の差などはあるものでない。敵もそちを怖れている。死をわすれて夢中になれるかどうかだけのちがいだ」

伊右衛門の物頭（隊長）は、深尾興右衛門重長、林伝左衛門一吉、市川山城などで、いずれも千代が手づるを求めて集めてきた猛者（もさ）たちである。

攻撃軍は、まず、山中城の出丸である岱崎城を見あげる地点まできた。

先鋒隊長の中村一氏は、その物頭の渡辺勘兵衛をさしまねき、偵察を命じた。

勘兵衛は、のちに増田長盛、藤堂高虎などに転々と仕えた男で、戦さ上手なことでは天下に知られている。

岱崎の城塁のそばまでゆき、城から射ち出してくる鉄砲の数をたんねんにしらべ、本隊にもどってきて報告した。

「硝煙の様子をみると、鉄砲足軽は五、六十しかおらぬように見うけます。その数から士分の者や走卒の数をはかると、まずまず百数十人でありましょう。城の正面もわずか三十間ほどで、構えもさほど堅固ではない。ひた押しに押して押しつぶすに造作はありますまい」

といった。

結果は、はたしてそうであった。伊右衛門の隊には、勘兵衛のような戦さ達者な男はいない。

伊右衛門は考え、

「中村一氏の家来には渡辺勘兵衛という戦場でうまれたような男がいる。だからひたすらに中村隊についてゆけば間違いなかろう」

という方針をきめた。

中村隊は急進して、岱崎城からざっと十丁の地点にまでせまった。

それに従って伊右衛門の隊も前進した。

このとき秀吉は手まわりの者数騎を従えただけで、前線までやって来、

「押せ。奪（と）れるぞ」

とどなった。

秀吉は、戦国期きっての城攻めの名人である。

関白の身分でみずから最前線を視察し、士卒が城をのぞんで、当然おこる一種の戦場心理として一様に萎縮しているとき、

「いまだ」

と大声で叱咤したのは、よく心得たやりかたであろう。

弾かれたように、どっと城にせまった。

諸隊、群れをなして空堀におどりこみ、矢と鉛弾が文字どおり雨注するなかを空堀の底を渡り、石垣にとりつき、めいめい勇を鼓して堀をのぼりはじめた。

あとは、惨というもおろかな光景が現出した。

伊右衛門が石垣にとりついているときに、頭上からざあっと血が落ちてきた。

中村一氏の家来で、中村才次郎という十八歳の少年の血である。

才次郎は初陣の功をあせり、

「あすはわが運をひらく日でござる。かならず一番乗りをつかまつります」

と、前夜、陣中の諸先輩にいい、身動きを軽快にするためにカブト、具足をぬぎ、白の小袖に真っ赤な胴服を着こんだ。

伊右衛門は、この少年が同僚の中村一氏の家来ながら、郷国がおなじ尾張であるためによく知っている。

才次郎が道端で休息しているとき、伊右衛門は通りかかり、その軽装を見て、

「そのままで合戦にのぞむのか」

ときいた。

「はい、対馬守様」

と才次郎は片膝をついて辞儀し、

「このほうが働きが易かろうと存じます」

幼な顔で微笑した。

「具足をつけろ。そういうことは無用の無理押しというものだ」

といったが、きかない。暗に伊右衛門の慎重さを軽蔑したような笑いをうかべて、

「功名の賭け種は命だと申します。命を惜しんでいては、人にぬきんでられませぬ」

と言って、きかない。

「せめて真っ赤な胴着はよせ。敵の目じるしになろう」

「敵の目じるしになるなら、味方の目じるしにもなります。わが家中ならともかく、それがしの名は他家にまで響いておりませぬ。わが働きをみて、あれが中村才次郎よ、といわれたいものでございます」

その才次郎が、伊右衛門の山内隊が空堀の底で敵の矢弾を避けてちぢまっているとき、

「ごめん」

といって石垣にとりつき、どんどんのぼりはじめた。

ついに塀にとりつき、塀のふちに両手をかけ、ぐっと身を持ちあげ、半身、むこうがわへ突き

入れたとき、どっと城兵が駈けてきてなかの一人が大薙刀をふるい、

ばさっ

と腰を車切りに両断してしまった。両手はなお塀のてっぺんをつかんでいる。胴から下だけが、下へ落ちた。

「あれをみよ」

観戦している秀吉でさえ、眼をそむけた。

(男なのだ)

真下にいる伊右衛門はおもった。

(男は所詮、功名の化物のようなものだ。その執念が、塀にぶらさがっている)

「よじろっ」

伊右衛門も、いっぴきの鬼になった。

功名が、城の上にある。

城寄せには、損害が多い。

石垣をよじのぼってゆく伊右衛門のまわりで、ばたばたと射たれる者が続出し、木からいも虫が落ちるように空堀の底へ落ちて行った。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

と、伊右衛門は絶叫した。

かれだけではない。

日蓮信者は、南無妙法蓮華経を唱え、観音信者は「念彼観音力」をとなえ、般若心経の護持者は、「はんにゃはらみった」を誦しながらのぼってゆく。

でなければ、登れるものではない。

一柳直末という将がいる。

美濃軽海西五万石の城主で、従五位下伊豆守、伊右衛門と同僚である。

美濃厚見郡出身の男である。

秀吉の部将としてはめずらしく藤吉郎時代からのはえぬきの郎党で、剛強無比といわれ、秀吉の長浜時代には母衣武者(主将選りすぐりの勇士団というべきもの。戦国の武士はこの組に入ることをもっとも誇りとした)にえらばれ、その後の昇進は伊右衛門とほぼ前後している。

それだけに、仲もよかった。かねがね殿中などで、

「対州(伊右衛門)よ、わしはこのとおりの武骨者で、畳の上の御用がつとまらぬ。殿中では諸事、おぬしの作法に従うゆえ、よしなに教えてくれ」

といった。

そのくせ妙なことに歌がうまく、歌学者で武将の細川幽斎などと親交があった。

秀吉の大小名のなかでは、

「おもしろき男」

という評判がある。さまで奇行はないが、愛嬌のある武骨者だった。

その一柳直末が、伊右衛門とは別の攻め口を受けもち、右方の谷間を走って城の搦手(からめて)から攻めのぼったが、途中、兵がひるんで動かなくなった。側面の櫓から、弾、矢がおびただしく飛んでくるのである。

「なにをひるむぞ、われを見習え」

と、その敵の櫓をめがけて登りはじめたとき、一発の弾が、カブトのまびさしの下を射ぬき、直末は即死し、死体となって落下した。

「なにをひるむぞ」

と、直末の弟の直盛という前歯の欠けた男がかわって指揮をし、とにかく戦闘を継続した。

なにしろ、大名の戦死である。報らせはすぐ秀吉の本陣へとどいた。

秀吉はちょうど飯を食っていたが、参謀長の黒田官兵衛が幔幕のなかに入ってきて、

「一柳伊豆守、手負いに候」

と、そういう表現で報告した。

秀吉にわかに食を吐きだし、

「手負いとは、単に手傷か、それとも討死したのか」

とせきこんでたずねた。

「討死でござりまする」

官兵衛がいうと、秀吉は「死んだか」と膳の上にぽろぽろ落涙し、

「もはや小田原などを攻め破っても何の益があろう。関東八州にもかわるまじき男だ」

といった。

伊右衛門がたとえ死んでも、子飼いではないだけにこれほどは秀吉は惜しまなかったであろう。

一柳家のあとは弟の直盛が継ぎ、大名として幕末までおよんでいる。

そのころ、伊右衛門は城内に飛びこんでいた。

運がいい。

ということに、伊右衛門はなるであろう。

かれは半生のうちで数えきれぬほどの戦場を経験し、手傷も負い、あやういときもあったが、ともかく命一つは無事にきょうまで持ってくることができた。

抜群の功もない。

きわだった武勇も持ちあわせず、巧妙な作戦を編みだすような才能もない。

それでもふしぎなことに、つねに中ぐらいの功名は、かならずたてた。

この岱崎城攻めのときも、とまれかれは二百五十騎の士分、二千五百の足軽を指揮して他隊とともに乱入し、ひきつづき攻略された山中城の寄せのときも伊右衛門の家来は大いに奮戦し、他隊に負けぬ首数を得ている。

伊右衛門の隊が攻め入ったのは、山中城の三ノ丸である。

三ノ丸の守将は、間部康俊であった。

防戦三十分ばかりで士卒はほぼ討ちとられ、守将間部康俊は城中奥座敷にしりぞき、その子とともに切腹、落城した。

伊右衛門が踏みこんだときは、すでに間部の胴には、首がなかった。

「無残やな」

と、伊右衛門はおもった。

(人の世は、運だな)

とおもった。伊右衛門は、信長、秀吉とつねに時運に乗った登り竜のような大将のもとで働き、防戦ということをかつてしたことがない。

つねに、攻撃する軍にいた。それも常勝軍のなかにいた。間部康俊の不運は、古ぼけた老大国北条家に仕えていた不幸である。

「主家は選ぶべきものだ」

とつくづく思った。

山中城は、三ノ丸の落城をかわきりに、二ノ丸、本丸がつぎつぎと落ちた。

それと連繋する鷹ノ巣城も徳川家康の手で落ち、秀吉軍は箱根山脈を制圧した。

見おろせば、小田原の本城である。

箱根の防塁をうしなったがために裸か城同然になったが、かといって関八州の首都をなす巨城だけに容易に陥ちそうにない。城域は、富士山と峰つづきの小嶺山がすっぽり城内に入っている

ほどの大きなもので、まわりは五里四方あり、城壁の長さだけで、東西へ五十丁、南北へ七十丁もある。

「力攻めはせぬ」

と、秀吉は、その小田原城のまわりにすきまなく野戦城塁を急造し、諸将に守備せしめた。

包囲陣の完成とともに秀吉は本営を箱根から湯本の早雲寺に進出させた。海上も、水軍をもって封鎖していて、小田原城内への兵糧の運び入れは、不可能になっている。

要するに籠城兵を干しあげてしまおうという作戦であった。

秀吉の城攻めの特徴は、あくまでも敵味方の人命を損ぜぬ、というところにあった。

だから、かれの過去のどの城攻めでも力攻めしてはいない。

信長の部将時代は鳥取城、播州三木城を兵糧攻めにして降伏させ、備中高松城は水攻めにし、天下をとってからの城攻めとしては、紀州太田城を水攻めしている。例外は柴田勝家に対する北ノ庄攻めぐらいのもので、できるだけそういう秀吉流でやってきた。

この小田原攻めなどは、そういう秀吉流の総仕上げのようなものだろう。

伊右衛門は、城北の荻窪山の一角に羽柴秀次軍一万余とともに城塁をきずき、滞陣の態勢をとった。

城というものは、普通、容易におちるものではない。たいていの城は武力で陥ちず、内部分裂か兵糧攻め、水攻めなどでおちている。

まして、秀吉の大坂城とともに天下の二大巨城といわれている小田原城である。

兵も強い。

源平以来、日本最強といわれている関東武士である。そのうえ、北条家百年の家史は、将と士卒の団結をかたくしていた。

「なんの上方勢が」

という敵への軽侮がある。

現に北条家の当主氏政は「関東武士は、百騎をもって上方の千騎にあたりうる。その証拠に源平のむかし、京方の平家が十余万騎で由比、蒲原のあたりまで押しよせてきたが、坂東武者におそれをなし、水鳥の群れの飛びたつ羽音におどろいて一戦もせずに富士川から逃げ去ったではないか」といった。

上方勢の華美、まったくそのとおりであった。

総大将の秀吉の扮装からして、こっけいなほどにこけおどしであった。

秀吉は、元来、ひげのはえぬ男である。

それが威厳を見せるために造りひげを垂らし、さらに武家ながらも関白という公卿筆頭を兼ねているために歯におはぐろを貼りつけ、薄気味のわるいほどの顔を作りあげて、武強第一の東国へ攻めてきた。

甲冑も、華麗けんらんたるものだ。

カブトは唐冠の形、鎧は、金の札を重ねあわせた緋縅に、熨斗付の太刀をゆたかにはき、総金

の靫の上に金の矢一筋刺し、朱塗りの重籐の弓をもち、乗馬には金の馬鎧を着せ、馬の尻には燃えたつような紅の厚房をかけるという、史上、もっともぜいたくで芝居気たっぷりの武装をしている。

攻城法も、関東式ではなかった。

はなばなしい戦いといえば山中城攻めぐらいのものであった。あとは戦闘よりも輸送が主で、兵糧、煙硝だけでなく、あらゆる物資を海上輸送してくる。輸送戦なのである。

「こんな戦さがあるものか」

と、小田原城内にいる七万人の関東武士は歯がみしてくやしがった。武家はじまって以来の戦法で、秀吉のような戦さのやりかたはなかった。

だけではない。

小田原城外に、もう一つ豊臣市ともいうべき都会ができつつあった。

秀吉は諸大名に命じて、

「気ながに城を攻めるから、ここに町をつくる。わしも淀の者を呼ぶから、そのほうどもも妻妾をよべ。屋敷もつくれ。屋敷は費用を惜しまず華麗なものを建てよ。茶のすきな者は、邸内に茶亭、庭などをつくれ」

といったから、大小名はあらそって諸国から大工、左官をよび、屋敷づくりをはじめた。

秀吉は東西南北に小路を走らせて都市計画をし、その一角には商家、旅籠、茶屋、売買市、妓楼などもできた。

伊右衛門は、千代をよんだ。
千代は近江長浜城からやってきて、
「これが合戦でしょうか」
と、さすがにおどろいた。
「関白殿下はどこにお住いでございましょう」
「いまは早雲寺だが、どうやら小田原城を見おろす場所に大きなお城をおつくりあそばされるようだ」
秀吉の秘密城ができあがりつつある。
秀吉が、小田原城攻撃のためにつくった付け城というのも、この男の性格を知る上でおもしろい建築である。
単なる野戦用の急造の建物ではない。
天守閣まである。
場所は小田原城の西南方の高地石垣山にあり、そこからは敵城をゆうゆう見おろすことができる。
「大坂城、聚楽第にまさるとも劣らず」
とさえいわれるほどの大規模なもので、本丸のまわりだけで二百四十間もある。
工事は、秘密におこなわれた。

前面に樹木が繁っているため、小田原城からなにも見えない。
工事半ばで、城の木組みに戸障子をはりつけて遠目には壁に見せ、しかるのちに前面の樹木を伐りはらわせたから、下の小田原城内の者は、
「あっ」
と声をのんだ。一夜にして城が湧き出るように出来あがっていたからである。
これには、千代もおどろき、
(なんと、ふしぎな智恵のもちぬしだろう)
とあきれた。
それよりも千代が女としておどろいたのは物価のことである。
この箱根山脈のなかに十数万の秀吉軍がすわりこんでいるため、米その他の食糧が当然高くなっていると思い、伊右衛門にすすめ、
「兵糧米は、当地で買うよりも、近江の領内から運ばせたほうがよいでしょう」
と、伊右衛門をして兵糧奉行に手くばりをさせ、はじめはどんどん近江米を運んでいた。
ところがふしぎなことに、この戦場での米価がちっとも高くなく、運ぶよりも現地で買いあげるほうがいいことがわかった。
「どういうわけでございましょう」
と、千代は、伊右衛門に理由をきいた。
「わからぬ」

伊右衛門は、愚かな顔をした。
「一豊様、左様なことでは、大名はつとまりませぬ。なぜそうなのか、たれかにきいてくださりませ」
千代の伊右衛門教育がはじまった。
そこでその理由をしらべてみると、この米価のふしぎも秀吉がやったことであった。
秀吉は開戦にさきだち、江州水口（みなくち）の城主長束（なつか）正家を兵糧奉行とし、黄金一万枚を渡し、
「この黄金で、東海六ヵ国（伊勢、美濃、尾張、三河、遠江、駿河）で米を買い、戦場付近にあつめておけ」
長束正家はさしたる武功もない男だが、こういう仕事にかけては石田三成とならんで天才的な能吏である。
さっそく、駿河の清水港に巨大な倉庫を幾棟も建て、買いあげた米をどんどん海上輸送してきては倉庫内に積みあげ、とうとう二十万石にまでなった。
この米が、米価の安定の役をなし、一文もあがらなかったという。
（源平以来、そのようなことまで手をうつ大将はいまい）
と千代は感心した。
秀吉の一夜城と通称される石垣山城はいよいよ六月二十六日に完成し、秀吉はここに移った。
移ると同時に、この石垣山城から鉄砲、矢を城内に飛ばしはじめ、同時に包囲軍の各隊は小田原城への本格的攻撃にとりかかった。

秀吉は、「人蕩（ひとたら）し」の名人であったといわれる。
自分の逸話をつくることの名人でもあった。千代も、小田原陣中で、さまざまのおもしろい話をきいた。奥州の伊達政宗の来降についてのうわさも陣中おもしろく取り沙汰されたが、それよりも千代が興味があったのは、徳川家康に対する秀吉の態度である。
あるとき、伊右衛門が秀吉の居城石垣山城に伺候し、もどってきて話を伝えた。
「おもしろい話がある」
というのである。
伊右衛門は、千代が、秀吉と家康の間柄をきくことに興味があることを知っており、できるだけそういう話を耳に入れてきては話す習慣があった。
「殿下はな」
と話しはじめた。
秀吉はその日、石垣山城に伺候した家康をつれて、城内を歩いた。
「徳川殿、ともに敵情をみよう」
というのである。
城の北東の櫓のあたり、石垣のはしまで進み出て、秀吉は下を見た。
「あはは、北条方も負けずに市（いち）などを営みおるわ」
といった。

小田原方も負けずに、城内に商人をよんで毎日市を立てさせ、乱舞などに興じている陣屋もあれば、酒盛りをしている一団もある。

「根くらべじゃな」

「左様でござりまするな」

と家康もいった。

「しかしながら徳川殿、こうして毎日みていると、城内の市へやってくる商人の数が眼にみえて減ってきている。商人は利にさとい。城内の貯えがだんだん乏しくなってくると来ぬようになってくる。いずれ、この城もわしのものになろう」

「御意」

「関八州は、日本でもっともひろい野で、頼朝以来、兵馬を育てるには日本で屈強の要地だ」

「左様」

家康は、おだやかにうなずいた。この男の顔は、富商の隠居に似ている。眼がまるく、下ぶくれで、皮膚のきめがこまかい。

おだやかに微笑すれば、無類の好人物にみえる。しかし独り居て物思いにふけっているときなど、腹の底の知れぬようなわるがしこい人物にみえる。

「はて、徳川殿」

と秀吉はきいた。

「北条領である関八州は草高何石ほどある」

「二百八十五万石かときいております」

「大国じゃな」

秀吉は急に尿意をもよおしたらしい。

「さてさて、小便をしよう。どうじゃ徳川殿、おなじするなら二人いっしょにやろう」

「はっ」

家康もやむをえず前をまくった。放尿しようとすると、秀吉は、待った待った、ととめて、「敵方にひっかけてやれ」と二人で石垣のはしへ立ち、小田原城の方角にむかって放尿しはじめた。

しながら、

「どうだ、この城と北条領、攻めとれば即刻そなたにつかわそう」

家康の関東入りはこのときにきまった。

掛川六万石

包囲三ヵ月で北条氏は降伏し、小田原城をひらき、当主氏政は自殺を命ぜられ、関東二百八十五万石の領国はことごとく秀吉に没収された。

開城から七日目に、秀吉はその麾下全軍をひきいて小田原城に入った。

秀吉は本丸大広間に着座し、即日、将兵の論功行賞をおこなった。

こういうことは、秀吉は早い。すでに包囲中にその構想を練っていたのであろう。

まず、家康。

北条の旧領に多少増減し、関東二百五十五万七千石をあたえられた。

といえばていがいい。

家康の故郷は三河で、これを中心に東海地方に多年の努力をつちかってきた。農夫にすれば、土をくだき、肥料を入れ、手をつくして耕してきた自分の田というべきであろう。

それを捨てよ、というのである。

「おことわりなされ」

と、家康の重臣のほとんどは反対論であった。家康とその重臣は東海地方の出身者で、先祖代々の墓もそこにある。

個々の感情からみても、いやだったにちがいない。

第一、政略的に損である。

「もし後日、京に旗をたてるときが来ても箱根以東では、間にあいませぬぞ」

というのであった。

家康は、知っている。所領がふえたとはいえ、天下をとる地理的条件ははるかにわるく、ついにその機会は来ないかもしれない。

「関白殿下は、殿を怖れ、はるかな僻地(へきち)に追いやろうとなさるのでございましょう」

と榊原康政などはいった。

が、家康は、田舎の素封家の大旦那のようなしもぶくれの顔に温和な微笑をたたえ、秀吉の前に進み出、

「御加増、ありがたく存じまする」

と、伏した。

(不運である)

とは家康は知っていたであろう。

しかし家康という男の物の考えかたには、一寸(いっすん)の飛躍もなかった。

「いずれは天下をとりたい」というのは、現在からの飛躍である。そういうことが、まじめには考えられない男なのである。

農夫型なのである。

猟師、漁夫型ではない。

農夫には、飛躍がない。財産をふやそうとおもえば、一尺の土地でも開墾し、耕し耕してふやしてゆく。

猟師、漁夫には、飛躍がある。いっぴきの魚もとれない日もあるかわり、大漁ということがあった。大漁、大猟を夢想し、魚やけものの居そうな海山を冒険をおかしてさがしまわり、判断し、夢想し、さらに判断し、夢想して、人生を送っている。

家康は、農夫である。

（関八州を耕そう。耕して根をおろすことだ。現実にはさからえぬ）

そう思えば、あきらめも早かった。

受けた以上、苦情をいうのは損であることも知っていた。

秀吉は恩を売ったつもりでいる。むろん、移封の真の底意はかくしたままだ。

家康もまた、秀吉の底意を知りつつ、よろこんで受ける芝居をした。

芝居だけではない。

その移転ぶりの早さも、秀吉をおどろかせた。七月十三日の移転発表、八月一日にはみずから新しい都城をきずくべき江戸に移り、同九日には家臣団のすべてが移り、同時に旧領を新領主た

ちに引渡してしまっている。

（えっ）

と、伊右衛門はわが耳を疑った。おもわぬ大賞であった。

遠州掛川六万石

というのである。ほぼ、旧領から倍の加増になった。

「これはいそがしや、千代」

帰陣するなり、いった。千代はまだ、他の諸侯の夫人とおなじように陣中に居残っているのである。

「ご転封（てんぽう）でございましょう？」

「なぜわかる」

「そりゃ……」

千代は笑いだした。伊右衛門のうれしそうな顔をみればわかるではないか。

「どこでございました」

「遠州掛川城」

「お高（たか）は？」

「六万石」

伊右衛門は両手をあげ、指を六本立てた。

「まあ、それはおめでとうございました」

と頭をさげたが、千代の眼に考えぶかそうな色が動いている。

「どうした」

「他のお歴々はいかがでございましょう」

「あっははは、千代、女だな」

伊右衛門は、満足そうだった。

「そなたも女だ。めでたいときには自分の加増分だけを話して楽しんでおればよいわい。他に大きな加増を得たひともいる。ひきあいに出すとよろこびが薄れるだけだ。どうだ、千代」

伊右衛門は上機嫌だった。亭主が女房に説諭するときほど、いい気な気持になることはない。

「千代、そうだろう」

「それはそうでございますけど」

千代は、家康が関八州へ飛ばされたことは、事前のうわさできいている。

それだけに、家康以外の諸大名の配置というのが気になる。秀吉の今後の対家康政策がわかろうというものだ。

「でも千代は」

と、伊右衛門をあやすようにいった。

「知りとうございますわ」

「そうか、教えてやろう」

伊右衛門は、発表されたことを教えた。

論功行賞といっても、まだ全般的なそれではない。家康の旧領の東海地方に封ぜらるべき大名の発表なのである。

千代はきいた。

驚いた、というのは、ぜんぶ秀吉の腹心の大名ばかりなのである。

秀吉の行政的な戦略としては家康を体よく箱根山脈の以東に封じこめ、その監視役として、箱根以西の東海道の要所々々に数珠玉をつなぐようにして、

――秀吉には絶対裏切らぬ。

という大名をおいたのであった。そのなかに、伊右衛門も入っているのである。伊右衛門の篤実さも、こうなってみるとわるいものではなかった。

あたらしい配置を東からいうと、

駿府（静岡県）城　中村一氏

掛川（静岡県）城　山内一豊

浜松（静岡県）城　堀尾吉晴

吉田（現豊橋、愛知県）城　池田輝政

岡崎（愛知県）城　田中吉政

そして最後に尾張一円から伊勢にかけて、甥の秀次にあたえている。

家康が、もし天下に野心をいだいて関東を出てくるばあい、この東海道の城々を踏みつぶして

からでなければ京にのぼれないという寸法であった。

夫婦だけの部屋である。

天下のことが、露骨に語られてよい。

「関白殿下でさえ、御自由にならぬのは御自分のお心でございますな」

と、千代は複雑なことをいった。

「どういう意味だ」

と、伊右衛門にはわからない。

千代にもうまくいえないが、話の焦点は、秀吉の家康に対する態度についてである。

秀吉が、家康を関東の大領主にしたことによってである。

考えようによっては、日本を真二つに割ってしまったことになる。

もっとはっきりいえば、秀吉の政権に対する家康の政権を認めた、ということさえいえるであろう。

日本列島は長い。

長すぎるために、一つの政権が日本を完全に統治しえた例はなく、つねに西部政権と東部政権とがあった。

遠いむかし大和に朝廷があったころはむろんそうで、その統治力はせいぜい近畿周辺にすぎなかった。

平家の政治もそうである。箱根から東は力がおよばず、坂東の地にやすやすと頼朝が根をおろしてしまった。

京都に政府をおいた足利幕府もそうで、関東の統治は関東公方にまかせざるをえなかった。

京、大坂に政権をもつ秀吉は、瀬戸内海沿岸から九州にかけての「西国」を治めることができるが、箱根から東はそうはいかない。

それを家康にゆだねた。

ともいえる。

虎を野に放ったようなものだ。

坂東は武勇の地である。古来、日本では西部政権は富をにぎり、東部政権は武をにぎる。秀吉は富、家康は武という結果になりはしまいか。かつ、豊臣政権はついに坂東の徳川政権にほろぼされてしまうのではないか。

「関白殿下は、なぜ、家康様にそのように御遠慮あそばすのでございましょう」

「わからぬな」

と伊右衛門は考えた。

なるほど、秀吉は急速に天下をとった。そのため信長のように既成勢力を一つ一つ潰してゆくのではなく、それとも妥協し、手をつなぎ、それをよろこばせつつ、ついに天下をとった。

徳川家に対してもそうである。わずか東海地方百数十万石の大名にすぎない。それをつぶさずにさんざんに機嫌をとってきた。

一つは、関東の北条氏の武威がさかんであったからでもある。家康を敵にまわせば北条氏と同盟し、さらに奥州の諸豪と結び、ついに三河からむこうの東日本は秀吉と交戦状態に入り、これを討伐しているまに九州、四国が立ちあがり、秀吉は東西勢力の挾みうちになるおそれがあった。
秀吉は、稀有な政治感覚をもっている。
それを見ぬいたればこそ、家康に機嫌をとってとって、とりつくしたのだ。
ところがいまや北条はない。
九州、四国も安定している。もはや機嫌をとる必要もなく、にわかに鬼面と化して家康を討滅してしまえばよいのだが、しかし秀吉は天性のお人よしなところがある。
家康を滅ぼさなかった。

千代の秀吉・家康観はつづく。
「そなたは、よく見ている」
伊右衛門は、あきれた。
「女ですもの。殿方の動きほどおもしろいものはございませぬ」
と千代は笑いでごまかした。実のところ、これは重要な伊右衛門教育であった。
山内対馬守一豊という名の武将は、武将とはいえ、所詮は戦国の官僚にすぎぬ。家を保ち、身分を保ってゆくには、支配者のすべてを知っておく必要がある。
「関白殿下は、その開けっぴろげで、お人の好さそうなところが魅力でございましょう？　人を二分どおり縛って八分は信用してゆく、というやりかたでとうとう天下の英雄豪傑をお手なずけになりました」

「なるほど、手なずけたわけか」
「征伐をなさらずに、ね」
「ふむ」
伊右衛門は、生徒のようにうなずいた。
「徳川様に対してさえ、そうでございましたが、後日、これは大事に至りましょう」
「大事というのは？」
「関白殿下の亡きあと、徳川様が天下の座におすわりなされるのは、火をみるよりもあきらかでございます」
「容易ならぬことをいう」
と、伊右衛門は唐紙のあたりに眼を走らせた。たれか聞いてはおらなんだか、と思ったのである。
「一豊さまはこのたび、徳川様監視の城の一つである掛川城主におなりあそばします」
「そのとおりだ」
とうなずいてから、千代のいう意味がやっとわかった。
――家康の機嫌も損じるな。
ということであろう。
「ありていにいえば」

と千代はいった。
「家康様は、関八州という華麗な座敷牢に入れられておしまいになりました」
「なるほど」
そうであろう。
「一豊様や、堀尾吉晴様、中村一氏様、田中吉政様、池田輝政様などは、その座敷牢の牢番でございます」
「あっははは、そのとおりだ」
と、伊右衛門は千代の例えばなしのうまさに感心した。
千代も、口に手をあて、
「ホホホ……」
と明るく笑った。
「でも、むずかしうございますよ、そのお牢番のお役目は」
「そうだな」
「関白殿下から信頼されてお鍵をあずかっておいでになります。殿下に対しても大任」
「そう、大任だな」
「しかし牢内のお人は、次の天下をお取りなされるお方でございます。ゆめゆめ意地の悪い牢番であってはなりませぬ」
「そのとおりだ」

伊右衛門は、うなずくほかない。
「なるほど、千代、わしはわかった。掛川六万石の城主は、天下の大名のなかでもっともむずかしい役だな」
伊右衛門は腕を組んだ。
「もうわすれること。牢番様におなりあそばしたお祝いを、二人だけでいたしましょう」
千代は酒肴（しゅこう）の用意をするために立ちあがった。

大坂は、秀吉の本城である。
このため千代は、常住、大坂の屋敷にいることになった。
「大名の妻子は人質」
という習慣が、そろそろできはじめているころである。
しかし伊右衛門は、領国の遠州掛川と大坂のあいだを往復しているから、夫婦が一つ屋根の下に住める日かずはすくない。
「正月は、大坂ですごすゆえ、楽しみにしていてくれ」
という旨の手紙が、掛川の伊右衛門から大坂の千代のもとにとどいたのは、天正十八年の十二月の半ばごろである。
「おうれしうございましょう」
と、侍女たちが千代をからかった。

「なにを言やる」
わざと取り澄まそうとするが、ついつい唇もとがほころびてくるのは、どうしようもない。
——仲のよい御夫婦。
という評判は、大名のあいだだけでなく、大坂の町家にまでひろまっていた。
もっとも、当時伊予今治十万石の大名だった荒小姓あがりの福島正則などは、
「対州（伊右衛門一豊のこと）は気の毒なものよ。よい嬶殿をもったがために、侍女に手一つ付けられぬわ」
と、あざけったという。
正則だけでなく、豊臣家の成りあがり大名たちは、立身にしたがって、側室、お手つきの侍女などをふやして後房を賑やかにしている。
伊右衛門はなさけないほど、そういうことがなかった。
当節、珍重すべき人物といっていい。
かといって、千代が、とめているわけではない。こういうことは、とめてとまらぬものだということぐらいは、千代も覚悟している。
（あるいは、掛川で？）
と、千代も面白半分にうたがったことがあるが、領国の掛川でもそのようなことはなさそうであった。
（ふがいない）

と、千代は贅沢にも、少々、伊右衛門をばかにすることがある。
ある日、伊右衛門にはっきり訊いたことがある。
「わたくし以外のおなごに、お眼移りなさいませぬか」
「さあ」
伊右衛門は、とぼけているのかどうか、そんなことには興味がなさそうであった。
「しかし千代、そなたとのはじめての夜、言いかわしたことではなかったか」
と伊右衛門がいう。なるほど、
「千代はきっと一豊様を一国一城のあるじにしてみせます。そのかわり、他のおなごにお眼移りなど、なさいますな」
とはいった。それを律義にいまだに伊右衛門はまもっているのだろうか。
（あるいは）
と千代はおもうのだ。
（そのような女房孝行の律義者ゆえ、その律義さを殿下はお買いなされて、徳川監視の掛川城主になされたのかもしれない）
大晦日に、伊右衛門は大坂に着き、天正十九年正月二日はひさしぶりで千代としとねを共にした。
「側女をお置きあそばしては？」
ふと千代は重大なことをいった。

「側女を？」
伊右衛門は、千代を抱こうとしていた矢先だったから、
「なぜそのようなことをいう」
と、気勢をそがれたような声を出した。
「でも、千代には嬰児(やや)ができませぬもの。このままでは山内家は絶えてしまいましょう」
「なんの」
伊右衛門は、すらりといった。
「そなたと一緒で得た六万石さ。夫婦が死んでそれで絶えればよし、弟の康豊に子でもできればそれを養子にして譲ってもよし」
（淡泊なのだ）
と、千代はおもった。伊右衛門の取り柄だが、反面、あくのなさが、武功歴の古いわりに伊右衛門の出世を遅くしている。伊右衛門よりも年下の加藤清正などは、すでに肥後熊本二十五万石の大領主になっているのである。
「千代、なぜまた急に」
「関白殿下の鶴松君が、おうらやましかったからでございます」
「千代も女だな。詮(せん)ないことをいう」
と、伊右衛門は、ふしどの中で声をたてて笑った。

なるほど、秀吉という男はずいぶん女をあさってきた男だが、正室の北政所にはむろん、他の側室とも子をなさなかった。
ところが、一昨年の天正十七年五月二十七日、側室浅井氏（淀殿）が男児を生んだのである。秀吉五十四歳の子だったから、狂わんばかりによろこび、寿命を保つ縁起からお棄(すて)、鶴松などと名づけた。
鶴松誕生のときは、天子は産衣(うぶぎ)を贈られ、公卿、大名、富商は大坂城へ引きもきらず参賀にゆき、城内はごったがえしたものだった。
秀吉が狂喜したばかりではない。
正室の北政所も自分が生んだようによろこび、夢中になって養育した。
このころの習慣からいえば、鶴松の実母は淀殿だが、正母は北政所なのである。
秀吉は、まだ片言がいえる程度の鶴松に手紙をやったことがある。
このときの文意にも、
「両人の御かか様」
という言葉をつかっている。「鶴松の二人の母親」という意味なのである。
「だから」
と、千代はいった。
「そのようなことがあれば、わたくしもきっといい母になるつもりでございますよ」
「まず、ないことだ。それよりも千代、そなたはまだ子をあきらめることはあるまい」

伊右衛門は抱いた。

……夫婦のあいだにそんな会話があった翌日、諸大名を驚かせた事態がおこった。

鶴松が、淀城でにわかに病気になった、といううわさがひろがったのである。

諸大名は、さっそく大坂城に登城し、お見舞を言上した。

秀吉はむろん、食事もとれぬほどに心痛し、さっそく病気平癒のため、神社仏閣に土地を寄進しては祈禱させた。

ほどなく病いは軽くなったが、健康がすぐれなくなった。

そのうち、秀吉がかねて計画していた大明国討入りの大計画が、にぎやかにうわさされたり、京の東山のふもとに大仏を建立(こんりゅう)したりして、鶴松の健康についてはあまりうわさされなくなったが、この年八月二日、ふたたびこの幼い天下の後継者が、重病にとりつかれた、といううわさがでた。

(妙なおんなだ)

と、亭主の伊右衛門はときどき、千代をそうおもうことがある。

毎日、千代は縫いものに余念がない。唐渡りのうつくしい織物をみつけては、さまざまな小袖を縫っている。

山内対馬守一豊夫人

といえば、貴婦人というべきだが、その毎日は仕立屋とかわらない。

ふつうの仕立屋とちがうのは、できあがった小袖を、ひとにただでくれてやることと、一作ごとに袂(たもと)のかたちや襟(えり)の景色などに斬新な工夫をかさねていることぐらいである。

そうしたある日、伊右衛門が千代の部屋に入ると、花色の地に金糸銀糸で唐船をえがいたみごとな小袖をぬっていた。

ひどく寸法が小さい。

「たれの小袖だ」

と問うと、

「若君様の小袖でございます」

そう答えた。若君様とは、秀吉の子、鶴松のことである。

「ご全快の日のために」

と千代がいった。

鶴松の病状は、一時わるいと伝えられていたが、また持ちなおしたともいう。千代はそれをきいて、鶴松にふさわしい小袖をさまざまに工夫し、やっと縫いはじめたのである。

「いや、きょう殿中できいた話では、またまたお悪くなられたらしい。小袖どころではあるまい」

といっているうちに鶴松の病状が一進一退しつつ八月の四日に危篤におちいり、五日には世を去ってしまった。

秀吉の悲しみは、尋常でない。

鶴松の死の翌朝、とりあえず秀吉は京の南郊にある東福寺へ行き、愛児の菩提をとむらい、そのあげく悲しみのあまり、発作的にまげのモトドリを切った。
（あっ）
と、満堂の諸侯は息をのんだが、それをみた加藤清正はすかさず脇差をぬいて自分のモトドリを切り、足もとの瓦だたみの上に投げた。
他の諸侯もだまって立っているわけにいかず、つぎつぎと切った。
伊右衛門も、切った。
切りながら、真むかいに立っている徳川家康を見ると、家康はさしうつむき、脇差を頭上にかざし、いかにも悲しみ深い表情で切っている。
（本当に、悲しんでいるのかどうか）
伊右衛門は、疑問におもった。秀吉の悲しみとは別に、この場で一種の劇がおこなわれている。
モトドリの山がきずかれた。
堂を出たとき、秀吉以下、三百諸侯はいちように大童（おおわらわ）の髪になってしまっていた。
この話をあとで千代がきいたとき、
「きっと、このさき世が荒れましょう」
といった。
そういう気がしたのである。
秀吉の精神状態は、ただごとではない。

かれは、モトドリを切った翌七日、清水寺へ行って放心状態の半日をすごしている。
その翌々日には京にも大坂にもいない。
有馬へ湯治に出かけたのである。
自分の悲しみを癒（いや）そうとした。しかし湯治で癒（い）えるものではなかった。
（なにか、しなさる）
と千代はおもった。
鶴松の死から十数日たった八月二十日、秀吉はにわかに、
「大明国へ討ち入る」
と宣言した。
だけではない。諸奉行に命じ、沿海の諸国に対し艦船の準備をするよう指図させた。
当時の言葉では、
「唐入り」
といわれた。唐入りのことは、秀吉が織田家の部将時代から放言していたことで、みな本気にはしていなかったのだが、それが正気の沙汰になったのである。
千代は、大坂の屋敷でこの驚嘆すべき事態を知ったとき、
（鶴松様がおなくなりあそばしたからだ）
と直感した。

モトドリを切っても癒えず、寺詣りでも癒えず、有馬の湯治でも癒えなかった秀吉の傷心が、ついに、大明国討伐という途方もない行動になってあらわれたのであろう。

（そうとしか思えない）

狂気の沙汰である。

秀吉の諸大名のたれ一人として、この外征をよろこぶ者はあるまい。みな、戦国期を切りぬけてきて、疲れきっている。

諸大名をはじめ天下は、休養を欲していた。欲していたからこそ、秀吉の天下統一がとんとん拍子にうまく行ったのである。

どの大名も、領内の治安、殖産に没頭していた。現状に満足していた。

（秀吉様ともあろうお人が）

と千代はおもった。

千代は、秀吉ほどに時代の心をつかみ、人の欲する方向を明察する名人が、これほどのことがわからないのか、とおもった。

（物に狂われたのだ）

としかおもえない。

たしかに豊臣家の衰運はこのときにはじまるのだが、千代は、それをごく女らしく鶴松の死で察した。

「殿中から、笑い声が消えた」

と、伊右衛門がいった。かれは鶴松ぎみの喪中にあるために、それをそう理由づけたが、千代はそうとは思わなかった。大坂城に登城する諸侯の胸中には、鶴松の死などよりも、軍費の調達をどうしようという悩みがあるはずであった。

ほとんどが、新しい領国なのである。民をしぼりすぎては、旧時代の国主領主に仕えていた地侍が、農民をそそのかせて一揆をおこしかねなかった。

のちに、このころの家康の表情が語り伝えに伝えられ、千代は晩年に知った。

この時期、家康は江戸城に帰っていた。秀吉からの正式の使いが来るまでに、大坂屋敷から急使がきて、その情報をもたらした。

謀将本多正信が御前に進み出、その旨を伝えると、家康はだまっている。眼をつぶったまま、すわっていた。

（お耳にとどかなんだか）

とおもい、ふたたび言上したが、やはり眼をつぶり、顔が苦渋に満ちている。三たびいうと、

「さわがしい」

と家康は眼をひらいてどなりつけた。

「聞こえておる。唐入り唐入りとさわぐが、箱根をたれがまもるのか」

といった。

（さては御思慮のさだまりしことよ）

と、正信は安心してひきさがった。家康は箱根を守るという名目をつくって、不参加を決意し

たのである。唐入りなど、国力が疲弊するだけだということを、この男はずるくも知っている。

「おもしろいこと」

と千代はおもった。夫の伊右衛門をもふくめて、かれらが動かされている「政治」というものについてである。

というのは、いよいよ唐入りの軍令が発せられたとき、日本最大の大名である徳川家康の名は、秀吉が発した朝鮮出陣大名の名簿には入っていなかった。

家康は、かつて秀吉に、

「それがしがあるかぎりは、殿下に陣羽織をお着せするようなことはござりませぬ」

といったことがある。秀吉の戦争はすべて自分が直接指揮をしようという意味である。

ところが、家康は、こんどの出陣をしぶった。

理由は、自家の繁栄上、まずい。江戸の府城建設はまだ緒についたばかりだし、関東八州の広大な所領は、ほんの最近までほろんだ北条氏の領地で、いまから地侍や農民を撫でてゆかねば、このさき、どんな反乱をおこすかわからない。

とまれ、家康は内治にいそがしい。

（朝鮮、大明などへ行けるか）

ということであった。

この家康には、どの英雄にもあるおっちょこちょいなところが皆無なのである。ふつうならば、

「それがしが手をくだいて朝鮮、大明をとって殿下に進上してみせましょう」

と、景気よくいってみせるところだ。ところが、家康の感情も理性も、そうはできていない。一見、侠気に似たものはあるが、一皮むけば実利一点ばりの男で、それがこの男の場合、実利にみえないようにたくみに演出しているだけのことである。

かれは、部将をつかって秀吉の諸奉行にそれとなく運動させ、

「もしそれがしが外征で留守をすれば関八州の旧勢力はふたたび息をふきかえして豊臣の天下を危難におとしいれましょう。されば天下のため関東の鎮めに専念したく存ずる。しかしながら、前線が急をつげてそれがしが必要とあれば、ただちに駈けつけ、敵を手取りにいたす所存でござる」

といわせた。

秀吉は、家康に必要以上の遠慮をするくせがついてしまっている。

家康が、弾まぬ、と察し、この男は家康がじきじき言いださぬ前に、

「徳川殿は後詰め（予備隊）に」

といってしまった。

家康は、残留することに成功した。自分の軍隊と自分の金を、無用の外征で消費することからまぬがれたのである。かくて、朝鮮出陣の諸大名が経済的に疲れきってしまうときに、家康の財政は逆にぬくぬくとふとることになる。

（だから）

と、千代はおもうのだ。

(一豊様も、残留することになった)

当然なことである。遠州掛川城主である伊右衛門は関東の家康の「牢番」だから、秀吉は対徳川への用心のために伊右衛門を残したのである。千代が「政治とはおもしろいものだ」とおもったのは、そのことであった。

「しかし千代」

と、伊右衛門はその日、もどってくるや、浮かぬ顔でいった。

「留守居の総大将は京都にいます秀次様になっている。わしはあのお方を好まぬ。いっそ願い出て、御渡海の陣に加わりたい」

伊右衛門は、いやいやながらも、京都の秀次の付け大名として出仕した。

千代も、京都に移住した。

夏を越した。

「千代、すまじきものは宮仕えというが、かつては戦場を往来した武士も、長袴をはいて出仕すると、公卿同然の心持になるものだな」

と、伊右衛門はこぼした。

伊右衛門にいわせると、秀吉に仕えたつもりはあるが、秀次のような愚劣な若僧を主人としてえらんだ覚えはない。が、宮仕えのかなしさ、それをがまんせねばならぬとはなさけない、というのであろう。

「あの小僧」

と、伊右衛門はそんな言葉をつかった。この、一見、律義でおとなしそうな男が、千代の前とはいえ、そんな言葉をつかうというのはよほど虫が好かぬのであろう。

「千代はどうだ」

「だいきらい」

といいたかったが、夫婦とは妙なもので、知らず識らず人間の好き嫌いについてはたがいに影響しあい、同化しあうことを千代は知っているから、ここはつつしんだ。

「だって、よく存じませぬもの」

と微笑でごまかしている。

「しかし、いやな奴だぞ。世にあれほどいやな男も、そう多くはいまい」

「まあ、そんなに？」

千代はつい吊りこまれそうになったが、うんとおなかに力を入れてがまんした。

「そ、そんなに申されるのではございませぬ」

「千代、ずるいぞ」

と伊右衛門は千代を指さした。

「そなたはわしとおなじくらいにきらいなはずだ」

「いえいえ」

と千代はあわてた。

「お会いしたことがないのに、きらいなはずはないではありませぬか」

「うわさというものがあるわい。うわさによって自然、好ききらいがきまるものだ。正直にきらいだといえ」

「でも」

「さもなければ、わしが退出してからたれに愚痴がいえる。わしの胸も察しろ」

「でも」

千代はとまどってしまった。ここで、わたくしもきらいだ、といってしまえば、伊右衛門の秀次への悪感情が倍加するであろう。

悪感情とは、いつかは相手にわかるものである。秀次にきらわれては、どんな不幸が舞いこむかわからない。

「ね、がまん」

と、伊右衛門をあやしておくしか、しかたがなかった。

冬になった。

その十二月二十八日、秀吉は養子秀次に関白をゆずった。

鶴松の死後、秀吉はもはや子はうまれぬと見て、天下を秀次にゆずる気になったのであろう。

「つぎの天下様」

ということになる。

そのことが発表された日、伊右衛門は帰ってきて、

「わしは出家をしたい」

とさえいった。

それほど伊右衛門がきらう秀次とは、いったいどんな「小僧」なのか、千代は知ってみたくなった。

（いずれは、拝謁してみたい）

とおもっているが、とにかくそれまでに千代は関白秀次という男について、できるだけ多くのことを知ろうとした。

秀吉は、肉親がすくない。

これは戦国武将にとっては非常な損で、戦国の世では、肉親は腹心、手足になってはたらく。やむなく秀吉は、妻の家系のほうからその腹心を作ってゆき、天下をとるとともにそのうちの数人を大名にした。

が、子のない秀吉にとっては、自分の血族から養子をたて、それを育てて世をゆずりたかった。ところが、秀吉の血族というと、数がすくない上に、弟の大和大納言秀長のほかは、能力のありそうな者がいない。

やむなく、姉の瑞竜院日秀が、三好一路とのあいだに生んだ子を養子とした。これがのちの関白秀次である。

はじめは、次兵衛といい、ついで孫七郎といった。

とりたてて能のある男ではない。

秀吉はかつて長久手の戦いで、秀次が敗戦をしたあげく、味方を置きざりにして逃げ、このため前線の多くの将士を犬死させた罪を怒ったその叱責状のなかに、「今のように無分別では、命を助けておくのもかえって一門の恥である」とか、「今日まではそのほうは、器用で小ざかしくあるようによってゆくゆくは自分の姓をも継がせようと思っていたのだが、いまのような心では、天が自分の姓を残すなともおおせられているのであろうと思い、まことに残念である。今後、心を入れかえて改めることがなければ、人手にかけずに滅亡させてしまう」とかいっている。

器用で小ざかしい、というのが、この「小僧」のとりえであった。

この手紙は、ずいぶん世にうわさとなってひろまったもので、千代も知っている。

要するに、どの村どの町にでもころがっている頭がわるいくせに小器用で小ざかしい若者なのであろう。

(それが)

と千代はおもうのである。

天下の豊臣秀次様になってしまったところに、秀次にとっても、天下にとっても不幸があったろう。

とまれ、所領は尾張、北伊勢をはじめとして通算百万石。

官位は、小田原征伐のときにはすでに権中納言であり、つづいて権大納言、さらに今年に入って、鶴松の死によって秀吉の養子になるや、内大臣、関白とすすんだ。

関白をゆずった秀吉が、太閤と敬称されたのは、このときからである。

年が暮れた。

明けて文禄元年二月。

秀次は、秀吉が関白になったときの慣例により、そのゆるしを得て、後陽成(ごようぜい)天皇を聚楽第に御招待申しあげた。

つき従う大名は、内地防衛を命ぜられた伊右衛門らだけであるが、とまれ、秀次一代の盛儀といってよかった。

この日から数日後、千代は、秀次夫人に拝謁、というかたちで、はじめてこの「小僧」の顔をみた。

千代は聚楽第の大奥へ伺候し、関白秀次の妻にお目見得した。

平伏していると、

「顔(おもて)をあげますように」

という声がかかったが、作法どおりあげかねる風情をしている。そのとき、礼としてちらりと上段を見る。

(おや)

と、おもったほどおさない少女が、関白の妻という座にいた。

通称、一ノ台様といわれる人である。
菊亭大納言の娘で、まだ年のころは十六、七であろう。
ほどなく廊下に数人の人数が渡ってくる足音がして、ふすまがひらいた。
関白秀次が、侍女を従えて入ってきた。こういう大奥での対面は異例であろう。
「山内対馬守の妻女か」
と、秀次は着座するなりいった。
「名は、聞き知っているぞ。才色兼備の評判が高い」
「……」
千代は、細い肩を伏せたままである。その頭上を、カン高い声がすべってゆく。
「馬のこともきいている。山内対馬守のために手鏡の裏にひそめた黄金十枚を出してやったということも」
むかしの評判を、いまさら人の口からきくのは、千代自身にとってうれしいことではない。なにやら、才はじけて抜け目のない女を自分の中に見るようで、いやであった。
「おはずかしうございます」
「あれは、対馬守が牢人のときか」
「すでに織田家に仕官しておりました。太閤殿下が長浜の城主であられましたとき、その与力として恪勤しておりました」
「身分はまだ低かったな」

「はい」
「それからみれば、立身したものよ」
と、秀次はいったが、べつに軽侮しているわけではなく、そういう物の言い方が好きな男であるらしい。
が、腹は立つ。伊右衛門がいやがるのも、この男のこういう所かもしれない。
(人間、物の言いかた一つでずいぶんと無用の手傷を人に負わせるものだ)
「わしはまだ若いが、昔のことを知ろうとしている。学問は、文字ばかりではない」
「はい」
「かつて主計頭(加藤清正)にもきいた。殿下が近江長浜におわしたころは、百石そこそこであったという。それがいまは肥後半国二十五万石に封ぜられている」
とすれば伊右衛門はたったの六万石、からかわれているようなものではないか。
が、秀次はべつに邪気はないらしく高声で笑い、
「人の運命とはおかしなものだ」
といった。意味はべつだんない。ただ鳴っているだけのしゃべりかたである。
「そちは、美しいな」
と、磊落をよそおっていった。
「おそれ入りまする」
「学問はあるか」

と、突如いった。
「ございませぬ」
「わしは、学問が好きだ」
それがいいたかったらしい。そういえばこの秀次という男の学問好きは異常であった。
（まあ、このひとが学問。……）
千代は内心、噴きだしたい思いをおさえて平伏している。
関白秀次の顔は一見狐に似ているが、狐ほどにはひき締まっていない。若いせいか、ひどくなまぐさい顔でもある。
それに、眼に落ちつきがない。
その男が、学問が好きだ、と取ってつけたようにいうのである。なにか、そう誇示せざるをえないわけがあるのであろう。
「わしは、諸大名にも学問をすすめている。そなたの夫対馬守は、書見していることがあるか」
「ございませぬ」
と返事して、千代はそのこともおかしかった。あの伊右衛門が書物を読んでいる姿など、想像もできないではないか。
「それはいかん。こんど対馬守が来たらぜひ叱っておこう」
「おしつけを願わしうございます」

と千代は当たらずさわらずにいっておいた。
その実、千代は関白秀次に学問とか教養など、かけらもないことを知っている。
叔父の秀吉は、馬上天下をとった。
そのため、この小ざかしい若者も、まだ嘴（くちばし）の黄色いころから、従四位下右近衛中将という「公卿」になり、またたくまに権中納言、権大納言、内大臣、関白、と昇進した。
余談だが、この官位は徳川時代の諸侯の官位ではなく、公卿としての官位なのである。だから、宮廷で公卿として世襲の公卿たちと社交しなければならない。なにぶん、ほんものの公卿は、学芸を身につけている。
秀次は、御所で恥をかいたことも何度かあるらしい。
千代の知らぬことだが、当時の公卿近衛信尹（のぶただ）の手記（三藐院記（さんみゃくいんき））に、
「若輩無智の秀次卿」
というひどい言葉がつかわれている。
それに、この節、朝廷は前代にないほどの学問ばやりであった。
朝廷の中心である天子（後陽成天皇）が学問好きで、たとえば孝経や職原鈔、弘安礼節、論語、孟子、大学、中庸の印刷をさかんにされている。
自然、秀次は背のびせざるをえない。
が、学問がない。
その才もない。

このため、学問の保護者になるべく、下野の足利学校の蔵書を京都にあつめたり、日本紀、日本後紀、続日本紀、続日本後紀、文徳実録、三代実録、実了記、百錬抄、女院号、類聚三代格などを印刷しては朝廷に献じたり、大和諸寺の僧十七人を召して源氏物語を筆写させたりして、いわば出版業者のような仕事をしている。

「千代、そなたも源氏物語くらいは読んだほうがよかろう」

千代は、読んだことがない。

「読めば、やさしさが出てくる」

「あの」

と、千代はだまっていられなくなった。

「千代にはやさしさがない、とおおせられるのでございますか」

「あははは、そこが武家育ちの粗野なところだ。源氏でも読めば、もののあわれということがわかってくる」

公卿きざ、というものであろう。

そういえば、関白秀次は、公卿にまねて歯にかねをつけ、顔に薄化粧をしていた。

千代は退出して、屋敷にもどった。

（あれが二代様におなり遊ばすのか）

とおもうと、心が暗かった。いいようもなく、不愉快であった。ちょうど、気味のわるい長虫

でもみたような気味である。

「お茶室の支度を」

と、侍女に命じた。

心が、静まらない。

屋敷の奥には夫婦のための、いわば語らいの場所といっていい小さな茶亭があり、千代の好みで露地に柴垣をめぐらし、ほんの十坪ばかりの庭も作っている。

茶亭の軒下に、椿が一本植えられている。

もともと椿の花は、落花の様子がちょうど首が落ちるような風情なので武家の庭には禁物のものであった。

が、いまは流行の庭木といっていい。秀吉がこの木をひどく好んでいたからである。

廊下を渡って茶亭に入ろうとした千代は、椿の花がほころびかけていることに気づき、足をとめた。

「まあ、白椿だったのですか」

と、つぶやいた。

「私は紅椿かとおもいこんでいました」

千代は自分の錯覚をおかしがり、声をたてて笑った。

椿といえば紅、ときめてかかっている固定概念こそおかしい。

（太閤殿下のつるにとんでもない花が咲いたことを、ひとり勝手にふしぎがったり、不愉快がっ

たりしているのも、あたらないことかもしれない）

炉の前にすわった。

ふと、秀次に対してもっとも不満に思っているのは、秀吉自身であろうと思った。

千代は、聞いている。秀吉が関白職をゆずるとき、秀次に対し、まるで愚童に垂れるような箇条書の訓戒をあたえたことを。

第一条は、

「武臣の本職として武備の心掛けを専要とせよ」

とある。第二条は、

「政道は公平にして親近に私（わたくし）すべからず」

であり、第三条も「臣下を愛撫せよ」というごくあたり前のことで、二十代の半ばをすぎた男としては、そう言われること自体が不名誉であろう。

第四条が、おもしろい。

秀吉は、自分が遊び好きの女好きであることも知っており、かつ、秀次の性格にも、そういうことにのめりこむ危険性のあることをよく知っている。

「茶の湯、鷹野、女狂い（おんなぐるい）など、一切秀吉の道楽を真似るなかれ」

と書き、

「ただし、茶の湯は人を招待するためのものはかまわない。鷹野（鷹狩り）は、小鳥やウズラにかぎってはかまわない。さて女のことだが、女中（側室）は五人でも十人でも邸内におくことは

かまわないが、大ぴらの道楽はいけない」

側室の人数を限定してゆるしている。

（ともあれ）

と、千代は茶碗を抱きながらおもった。

（あれほどいやな男も、めずらしい。一豊様がいやがるのもむりはない）

秀吉の死後、世の中がどうなるのか、と千代はそぞろ、肌の寒くなる思いがした。

一年、経った。

事件は、しずかに進んでいる。関白秀次は秀吉の朱印付の訓戒を、ことに女色の面で破りはじめたのである。

「側室が、三十数人もおわすそうな」

という評判が、京の市中で高くなった。

（いやらしい）

千代はおもった。千代はこの当時の女性として、男の好色についてさほどの嫌悪感はない。が、人にもよる、と思った。

（あの若者が）

と思えば、ぞっとする。とかげのような感じのあの無智な若者が、顔に薄化粧をし、眉を描き、歯を黒く染めて、妻妾三十余人を率いる、ということじたいが、ぶきみではないか。

「秀次様は、大きらい」
と、千代は伊右衛門にだけはいった。
ところが妙なことに、伊右衛門はさほどには思わなくなったらしく、
「わしは馴れたな」
とちかごろはいっている。
ある日、千代はそのことで伊右衛門と小さないさかいをした。
「だから、男の人は信じられませぬ」
と千代は容易ならぬことをいうのである。
「どういうわけだ。わしは別に、女ぐるいなどはしたことはないぞ」
「いいえ、左様なことは申しておりませぬ。一豊様は、はじめ、関白秀次様を、あれほどいやな男はない、と申されましたではありませぬか」
「申した」
「それが、ちかごろでは、ちっとも左様なことは申されず、せっせと聚楽第がよいをなされております。好きなら好き、きらいならきらい、となぜ自分の感情に操（みさお）をお立てなされませぬ」
「おいおい」
伊右衛門は閉口した。
「あの方は、わしにとって主人に準ずる方だぞ」
「わかっています。でも、ご自分の感情に操があってしかるべきだと思います。男のひとというのは、なんだかそういうところがだらだらしていて、ご自分に妥協的で、きたならしいと思います」

伊右衛門はあきれている。千代がこんなに感情的になったのは、めずらしいことだった。
「わしだけではない」
と伊右衛門はいった。
「天下の諸侯は、関白秀次様が二代様だと思えばこそ、ご機嫌を奉伺することをおこたらぬ。奥州の伊達政宗殿、出羽の最上義光（もがみよしあき）殿、豊後（ぶんご）の細川忠興（ただおき）殿などは、それぞれ国産のめずらしいものなどをお贈りして、なかなかのお勤めぶりだ」
「一豊様はご自分に対して節義のある武士でいらっしゃいますから、左様な方々とはちがいましょう」
「はて、千代、こまるなあ」
まったくこまる。伊右衛門は、秀吉からの付け大名として秀次に従っている。いわば家来なのである。
が、この年の春であった、大坂城にいる秀吉の第二夫人淀殿が、懐妊あそばされている、といううわさが京、大坂に流れたのは。
この報は、諸大名の顔色をかえさせた。もし男ならば、関白秀次の運命はどうなるであろう。
千代が女だから、淀殿の胎児に興味をもったのではない。大げさにいえば、全天下がその胎児

を注視している。
秀吉は、当時肥前名護屋城にいた。
淀殿懐妊の事実を知ったとき、この五十七歳の老人は、狂わんばかりによろこんだ。
さっそく、正室である北政所に陣中から手紙を書き、
「この児は、自分の子ではない」
と妙なことを書いている。
「ただひたすらに淀殿の子である」
というのである。
このおかしな文面は、若い第二夫人の懐妊を正室に遠慮したのでもなく、また淀殿が他の者と通じて子をなした、ということでもない。
秀吉にすればこんどの子を、自分の実子でなく、
「拾い子」
であるとしたいのである。拾い子は丈夫に育つという。なまぐさい人間の体の一片からうまれたものではなく、拾い子は神仏の子だという迷信がある。神仏は、自分の子だからむやみと死なせたりはしない。
秀吉はこの迷信によって、神仏をだまそうと努力した。
八月三日、淀殿は男子を安産した。
秀吉は、いったんこの赤ン坊を捨てさせ、家来の松浦讃岐守をして拾わしめた。

そこで名も、
「拾（ひろい）」
とつけた。
お拾、と敬称のおをつけることとさえ厳禁した。
秀吉はいそぎ、肥前名護屋から大坂城へ帰城し、父子の対面をとげ、しかるのちに考えた。
この子の将来を、である。
（しまった）
と秀吉はおもったであろう。
もう子はできぬと思いこんで、うっかり天下を秀次に譲ることを、内外に発表してしまっている。
（どうするか）
秀吉は、さきの鶴松の死、こんどの秀頼の出生あたりから、すっかり愚人にかえってしまった。功成り、名遂げた英雄の晩年によくみられる愚人化が、秀吉のなかにはじまっている。
（どうなさるおつもりだろう）
というのが、千代の関心事であった。彼女だけでなく世間のすべてが、秀吉の一挙手一投足を見まもっている。
秀吉が、秀頼の出生と同時におもったのは、自分の最も大事なものをこの子にやろうということであった。

秀吉にとって最も大事なものといえば、天下の権であろう。
が、それには、関白秀次という者がいる。
秀次にさしさわりがあるため、とりあえずこの零歳の子に、
「そなたに大坂城をやるぞ」
といった。
言っただけではない。それを実行しはじめたのである。零歳の子に大坂城をやるとすれば、秀吉自身の隠居城が要る。
ほうぼう、土地をさがした。一時は、大和の信貴山（しぎさん）に目をつけ、ここに巨城をつくろうとしたが、京都への往復が不便なため、結局京都の南郊伏見の丘陵地帯をえらび、伏見城を築くことにきめた。
その発表は、秀頼出生後四ヵ月目のことである。

伏見桃山

文禄三年正月、秀吉が伏見城の築城を発表してから、伊右衛門の公務はいそがしくなった。
「わしだけではない。このさき、諸大名は、京都の関白秀次様、大坂のお拾様、それに伏見の太閤殿下というぐあいに、三ところに御機嫌を奉伺せねばならぬため、えらくいそがしくなる」
と千代にこぼした。
千代は、秀吉がこんど築城しようとしている伏見桃山という地に興味があった。好奇心のつよいのは、千代のくせである。
「見たい」
と夫にねだった。
伊右衛門は仕方なく千代をその地につれて行った。
当時、伏見は大坂への河川交通の始発点なのである。夜、船に乗れば朝には大坂の天満（てんま）に着いた。
京へも三里。

これほど、隠居の秀吉にとって便利な土地はすくないであろう。かといって、戦術的にも国内政治の上からでも意味のある城ではない。
秀吉の、ごく家庭的な理由からうまれた築城なのであろう。
（無駄な）
と千代は思うのだ。秀吉一代の失敗は朝鮮征伐をして国費を濫費し、諸大名とその領民を疲労させ、ついにはこの巨大な浪費主義政権に魅力を失わしめたことであった。
秀吉の浪費は、とめどもない。外征軍が朝鮮で戦っているときに、戦術上、政治上なんの意味もない金殿玉楼を、伏見桃山の丘陵に現出せしめようというのである。
現地に立って千代は、
（お狂いなされた）
とおもうしかない。天下の大名、士民はこの築城をどう思っているであろう。
余談だが、千代の感慨には筆者の説明が要るであろう。
当時、秀吉は、日本一の富豪であり、おそらく史上、前古未曾有の大金持であった。
自分の金を浪費するのか。
そうではないのである。
当時の経済のしくみとして、戦争をおこして兵を外地にやるのも、その経費、戦費はすべて諸大名の自前であった。秀吉自身の財産の損にはならないのである。

伏見城を築くについてもそうであった。天下の諸侯に「手伝い」をさせ、費用はすべてかれらの頭割りになる。
秀吉の金蔵の金も兵糧庫の米も、このために減ることはないのである。
むしろ、諸大名が個人の浪費によって貧乏すればするほど、比較して秀吉は金持になるという仕組みであった。
（もういいかげんになさらぬか）
という気分が、諸侯の間につよい。
かれらは、この浪費のおびただしい政権にうんざりしはじめていた。が、かれらの多くは秀吉を押したてることによって大名になった連中である。忠誠心はある。秀吉との共同運命感というものはある。
が、あくまでもその気持は秀吉個人に対してであって、「この政権に魅力がある」というのではなかった。この派手ごのみの政権があと三十年もこの調子でつづけば、ほとんどの大名は破産するであろう。
そういう気分が天下に満ちている。そのさなかに、秀吉は伏見城築城という大浪費をしようとするのである。
（子煩悩のあまり、物に狂われたか）
と千代がおもったのもむりはない。

筆者、註（ちゅう）。

「桃山」

とは、つややかな地名である。いま城が築かれようとしている伏見山の別称と心得ていい。

秀吉一代の栄華は、この伏見城の華麗な建築をもって象徴され、文化史上、「安土桃山時代」という呼称を生んだが、この当時から桃山という呼称があったわけではない。

家康が大坂の役（えき）で豊臣氏をほろぼしたあと数年して、この伏見城をもって無用の城とした。もし謀叛をおこす大名があってこの城に籠られては、北に京、南に大坂をひかえ、中央を制圧するのに絶好の場所になる。

だけではない。

この華麗な城が、淀川上流の天にそびえているかぎり、士民は太閤栄華のころをしのんで徳川の世を厭（いと）わしく思うかもしれない。

「こぼて」

と家康は命じた。

こぼって、その遺構を、京都およびその付近の社寺に寄進した（こんにち、西本願寺唐門（からもん）、同飛雲閣、浪の間、客殿、豊国神社唐門、琵琶湖竹生島（ちくぶじま）の観音堂、同神社拝殿、大徳寺唐門などはそれである）。

このため、城跡はさびれた。おそらく豊臣滅亡後ほどもないころであろう、付近のひとが何を思ったのか、紅桃三万本を植えた。

それが育ち、花をつけるころになると、春は満目、霞が紅（くれない）に曳（ひ）くほどで、京の者はひそかに

その紅霞を通して太閤の豪奢をしのび、いつのほどともなく、この城跡を、

「桃山」

といいならわすようになった。

——あの桃山に城のあった時代はよかった。

と、都の者はおもったであろう。なぜならば、太閤の巨大な浪費によって京、大坂は黄金の雨がふるほどににぎわったが、政権が江戸に移るとともに、とくに京は灯が消えたような町になったからである。

ともあれ、千代。

千代は、この時代でもっともすぐれた時代洞察者であったろう。

伏見の丘陵に巨城ができあがってゆくにつれて、京の聚楽第の様子がおかしくなってきたのを見ぬいている。

聚楽第のぬしは、関白秀次である。

「関白様は、ちかごろ、どのようなご様子でございます」

と、主人の伊右衛門が、聚楽第のほうへ登城して帰るたびに千代はきく。

きょうも、そうである。

「おやつれのていであったな」

と、伊右衛門にはそれだけしか、わからない。

「すこし女色が、お過ぎあそばすようだ」

「まだお若うございますもの」

千代は、そんなことは気にかけていない。

「ほほう、千代は寛大だな」

と伊右衛門はからかった。女ならば、こういうことをきらうか、と思ったのである。

「きらいだ」

とは千代も思うが、女好きというのはうまれついた性格、体質で、道徳をもって考えるべきことではない、と千代は思っている。ちょうど、節約家、浪費家というものが、性格にもとづいたもので、他人に迷惑をかけぬかぎり、道徳の範囲で論ずべきことではないと千代は考えていた。

「それとおなじでございます。関白様の女色より、女色の奥にあるものが、なにかございましょう」

千代が、噂としてきいている関白秀次の乱行というのは、

(まさか)

と信じかねるほどのものだった。

これは、乱行といえるかどうかは別として、去年の正月五日に、正親町(おおぎまち)上皇が七十七歳の御齢でなくなられた。

当然、京では庶民にいたるまで喪に服するが、公卿ともなれば、近臣として精進潔斎をしなければならない。

ところが、上皇崩御ののち十日目には夕食に鶴を殺して食べている。こういう物忌(ものい)みのなさと

いうのは、この当時にあってはどちらかといえば最大の非行であるかもしれない。

諒闇(りょうあん)中、それだけではない。殺生のつつしまねばならぬこの時期にしばしば猟に出て鳥獣を獲った。

「殺生関白」

という異名が、京の市中の男女にささやかれはじめたのは、このころからである。

——素姓の卑しさはあらそえぬ。

と、公卿たちもささやいた。こういう批評は、義父の太閤秀吉にとって身を切られるようにつらかったであろう。

いちいち、報告にゆく近臣もあるらしく、秀吉の耳にことごとく入った。

市中のうわさでは、あるとき秀次は聚楽第の櫓(やぐら)の上にのぼって、市街のにぎわいを見おろしていた。

「蟻のように往き交(こ)うておるのう」

とつぶやいた。実感だったにちがいない。

が、その次の行動が異常である。

「鉄砲で射てばおもしろかろう」

と、すぐ支度を命じた。まったく、虫でも殺すような手軽な気持になったのであろう。そばの者も、さからうと手討にされるから、この男の言うがままに鉄砲に火縄をつけて渡した。

秀次は、かまえた。引きがねに指をかけ、

だあーん

とひくと、弾は数十間を飛びわたって、路上を歩いている物売りに命中した。

物売りはひっくりかえった。

「おもしろい」

と、秀次はひさしぶりで刺戟のある遊びを思いついた感じである。

その後、

「櫓で鉄砲猟をする」

と何度かこの「遊び」をやったため、猟の獲物にされる市民は、けんのんがって、聚楽第のそばによりつかなくなった。

そのほか、すさまじい噂が多い。妊婦の腹を裂いて胎児を見た、といううわさもあるが、千代には信じられない。

（それならば、狂人ではないか）

とおもうのである。

不安定な心の持ちぬしであることは、たしかだった。

「わしは武辺であるぞ」

と自分の勇を自慢する。美貌をことごとしく自慢する女と同様、不必要に自分の勇気を自慢する男は、精神に欠陥がある、と千代はおもっている。

秀次には、武勇などはない。

ないためにむしろ、

「ある」

と称して、しきりと武張った道具をあつめては家来に誇示した。たとえば秀吉の好敵手だった柴田勝家所有の金の纏、華麗豪壮で諸人のあいだに評判だった日根野備中守の唐冠のカブト、自分の家老木村常陸介が所有していた鳥毛の陣羽織、などをあつめ、大いに得意になっている。

（お心がお弱いから不安なのだ）

千代はそう思っていた。

京の市中に取り沙汰されている秀次の暴虐ぶりは、千代が耳をおおいたくなるほどのものである。

ある日のうわさなど、それを侍女から伝えられても、

「ほんとうですか」

とはじめは信じられなかった。

関白秀次が、近臣をつれて夜な夜な、京の町に辻斬りに出ているという。

その事件がおこったのは、北野天神の境内でしかも白昼だったらしい。

秀次ら数人が微行していると、むこうから盲人が杖をひいてきた。古来、暴君という精神病者は、盲人、妊婦、美女、といった常人とは事かわった特徴のある者に興味をもつものらしい。

「そこな阿弥」

と秀次は声をかけた。阿弥、というのは室町ごろから流行しつづけている時宗の信者のことで、みな在家生活のまま名に「阿弥号」をつけて浄土を願っている。相阿弥、本阿弥、木阿弥といったひとの名がそれだ。

頭をまるめた盲人には、こういう阿弥号の者が多いから、秀次はそうよんだのであろう。

「およびなされたのは、どなたじゃ」

「こなたじゃ」

と秀次は、手をたたいた。

「ほい、なんの御用じゃな」

「酒をたべさせようと思うてな。そなたは酒がすきであろう」

「好きじゃ」

「さればこれへ来い」

と秀次は近づき、みずから盲人の手をとってやると、盲人はよろこんでついてきた。

五、六歩行ったあたりで、秀次はいきなり剣をぬいて、その盲人の腕を切った。

「わっ」

と盲人がころがり、わめく。人は居らぬか、われを殺さんとする、人や居らぬか、人や居らぬか、助けてたべ、と叫び、その騒がしさ、かぎりがない。

秀次は、石畳の上で足を踏みならしてそれをおもしろがった。

侍臣に熊谷大膳亮直之という愚物がいる。一万石程度の領主で、この男の近親には豊臣家に仕

えている者が多い。秀吉、秀次の幕下における官僚派の一人といってよかろう。

「盲人よ」

と熊谷は声をかけ、

「不具の上にまたまた不具になって、なお助かりたいとは臆病な男だ」

そうあざわらったから、盲人は、自分の加害者が、いま京洛でうわさの高い殺生関白であるとさとり、

「殺せ」

と叫んだ。

「こうなってはなにが命が惜しいか。悪虐の君に出遭ったことを身の不運とあきらめるわい。ただ思え。いまは虎狼の暴をたくましうしているとはいえ、因果のむくいはかならず汝らの上に加わるぞ」

盲人は、ずたずたに斬りさいなまれて、息が絶えた。

「うそでしょう」

と侍女にいったのは、千代には、その石畳の上に流れている血がありありと見えて、聞くに耐えられなかったのだ。

千代はその日、伊右衛門に、

「もはやいかなることがあっても、関白殿下のもとに参られてはなりませぬ」

とつよくいった。

関白秀次に、同情すべきところが皆無ではない、と千代はおもっている。
もともと、叔父の秀吉が天下をさえ取らなければ、どこかの農村でぐれ歩いているはずの若者が、不幸なことに、人臣としては最高の位である関白になってしまったのだ。精神の平衡がくずれるのは無理もないであろう。
秀次は、鬱病（うつびょう）（神経衰弱）であるらしい。
自分でもそう気付いているのか、医者がそうすすめたのか、東国の熱海（あたみ）温泉などへ、療治に行ったこともある。そう思えば、あわれでなくもない。
もともと、秀次というのは、おとなしい気質の若者で、少年のころはあわれみ深い一面もあり、気も弱く、愚痴っぽいところがあったということを、千代はきいている。
「あのひとの不幸は、身にそわぬ高位につかされたことでございますね」
と、千代は伊右衛門にいった。
「そうかな」
伊右衛門は、千代の唇をみた。
千代は、首をかしげて考えこんでいる。伊右衛門は、期待した。こういう表情をするときの千代は、常人では思いもよらぬことを言おうとしている千代である。
「そのうえに」
と千代はいった。

「関白になりあそばした、といっても、たかだか二十万石のお役料がふえただけでありましょう?」
「そうであった」
秀次のもともとの所領は、尾張を中心にした百万石である。いまもかわらない。これに役料を加えて百二十万石。
そのわずかな石高（関白としては）をもって、秀吉が関白時代にやった豪勢な対朝廷の社交をやらねばならない。
それに、関白とはいえ、天下の軍事権、行政権、大名の人事権、豊臣家の財政、といった四大権限は、依然として「隠居」になったはずの秀吉がにぎっている。
秀吉としては当然なことで、いま外征中であり、国家権力のすべては一手ににぎらねばならぬときだ。凡庸な秀次などに渡すことはゆめにも考えていないであろう。
が、秀次の気持はちがう。
（国を譲りうけたはずだ）
と、考えているはずである。
そう考えているとすれば秀次も哀れで、この男の手にゆだねられている権限は、京都における社交と、寺社方の訴訟権だけである。
とるに足らぬ権能であった。
（約束がちがう）

とむくれざるをえないであろう。

その上、関白で百二十万石となれば、財政は窮迫している。出費ばかりが多いであろう。

となれば。

(国のすべてがほしい)

と思うようになるのが、当然である。

そのように、秀次に対してそそのかす者もある。秀吉から付けられている秀次の家老木村常陸介重茲である。

木村常陸介は、秀吉がむかし近江長浜の城主になったときに仕えた同国の地侍で、その後、機転もきき武辺もあったため、いまでは山城淀城をもらい、十八万余石の大名になっている。

もし将来、秀次の天下になれば、かれはその一の大名としてすさまじい出世をするであろうことが、約束されているような男だ。

(常陸介どのは、利口なお人だ)

千代は、そのことを思った。

「お利口すぎるのも、よろしくございませんね」

と千代はいった。宮仕えに、あまりに気はしの利く頭脳のもちぬしはよくない、という意味である。

「そうだろうな」

伊右衛門は、いきいきとうなずいた。

「わしほどが、ちょうどよい」

「そう」

千代は、噴きだした。

「一豊様のしんしょう（財産）は、律義にましますということでございます。物をたのまれれば必ずおやりなさるし、いらざる人の悪口には口を合わせられませぬし、ひとが御病気だときけば、御自分の食が減るほどご心配なさいます」

(それだけの男だ)

とは千代はおもわない。

それだけでわたくしは満足だ、と千代は思うようになっている。

「ところが」

と千代はいった。

「百才あって一誠足らず、という方がいらっしゃいますね」

ありあまるほどの才気がある。しかし他人のことを真剣に考えるほどの誠がない、――いわゆる「才覚者」のことを千代はいっているのである。

「いる、いる」

と、伊右衛門はいった。みなそれらは、豊臣家の機構が、軍事政権から行政政権に質的に変化してゆくにつれて、伊右衛門のような一介の武辺よりもはるかに出世してしまった。

「一に石田治部少輔三成」

と、伊右衛門はいった。石田三成は、いまや秀吉政権における「官房長官」の位置にあり、秀吉の内政上、人事上の意向はすべて三成を通して行なわれ、諸大名は三成の取りなしをうけねば、秀吉にわずかな願いごともできぬほどになっている。

「二に木村常陸介」

と伊右衛門は、指を二つ折った。

そのとおりであろう。木村常陸介は、関白秀次のほうの官房長官である。

つまり、いま日本に二大官僚がいる。

一人は秀吉付の石田三成、一人は秀次付の木村常陸介。

「さて」

伊右衛門は考えた。

「関白秀次様の世になれば、木村常陸介が日本一の権勢者になる。されば石田三成などは木村のために蹴落されるであろう」

「ええ」

千代は微笑した。どうやら伊右衛門の頭がまわりはじめたようである。

「さればだ、千代」

と、伊右衛門は天井をみた。

「石田三成は、秀次様、常陸介が大きくならぬうちに、さまざまに工作してほろぼしてしまうか

もしれぬな」

碁でいえば、読み、である。この読みがなければ、一政権の下で大名はつとまらない。

「きっとそうなるだろう。すると千代、そのときわしはどうすればよい」

「ホホ……、いつもの一豊様で律義でおすごしあそばしているだけでよく、ゆめゆめそういう才覚者同士の政争に巻きこまれてはなりませぬ。一誠足らずの才覚者は人望がなく、たとえ才智を闘わせてどちらが勝とうと、いずれは憎まれて勝ったほうもほろびます。一豊様は一豊様なりにご自分の場所におすわりあそばしていればいいのでございます」

「ぼんやり、か」

伊右衛門はわれながら自分がおかしいらしく、くすくす笑いだした。

余談だが、秀吉が伏見に城をきずいたのは、これが最初ではない。

数年前の天正末年、通称向島（むこうじま）という地で、本塁は指月山（しげつさん）にあり、宇治川に面していた。いわゆる秀吉構想の建築ではなく、ほんの水寨（すいさい）ほどのものであった。

察するに、秀吉は京・大坂を往復しているから、河港である伏見に特設の船宿を必要としていたからであろう。

この向島城は、この時点の翌々年の慶長元年七月十三日の京都地震のために崩壊している。

いま出来つつある伏見城はそれではなく、伏見山とその北方木幡山（こばたやま）を縄張りとするもので、天守閣の位置（現在の桃山御陵）は標高百メートル、北は大亀谷（おおかめだに）をへだてて深草山に臨み、南は宇治

川をひきまわし、湖のような巨椋の池を一望に見ることができる。

瓦はすべて金箔で包み、天守閣は八層、黄金の巨人が天を背にして立っているようであった。

伏見城の工事中、好奇心のつよい千代は、何度か見物にでかけている。

見物だけではない。

自分の屋敷の建築もしなければならなかった。

すでに本城をとりまく一帯の野が地割りされ、二百余の大小名の屋敷地が予定されている。

千代の夫は、城西の内堀のそばに千坪の屋敷地をたまわっていた。

その工事の進行状態を見にゆくのである。

この三月のはじめの日も出かけた。

「千代、ばかにこんどの屋敷には心をひかれているようだな」

と、その前日、伊右衛門はいった。

「なぜだ」

「というほどのことはございません」

「気になる笑いかたをする。それほど伏見という土地はすきか」

「好きでございますけれど」

「けれど、なんだ」

と伊右衛門は重ねてきいた。

「もう京が、いやになったのでございます」

「京が？」

「早く、千代は伏見に移りとうございます」

「子供だな、まだ。あたらしい土地にすぐ行きたがる」

伊右衛門は、優越感にみちた顔でからかった。

「いいえ」

と千代はいおうとしたが、やめた。理由はべつにあるのだ。

千代は、いずれ、京の関白秀次が謀叛をおこしそうに思えてならない。

すると、伏見の秀吉と京とのあいだに、小競りあいの一つもおこなわれるであろう。

秀次は秀次で当然、諸大名をかきあつめるにちがいない。

人質もとる。

現に、京都の屋敷に妻子をおいている秀次付の大名などは、妻子を聚楽第のなかに抑留されてしまうであろう。

千代がとらわれれば、伊右衛門は秀次方につかざるをえない。

（そうならぬよう、ひとあしさきに伏見へ移ってしまいたい）

千代はそう思って、伏見屋敷の工事をいそがせていた。

秀吉が実子誕生以来、秀次を養子にしたことを後悔し、あわれなほどに苦しんでいることは、千代の耳にさえ入っていた。

「お拾（秀頼）の嫁として、秀次の娘を配しよう」
とも秀吉はいった。秀頼は生後一年にもならぬのに、その老父は、この幼児の将来のためにそんなことを考えている。さらに、
「日本国を四つか五つに割って、その一つを秀次に持たせ、その一つを秀頼にもたせることはどうだろう」
とも側近にもらした。むりもなかった。すべてを「養子秀次にゆずる」ということにしてしまったため、当然天下の継承者たるべき実子秀頼はいまのところ、どういう将来もないのと同然である。
　秀吉は、苦しんでいた。
　そのいわば愚父のくるしみを、当然、秀次は察すべきであろう。
（わたくしならば、さっさと関白職を返上してしまう）
と千代は思うのである。
が、秀次は、その点では不快になるほど無神経な男であった。
けろりとしている。秀吉の苦悩に対して、どういう反応も示さなかった。
（厚顔で強欲なのか）
とおもったが、そうでもない。それ以前に鈍感な男なのである。
（太閤殿下の人として当然な人情を、あの薄あばたの若者は察することができないのか）
と、むしろ千代は、秀次のためにはがゆがった。世に、無神経な男ほどかなわぬものはない。

（いまは）
と千代はおもう。
（太閤殿下も、苦しんでおられる。しかしこの苦しみが秀次様に伝わらず、伝わってもなんの反応も示されなかったならば、逆に殿下は仇敵のごとく秀次様をお憎しみなさることになろう）
　人情というものだ。
　——おれだけが苦しんでいる。秀次は、しれしれと白ばっくれている。
ともなれば、こういう感情は裏返じてはげしい憎悪にかわりかねない。
そのくせ、秀次は、秀吉に対する機嫌とりをさまざまなかたちでやっている。家老の木村常陸介などの秀次側近が、そういう智恵をさずけているのであろう。
（むだな智恵だ）
と千代はおもっている。いまは関白職返上以外に、養父秀吉への親切がないではないか。
もはや、秀吉はこのことに関して弱者の位置にあり、秀次は強者の位置にある。
　——おれがいるかぎり、実子には何も譲れまい。
と面憎く澄ましこんでいるのと同然である。
が、秀次のおろかさは、自分が既得権をもっている強者の位置にいることを知らず、むしろ、弱者であると思ったことであった。
（いつ、養父が自分の関白職を奪うために兵を用いて攻めてくるかもしれない）
という被害妄想ができている。この妄想をかきたてたのは、秀次の側近者であったといえるだ

ろう。

「ご用心なされませ」

という者があったにちがいない。そのため、秀次は狩猟に出かけるときでも、いざ合戦にそなえ、自分と家来の具足をこっそり用意して携行した。そういう妄想の沙汰が秀吉の耳につたわるときは、別な形になる。

「謀叛か」

ということである。

千代が、

（人質にとられるかもしれぬ）

ということを、本気で心配しはじめたのは、五月に入ってからであった。

「もう京都に居たくありませぬ。伏見のお屋敷が、まだあら壁もかわいておりませぬとしても、あちらへ移りたいと思います」

と千代は伊右衛門にせがんだ。

伊右衛門は、それほどの危機感はもっていない。

「千代よ。まだ徳川殿のお世継ぎも京都におられるのだ」

なるほど、家康の嗣子である中納言秀忠は秀次付の聚楽第伺候の家来として京都屋敷にいるのである。

が、千代と伊右衛門は、こののち数年後になって知ったことだが、この時期、徳川家ではさすがに時勢の認識に敏感であった。

家康は、その領国の関東に戻らねばならぬことになり、伏見城にいる秀吉にいとまごいし、五月三日京都の自邸に足をとめた。

そのとき、中納言秀忠をよび、

「あるいは、わが留守中に」

といった。

「太閤殿下と関白秀次公とのあいだにひと戦さがあるかもしれぬ。そなたはそのとき、迷わずに太閤に味方せよ。ただちに京を離れ、大坂にゆき、城内の北政所を守護せよ」

家康は、北政所と親しい。むしろ秀吉よりもその夫人の機嫌を大切としたところに、この男のなみなみならぬ政治感覚をよみとることができる。

理由の第一は、秀吉が北政所を大事にしてその意見をいまなお尊重していること。

理由の第二は、北政所は秀次にとっても養母だから、万一秀次が勝っても、徳川家にとって不利にならない、ということである。家康らしいひとひねりした「読み」というべきであろう。

そのころ、伏見城にいる秀吉は、秀次に対し、

「汝につき、疑念あり」

として、わがもとへ来てじきじきに釈明せよ、と命じた。

が、秀次は動かない。

行けばあるいは城内で殺されるかもしれぬ、と思ったのである。

だけではなく、ひそかに合戦の下準備をととのえはじめた様子であった。

が、ひそかに、である。かれはおそらく家老木村常陸介の智恵であろう、この時期、朝廷におびただしい献金をした。朝廷に白銀三千枚、第一皇子に五百枚、准三后藤原晴子に五百枚、女御藤原前子に五百枚、式部卿智仁親王に三百枚、准三宮聖護院道澄に五百枚。

これは、養父とのあいだに万一のことがあれば朝廷にとりなしを頼むためであろう。

それだけではなく、もし養父秀吉を討つ場合、朝廷から「朝敵」の名目をもらうためであったろうとも臆測される。

この献金のうわさは、京の市中にひろまるのが早かった。

千代は、これをきくや、

「伏見にて保養のため」

という旨を聚楽第に届け捨てにし、許可をも得ず夜陰、ひそかに京をぬけ出た。

伏見へは三里。

竹田街道をとろうとしたとき、大仏のそばの番所の士が、

「何者か」

と、千代の女乗物をとめ、槍をきらめかせて寄ってきた。

大仏前の番士の物頭が、

「いずれの人数で、いずかたへ参るか」

と、千代の行列の先頭に声をかけた。先頭には、粧いをこらした侍女がいる。

「そういうそなたたちは、何れの御家来でありますか」

と落ちついてききかえした。

番士の物頭が、「関白秀次の御奉行熊谷大膳亮の家来で何某である」と答えると、侍女は、

「そうですか」

とうなずいたきり、なにも答えず、そのまま行列をやろうとした。

「役目によってお伺いしておる」と番士がいった。「お答えなきときは、うろんの者と見て、当方にも出方がありますぞ」

「紋所でわかりませぬか」

乗物に、金の三ツ葉柏の紋が打ってある。

「山内対馬守様の御紋でありますな。女乗物であるところをみると、どうやら御内室様であるらしい。念のために、路上、御引戸をおあけねがって、お声を頂戴したい」

顔をたしかめようというのである。

「御無用なことです」

と侍女が、おそれ気もなくいった。

「お女中」

「なんでございます」

「無用なことは何事だ。われらを何と心得る。さきほどからの応答、態度、無礼であろう」
「乗物のお引戸をあけろ、と申されるのは無用だと申しあげたまでで、無礼などは働いておりませぬ」
「お女中、名を申せっ」
ついに物頭が、大声を発した。
「山内対馬守の妻女にて」
と、侍女が微笑した。
「千代と申します」
侍女か、と思えばそうではなく、千代は乗物をおりて徒歩であるいていたにすぎないのである。
(あっ)
と番士たちはひるんだ。
「たとえ」
と千代はいった。
「女行列なりとも、それを止めた上、左様な暴言をお吐きなされるとあれば、山内家の武勇をおはずかしめなされたるものと心得てよろしうございますか。御返答の次第では、ゆるしませぬぞ」
凜(りん)としていった。
番士はあまりの意外さにひるみ、みじめなほどにした手に出、ついつい行列を通してしまった。

二丁ばかり行って、千代は乗物の中の人になり、
「急ぎや」
と命じた。
みな千代の機智と勇気に舌をまいてしまった。
夜半、伏見の屋敷に入り、夫の伊右衛門と対面した。
「ぶじでよかった」
と伊右衛門は、自分が番所をきりぬけてきたように大きく吐息をついた。
「おもしろかった」
千代は茶目っぽく笑い、
「もしものことがあれば、供まわりの侍、侍女たちを下知(げち)して斬って散らすつもりでございましたのに」
「冗談ではない。そなたにそんな力があるものか」
そのとおりであった。千代は全くの非力で、薙刀を十ぺんもふりまわせば息がきれてしまうほうなのである。
千代の勘があたった。
彼女が京から伏見へ逃げるようにして移ってほどもないころ、京の徳川家の屋敷に関白秀次の使者がたずねてきた。

朝、とはいえまだ暗い。まるで寝込みを襲うような刻限に使者が来る、というのは異様であった。

「なにごとでござりまするか」

と、京都屋敷詰めの年寄土井利勝（のち下総古河十六万石）が応対に出た。

「関白殿下のおおせでござる」

と、使者は上座からいった。利勝は平伏している。

「当家御嫡男中納言秀忠殿、即刻、聚楽第にお渡りありますように」

というのだ。

使者の口上では、聚楽第に屋敷を用意している、御歓待申しあげるゆえ、当分、関白秀次様のお話相手をつとめてもらいたい、ということだが、要は、

「人質」

である。

（来たな）

と利勝は機敏に察した。

（関白秀次様は、ご謀叛を企てておわす）

ともおもった。いったん合戦のみぎりは、家康をわが陣営に引きよせんがために、嫡子秀忠を人質にしようというのであろう。

（やることがいかにも底意が知れて、子供じみている）

老巧な徳川家がその手に乗るはずがない。

「されば」

利勝はいった。

「まだ夜は明けておりませず、中納言様（秀忠）は寝所におわしまする。日がのぼってから御旨をご披露つかまつるゆえ、いったんはお引き取りねがえませぬか」

「左様か」

それ以上、押すすべもない。聚楽第からの使者は帰ってしまった。

そのあと、利勝は、当屋敷の長老大久保忠隣に相談した。

「京を逃げ出そう」

と大久保はとっさにいった。

それしか、策はない。ぐずぐずしていては兵をさしむけられるかもしれない。京都屋敷には人数もすくなく、防戦することもできないし、また防戦すべきことではなかった。

相手は、関白なのである。

「議論も策も考える必要はない。いまは秀忠様をまもって京を逃げだし、伏見へたどりつくことのみを考えるべきだ」

屋敷中は、ひっくりかえるようなさわぎになった。

「道はどうとる。間道（竹田街道）がよいか、それとも大路がよいか」

と大久保は土井利勝の意見をきくと、利勝はすでに覚悟をきめ、

「大路がよい」
といった。間道ならば人目につきにくいが、もし追手がきて討ちとられでもした場合、「徳川殿のご嫡子は間道をつたって逃げのびる途中で殺された」という風評が立ち、いかにも体裁がわるい。おなじ討ち取られるにしても堂々と大路を引きあげている途中ならば、家名に傷がつかぬ、というのである。

されば、というので夜明けを待たず、利勝ら七人は秀忠を守って屋敷をぬけ出、かろうじて伏見城下についた。

千代の脱出、徳川秀忠の脱出は、関白秀次をめぐる緊張した空気を、いやが上にも高めた。

「さすがは。——」
と、伏見城の太閤秀吉は、京を脱出してきた千代と徳川秀忠をほめた。
「山内対馬守（伊右衛門）の奥は、評判の才女だけある。ひきつづき才覚よく脱け出た中納言もまた、徳川殿の子じゃ」

情勢を見て身を処すのに機敏である、というのであろう。

京からの脱出者をほめるだけに、秀吉の眼にもはや養子秀次は、敵として映っている。

「聚楽第は敵城」
であった。いずれ近いうちに京と伏見のあいだに戦端がひらかれる、といううわさは、市民のあいだにまでひろまり、家財を荷車に積んで逃げる用意をしている者も多い。

情勢がここまで悪化してしまった罪は、一にも二にも、関白秀次の無能暗愚にある。

「ばかなお人だ」
と、平素無口な伊右衛門まで千代の前でののしった。
「太閤に御実子ができた以上、御実子の成長とともに愛情が高まるのは当然。愛情の高まりとともに養嗣子秀次様への憎悪がますます加わるのは人情というものだ。わしが秀次様ならさっさと後継者の資格をお返し申しあげるだろう」
「でも秀次様もお可哀そうでございますね」
と千代は、女だけに、ちかごろの情勢をみて同情者の側にまわっている。

なるほど秀次は、暴虐者であり、淫楽の徒である。しかしそういう気分におちこんでしまったのも、多分に肉親の秀吉の冷たさにすねてのことだろう、と千代は見るのである。

「しかし、時機がわるい。いまは朝鮮ノ陣の真っ最中ではないか。太閤殿下みずから肥前の名護屋城にも在陣され、かつ、多くの諸侯、士卒が異境で艱難（かんなん）している。そのときに京都であぁまで淫楽の生活を送ってよいものかどうか」
と伊右衛門はいった。べつに伊右衛門の意見ではなく、伏見城内を支配している一般の秀次観である。

秀吉もむろん、そう見ていた。その理由でも憎しみを深めている。

（おろかなお人だ）
と千代は秀次をおもうのだ。太閤秀吉のために征伐の口実をせっせと作っているようなもので

はないか。秀吉にすれば天下を納得させる口実さえあれば秀次をほろぼしてしまいたいのだ。ほろぼして、幼い秀頼の将来のわざわいをのぞいておきたいのである。

（秀次様は、人情の機微がわからぬ）

墓穴を掘る、というが、秀次はそういううわさのなかで狩猟などに行くときにはかならず供の者に甲冑を用意させ、それらを荷駄のなかに忍ばせておいた。

秀次にすれば、伏見の秀吉の命によって襲ってくるかもしれぬ不意の襲撃部隊に備えているのだが、これも「謀叛」のいわば証拠をつくることになった。

この間、秀吉は石田三成、増田長盛らの詰問使を秀次のもとに送ったりしているが、事態はなお好転しない。

ところで、秀吉はある決意をしたのであろう。秀次に対し、「とにもかくにも伏見城へ来よ。面談しよう」という旨を申し送ることにした。

その使者に、なんと伊右衛門がえらばれてしまったのである。

（大変な使者だ）

詰問使は、伊右衛門だけではない。

遠州浜松十二万石の堀尾吉晴が団長というべき格である。つぎに五奉行の一人前田玄以、さらに五大老に準ずる宮部継潤（けいじゅん）、それに駿府十七万五千石の中村一氏、最後に「山内対馬守一豊」である伊右衛門、といった五人である。

と伊右衛門はおもった。

殺されるかもしれぬ、ということである。

ひらたくいえばこの使者は、殺生関白の秀次に、

「伏見城まで出てこい」

と告げる役であった。

秀次は当然、

（出てゆけば殺される。出てゆかねばそれを口実に軍勢を差しむけられる。どちらにしても絶体絶命である）

とおもうであろう。

秀次にとって、思いうかぶ活路は、いっそ伏見城の太閤にむかって戦端をひらく、ということしかない。

（そうなれば。――）

と伊右衛門はおもうのである。

（詰問使は、軍陣の血祭りとして十に八つまでは斬られるだろう）

この命令を、伏見城で秀吉からじきじき受けたとき、伊右衛門は極度に緊張した。

むりもなかった。下命者の秀吉自身でさえ、顔をこわばらせているのである。

一同退出したあと、秀吉は、前田玄以をもって団長格の堀尾吉晴をもう一度呼びにやらせ、堀尾がふたたび御前に進み出ると、

「茂助」
と秀吉はいった。
「もし秀次が来なかったならばどうするか」
心もとなかったにちがいない。もはや英雄時代の秀吉の影はうせて、愚痴っぽい老人がそこにいるだけである。
「お心を安んぜられ候え。そのときには、よきに計らい申しまする」
と堀尾吉晴は平伏した。「よきに計らう」とは、よきに計らい、躍りこんで秀次を刺殺してしまう、という意味であるらしい。むろん刺したあとは、秀次の家来によって、殺されてしまうであろう。
秀吉はそうと察して、はらはらと涙をこぼし、
「かつてそなたは、わしに命を二度までくれた。こんどで三度くれることになるのか」
伊右衛門は、帰宅した。
「聚楽第へゆく。千代、支度をしてくれ」
といったから、千代がおどろいてわけをきくと、右の次第だという。
「名誉に存じまする」
千代はそういうしかなかった。伊右衛門という男の唯一の取り柄ともいうべき律義さ、物堅さ、まっ正直さが、秀吉のめがねにかなってこのような人選になったのであろう。
「千代、多くの戦場でさいわいにも生き残って、こんにち遠州掛川六万石の大名にまでなれた。おもえばはかないことであった」

「左様な。……」
千代はあやうく涙が出そうになったが、懸命にこらえ、微笑をした。
「ことを申されるものではございませぬ。一豊様に万一のことがあれば、千代も生きてはおりませぬ。万が一のときは、立派にお振舞あそばされて、後世に恥を残されますな」
「心得ている」
千代は、伊右衛門を送りだした。供ぞろえして出てゆく夫の姿が、どことなく影が薄いようにおもわれた。
五人の詰問使は、聚楽第に入った。
書院に通された。
ところが、なかなか秀次は出てこないのである。
「われら使者とはいえ」
と、堀尾吉晴は、横の伊右衛門に低い声でささやいた。
「太閤殿下も同然。それをお待たせなさるとは、関白様もあるいはご謀叛ご決意かもしれぬ」
「左様」
伊右衛門は、仏頂面(ぶっちょうづら)でうなずいた。心中、おだやかではない。そうとなればこの場で斬り死せねばならなくなる。
この堀尾の心配は、なかばあたっていた。

秀次は、私室にいる。

私室へ、至急の拝謁をねがい出た家臣吉田修理亮好寛と会っていたのである。

吉田は、かつては徳川家康の家来だったが、去って秀吉に仕え、ついで秀次に仕えた。合戦上手の侍大将だが激情家で、情がこうじてくると物狂いのようになる。

余談だが、秀次滅亡後は豊臣家を去り、徳川家にもどって結城秀康につかえ、一万四千石を食んだ。

大坂ノ陣で東軍に属し、夏ノ陣のときに軍令違反で叱られ、翌日天満川に溺死体となってうかんでいたため、投身自殺をしたともいわれ、敗敵追撃中に馬もろともに河中に落ちたともいわれる。

その吉田修理亮が。

ちょうど摂津の芥川の土手を築く工事を監督していたが、伏見から五人の詰問使が発ったとき、工事現場から馬に乗り、むちをあげて駈けどおしに駈けて京に入り、聚楽第で至急の拝謁を乞うたわけである。

「伏見城へは参られますな」

と、吉田は顔を真赤にしてとめた。

「殺されるだけのことでござる」

「いや」

秀次には定見がない。

「そうではない、というが」

「人間、だまさるる者を愚者と申す。愚者の名を世間におひろめなさるが男か、謀叛人の名をお残しなさるのが男か、上様はどちらをお選びなされますぞ」

「わからぬ」

「馬鹿な。鎌倉のむかし、忠臣畠山重忠でさえ謀叛人とよばれるを男の名誉としてよろこんだ。上様、位は関白におすすみなされようとも武士ではござりませぬか。武士ならばとるべき道は一つでござる。ご謀叛、ご謀叛あそばされよ、それがしにたったいまお命じなされ、たったひとこと」

と吉田修理亮はつめよった。

「でよろしうござる。征け、と。さればそれがし、この聚楽第の人数、京都屋敷のめんめんの人数を一刻のうちに狩りもよおし、一万の人数をつくりあげ、それをもって怒濤疾風のごとく伏見城に押しよせ、恐れながら太閤殿下のおしるし（首）を頂戴つかまつって参りまする。ご決意、いかに」

「いや」

「ご面倒な。さればご思案はあとにして、とりあえず書院にお待たせなされておる五人の大名の首を刎ねなされ。それがしつかまつろうず」

と立ちあがったから、秀次のほうが青くなった。

「修理、待て」

ふるえている。この幸運児は、一生のうちで、これほどの決意をうながされるときがあろうとは思ってもいなかった。

関白秀次は、結局、吉田修理亮の「即刻蹶起」のすすめをしりぞけた。

男ではない。

と当時、一部でささやかれた。こういうときに善悪はべつとして即刻さわやかに行動できる者だけが、この当時、男という美称をうけたものである。

結局、秀次は、五人の詰問使に対面した。

「待たせた」

と、上座にのぞむと、伊右衛門らは平伏した。

堀尾吉晴が、代表として言上。

秀次は、蒼っ白になって聴いている。堀尾も死を決しているだけに、言々迫力があり、秀次を見すえたまま、視線を離さない。

「わかった」

と、秀次の声がかすれた。

「参る。しかし支度もあるゆえ、数日猶予してもらいたい」

「いや、それはかえって太閤殿下の御機嫌をそこなうことになりましょう。参れ、と申されば即刻参る、ということでなければ、人は可愛らしさがござりませぬ」

「即刻か」

秀次は、眼を空に走らせた。焦点が散ってなんとも性根の軽い顔である。

「即刻か」

とかさねた。

「左様。そのほうがよいかと存じまする」

「即刻か」

「左様でござりまする」

「………」

うなだれた。

「さ、われわれ五人がお供つかまつります。日も暮れましょうほどに、はやばやとお発ちくださりまするように」

「即刻か」

なおもつぶやいたとき、伊右衛門はこの若者があわれになってきた。

(千代のいうとおり、この若者は、太閤殿下を肉親にもつということさえなければ、どこぞの村のはずれで田の一枚でも作り、なにごともない生涯を送れたものを)

とおもうと、そう思えば権力社会ほどうとましいものはないと思い、気持が一時に老いこむような気がした。おもわず、

「殿下」

と、顔をあげた。

あとはなにをいっていいか、にわかに詰まってしまった。

「対馬守か」

「左様にござりまする。お供つかまつりまするゆえ、支度はゆるりと」

「これ、対州」

と、堀尾吉晴は低声でいった。

「申しあげるのは、拙者ひとりのほうがすじが通ってよい。貴殿はお静かにおひかえありますように」

堀尾がいったのもむりはなかろう。ゆるりと支度をされては、秀次の気持も変わるかもしれないし、家臣がどう騒ぐかもわからない。

(こまった昼行燈どのだ)

と堀尾吉晴はおもったであろう。平素ならその昼行燈こそ、もつれの複雑な権力社会のなかでの伊右衛門の魅力なのだが。

「さ、お早く」

と、堀尾は秀次をせきたてた。

秀次は、伏見へゆくことに決した。

一方、伏見では。

城内は大さわぎであった。

その夜、伏見城下では、

「関白様、ご謀叛」

という流説がながれ、市民を戦慄させた。

「合戦じゃ」

というのである。気の早い、避難民の荷車が街路をごったがえし、たいへんなさわぎだった。

山内家の伏見屋敷では、千代はひとりで仏間ですわっている。この部屋のみは、静かでよい。

(まだか)

と伊右衛門の帰りを待っている。関白様ご謀叛という町家のうわさは、まさかと思い信じなかったが、それでも、

(あるいは町家のほうが、うわさが早いのかもしれぬ)

とおもい、不安でならなかった。京の秀次が謀叛したとあれば、使者に行った伊右衛門はもう永久に千代のもとに帰ってこないであろう。

(どうなのかしら)

千代は考えている。

そこへ城下の様子を見に行った侍女がもどってきて、混乱ぶりを報告した。

「あわてて、子をさかさに背負って逃げだしたひともいた、とききました」

「そうですか」

千代も、声をたてて笑ってやった。笑わなければ、報告者のせっかくの努力に対し気の毒だとおもったのである。

そのころ、秀次と詰問使の一行は伏見へむかいつつあった。

秀次は、三人の男の子、および小姓など十人ほどといった人数だが、五人の詰問使の家来衆をふくめると百人以上になる。

それが、松明を手に手にかざして南下するものだから、沿道の町家の者が、

(すわ、軍勢)

とみたのもむりはない。

夜半、伏見につき、秀次は城中からの案内者に先導されるまま、木下大膳亮の屋敷に入った。

その夜は、そこを宿所とした。

伊右衛門ら五人の詰問使は、夜分ながらそのまま登城し、秀吉に報告した。秀吉は、

「そうか」

といったきりで、いつもの多弁なこの男にはめずらしく言葉少なだった。

「このあと、いかが仕りましょうや」

と堀尾吉晴がいうと、

「そのほうらは、さがって寝(やす)め。あとのことはいますこし考えたい」

秀吉は、いった。灯影のせいか、ひどくやつれてみえた。

伊右衛門は、屋敷にもどった。

千代とふたりっきりになったとき、この行儀のよい男が、体をかがめて膝を抱いた。

「疲れた」

と、顔をあげない。たれがみても、この姿は六万石の大名とは思わないだろう。

「千代、疲れた」

「お酒を温めましょうか」

「なにも、ほしくない。関白様はどうやら、無事では済むまい。伏見まで御先導申しあげてきたわしは、地獄の邏卒(らそつ)をつとめた結果になるかもしれぬ」

「……」

夫婦で、だまった。

千代も伊右衛門も、秀次に対してひそかに嫌悪の気をもっていたが、さてこういう結果になると、おろかな人情にもどった。

千代は泣きだした。

人の運命ほど、はかりがたいものはない。

千代も、その屋敷を知っている。

関白秀次が伏見城下で宿にした木下大膳亮吉隆の屋敷は、ひどくせまい。

だけでなく低湿地で、南側が大きな雑木の森になっており、陽あたりがひどくわるい。

(あのような陰気なお部屋でおとまりというのは、どういうことであろう)

と千代も身のうちが寒くなるおもいであった。

木下大膳亮は、豊後で三万石を拝領している大名で、かねて秀次と昵懇し、このあとほどなく「秀次に謀叛をすすめた」ということで罪を得、薩摩の島津家にあずけられ、切腹させられている。

さて翌朝、秀次は登城する支度をしていると、秀吉から使者がきて、

「このまま、高野山に行き、ご謹慎なされまするように」

といった。

秀次には、意外であった。「会っていろいろ話したいから伏見城へ来い」と秀吉がいってきたればこそここまで来たのではないか。

「墨染の御衣も支度してありまする」

と使者がいった。

頭を剃れ、という意味であろう。

それをきいて、秀次はどちらかといえばほっとした。最悪の場合、賜死か、と思い、おびえつつ伏見まできたのに、法体になれというのなら、おそらく命だけはたすけてくれるつもりであろう、と思った。

「うけたまわりました、と伝えよ」

と秀次は、僧をよんで頭を剃らせた。供をしてきた連中も、みな髪をおろし、いっせいに僧形となった。

その日のうちに、伏見を発っている。

秀次は、高野山へのぼり、配所として指定された青巌寺に入った。それを追っかけるようにして、福島正則を正使とする秀吉の使者がのぼっている。

「御腹を召され候え」

との意を伝えるがためであった。福島正則らは検視をも兼ねて山にのぼった。この秀吉の処置は、高野山の一山僧侶、行人にとって衝撃をあたえたらしい。

「お痛わしすぎる」

というのであった。

かれらには、政治はわからない。わかる必要もなかった。人情論だけあればよかった。さっそく、金堂で会議をひらいた。

「当山は俗権不入の地である。それをたてに、太閤殿下へ御助命のこと、一山の意見をもって嘆願してみよう」

という硬論がはじめ堂を圧するばかりに出たが、結局「太閤殿下の意にそむいて、一山滅亡になってはかなわぬ」という長老木食上人の政治的意見が結論になった。この上人は秀吉の取り立てで一山の長老になった人物で、僧としては政治感覚がするどすぎる男であった。

ついに、秀次は自刃せしめられた。

その先導として、近臣の山本主殿、山田三十郎、不破万作がまず腹を切った。秀次はみずから介錯してやっている。

ついで、秀次に従ってきた東福寺の隆西堂が僧侶ながらも腹を切り、五番目に秀次が腹を切った。

その首を福島正則がもって下山し、伏見に至って秀吉の見参に入れたところ、秀吉は涙をこぼし、

「木食上人は、あえなくも切腹させてしまったか」

とつぶやいた。

自分が、秀次を殺すという異常事をやっておきながらその死をみて落涙している。晩年の秀吉には、こういう感情の起伏がはなはだしい。

晩年の秀吉のすさまじさは、秀次を高野山に追いあげて切腹させただけではない。

女の千代が、耳をおおって、さけびあげたいほどのことを、秀吉はやりはじめた。

秀吉は、秀次の妻妾三十余人を捕えしめて徳永寿昌の京都屋敷に監禁させた。

「女まで罪はあるまいに」

と、伊右衛門が白っぽい表情でつぶやいたのが、千代には印象的だった。

秀吉は、その女どもを、徳永寿昌の居城である丹波亀山城に移させしめた。

かとおもうと、ほどなく京の徳永屋敷に連れもどさしている。

そのころには、京、伏見には流説がうずまき、

——みな、殺されておしまいなさる。

といううわさが高かった。

(まさか)

と千代はおもったが、秀次が切腹して十日ほど経ったころ、京の三条河原に異様な工事がおこなわれているときいて、千代はおどろいた。

夫の伊右衛門にきくと、

「ほんとうだ」

と、にがい顔でいった。

「千代、申すもおそれあることながら、太閤殿の天下も長くはあるまいな」

当時、鴨川はいまよりはるかに川幅がひろく、とくに三条のあたりは河原が野のようにひろがっている。

そこへ二十間四方の堀が掘られ、堀のふちには鹿垣(ししがき)を結いまわし、さらに橋のやや南側に大きな土塚がきずきあげられた。

秀次の妻妾、といっても、ほとんどが由緒ある家の出である。

第一夫人は、池田勝入斎の娘で、池田家は当主輝政が侍従の官位をもち、十五万二千石の大身である。

それとならんでやはり正室とされているのは公卿の菊亭大納言晴季の娘で、一ノ台とよばれる婦人であった。

側室にしても、出羽侍従とよばれる奥州の名家最上家の出で、一姫とよばれる婦人をはじめと

して、大名、小名の娘が多い。
（彼女らに何の罪があるのか）
と千代はおもうのである。
なるほど、秀次はその淫乱、暴虐さ、まれにみるほどの男だったが、それに謀叛の罪があるとすれば、かれ一人の死だけでよい。
その子が、もし成人したときに秀頼の政権をおびやかすというならば、武家の作法によって男児の命のみ断てばよい。
（太閤は、お狂いなされたか）
処刑は、八月二日。
その前日に千代は侍女十人を町家のいでたちによそおわせて、京へ見にやらせた。
「いやな役目でありましょうけど」
と千代は彼女らにいいふくめた。
「町家の者のささやき声、言葉、それに顔の気色なども、よくみてきてください」
それをもって千代は、世の行くすえを判断しようとした。
「御台所様（みだいどころさま）はおいでなされませぬか」
と老女がからかったが、いかに好奇心のつよい千代でも、そういう見物だけはしたくなかった。
「思うだけで血がこごえてしまいます」
と千代はいった。

その前日、伏見の町家なども、数百人の者が組をなして処刑の見分に出かけたといううわさを千代はきいた。
（他人の不幸ほど、おもしろい見物はないのかもしれない）
人間の残酷さを、千代はおもった。

その日、早朝、秀次の妻妾および子ら三十余人は、徳永屋敷からひきだされた。
荷車に積んだ。
一台に二、三人ずつ積んだから、十台ばかりが都大路を東にむかって曳かれた。
「秀次公の御首を拝ませる」
というのが、役人どもの口上であった。
曳く者は、武士ではない。
雑兵具足をつけた雑人である。手に手に長柄、棒などをもっている。
妻妾の群れのうち、二十九人がその前日に辞世をよんだというから、すでに殺されることは知らされていたのであろう。
沿道、ぎっしりと見物衆が人垣をつくった。あわれと思う者が多いのか、念仏の声がどよめくようであった。
三条河原についた。
なるほど橋の南側に山が築かれ、その上にむざんにも秀次の首が、西をむいて置かれている。

「あれが、姫の御父君です」

と、お辰ノ方といわれた側室が、その娘に気丈にいったのを、人々は耳にした。

雑人が追いたて追いたてして、一同にその首の前にひざまずかせ、伏しおがませた。

虐殺は、そのときからはじまった。

まず、子から殺された。母親のそばを離れず袖にしがみついている幼児を雑人がひきはなし、その母親の前で二太刀ずつ刺し、死骸を大穴へほうりこんだ。

お辰ノ方の娘は、三歳になる。その惨状をみて母親にすがりつき、

「我をも害し侍(はべ)るか」

という意味のことをいとけなく訊いたとき、お辰ノ方はその髪をなで、

「ひたすらにお念仏を唱えていなさい。いまから御父君にお会いにゆくのですから」

とさとした。その声も終わらぬうちに雑人があらわれ、

「左様になげき遊ばしても詮なきことでおじゃる」

とひきはなし、姫の胸を白刃で突きとおした。姫が息絶えたころ、母の首も河原の砂の上に落ちている。

刑吏は、白刃をふるい、叫喚する女人の群れのなかを駈けまわっては刺し殺し、まだ温かい屍を穴のなかにほうりこんだ。

鮮血が流れ、瀬が真っ赤になって血を溶かしつつながれた。

地獄とはこうか、と京の者は戦慄した。

虐殺がおわると、刑吏たちは穴を埋めはじめ、たちまち盛土ができあがった。

昼の陽が、盛土に灼(や)りついた。

「作業」がおわってみると、たったいまあれだけの婦人や子供が泣きわめいた情景が、まるでうそのようにおもわれる。

盛土が、声もなく静まっている。

その盛土を、いま一つの盛土の上の秀次の首が、憮然とながめていた。そのそばを、鴨川が陽にきらめきつつ流れている。

「無残やな」

みな、念仏のほかに声もなかった。

この塚のよび名を、秀吉がそうよべと命じたのかどうか、

「畜生塚」

とよばれた。

罪もない女人(にょにん)たちが、死してもなお畜生とよばれねばならぬというのは、どういうわけなのであろう。

「かかる世は、滅びよかし」

と思った京の者が多かったであろう。

その夜、辻々に捨て札をした者がある。

「天下は、天下の天下なり」
とこの捨て札はいう。天下は秀吉個人の私物ではないというのだ。
「関白家の罪は、関白家の例を引きて行はるべきこと、もつとも理の正当なるべきに」
と、つづく。関白を処罰するのに、それの法がある、というのである。
「平人の妻子などのやうに、今日の狼藉、はなはだもつて自由なり。行くすゑめでたかるべき政道にあらず。ああ、因果のほど、御用心候へ」
その末尾に、歌が一首。
「世の中は、不昧(ふまい)因果の小車(おぐるま)や、善し悪しともにめぐりはてぬる」
やがては因果がめぐって悪いことがおこるであろう、という豊臣政権への呪いの歌である。たれが書いたのかはわからない。が、あの虐殺のむごい光景をみた者なら、百人が百人この実感をもったであろう。
京から帰ってきた侍女たちの報告をきいたとき、千代の血は逆流した。怒りであった。
(これが、政道か)
と叫びだしたい衝動をおさえかねた。その夜、伊右衛門に、
「豊臣家はほろびますね」
と声をふるわせていった。
秀次とその妻子を死んでもなお「畜生」とよばせる反面、伏見城内では実子秀頼が豪奢そのも

のの装置で成長してゆき、その生母の淀殿は威福ならびもない。
その対照の妙。
(天はそれをゆるすのか)
と千代の血はさわぐのである。
「それを」というのは、秀吉の暴慢である。
一人の独裁者の、その実子が可愛いという感情も、もはやこうなれば人間的とほほえんではいられなかった。
その愛が、他に対しては鬼畜のような行為をさせるのである。
(行くすえ、めでたからず)
と千代も、捨て札のぬしとおなじことを叫びたかった。
秀吉は、たしかに英雄であった。長浜城主であったころの秀吉を、千代はなつかしく回想した。おもえば、本能寺ノ変の直後、中国路から軍を旋回させて山城の山崎で明智光秀の大軍を討ったころまでの秀吉は、英気溌剌として五体に清涼の気が満ちているようであった。
天下をとり、その座にすわり、座にすわることが永くなり、上は天子から下は庶人まで秀吉の意にさからう者がいなくなれば、こうも人変りしてしまうものか、と千代はふしぎでならない。
「おそらく」
千代はいった。
「いまの若君がご成人あそばしたところで天下をお持ちあそばしますまい。天下というものは、

一人の人間が取るのではなく、人々と時勢が取らせるものなのです。あの若君には、ついに天下はめぐりますまい」

「そうであろうな」

伊右衛門は、実感をこめてうなずいた。この男はこの男なりに、わが子可愛さに物狂いしている奇妙な政権に、批判というよりももっと感情的な嫌悪をもちはじめている。

「遠からず、世がかわるかもしれぬ」

ひどく乾いた表情でいった。この事件以後、すくなくとも豊臣家二代目の秀頼への愛情など、大半の大名の心から消えてしまったといえる。

家康は、狡猾（こうかつ）といえばこれほど狡猾な男はないであろう。

智恵がある。

「関白殿もながくあるまい」

と早くからみていたようである。秀次が関白になってから、諸大名が、「つぎの天下はこの人ぞ」とあらそって秀次の門に馬をつないだなかで、家康のみは超然としていた。

家康の心中、推しはかるすべもないが、かれはつねに秀吉の寿命を凝視している。秀吉がもし死ねば天下を横抱えにかかえこんでしまおうと考えていたはずである。

もし関白秀次が、死なずに秀吉の没後天下を継承したとしても、愚か者の秀次はどのみち、家康に打ち殺されたであろう。

その家康が、一芝居打った。

秀次の死後、「豊臣政界」は混乱した。なぜならば、秀次に機嫌をとり結ぼうとしてさまざまの縁ができた大名が多い。

ところが、その秀次が謀叛人となり、妻妾やこどもが殺され、かつ、秀次の重臣たちがかれに謀叛をすすめたという疑いで刑死したあと、そういう有縁（うえん）の大名たちにも、

「御謀叛加担」

という疑いがかかったのである。

たとえば、秀次は諸大名を引きつけるためによく金を貸した。

細川忠興なども、黄金二百枚を借りたくちである。

忠興は、秀次の政治的失陥をきいてきもをつぶし、その黄金を返済しておかないと秀吉からどんな罰をうけるかはかり知れないとおもい、その黄金の工面に奔走した。

が、京、伏見のどの大名屋敷を訪ねさせても、それだけの大金がない。

暗然としたが、もしや、と思い、家康のもとにゆくと、家康はお安いご用でござる、と侍臣に命じて、

「何番目の鎧（よろい）びつをあけよ」

といった。家康は節約家で、そういうまとまった金はいつも準備している。

「いつお返しくだされても結構です」

と、家康は忠興にわたした。

忠興は感動し、

「この御恩はわすれませぬ。いつか、ご当家のためにお役に立ちたいと存じまする」

と平身低頭した。

忠興は、事実、関ヶ原前夜に、家康のために豊臣恩顧の諸将の抱きこみに暗躍し、家康に天下をとらせることをもって恩を返した。

その他、秀次にその娘を献じていた最上義光も、切腹、領国召しあげといううわさが高かったが家康の取りなしでたすかり、浅野幸長も濡れぎぬをきせられていたが、家康のためにたすかっている。

家康は、一見、超然としつつも諸将のあいだに巧みに恩を売っていた。かれを天下取りの座にのしあげた関ヶ原の役は、このときからはじまっていたというべきであろう。

千代の山内家は、さいわい、千代の先見によってこの難からまぬがれている。

「千代、そなたのおかげだ」

と、伊右衛門は、あやうく虎口を通りぬけたような、ひどく安堵した表情でいった。

「いいえ、一豊様のお力でございましょう。亡き関白様をあれほどおきらいなされていたことが、よかったのでございます」

「いやいや」

このたびほど伊右衛門は千代をありがたいとおもったことはなかった。

文春文庫

功名が辻（二）（こうみようがつじ）

定価はカバーに表示してあります

1976年3月25日 第1刷
2001年9月15日 第51刷

著者 司馬遼太郎（しばりようたろう）
発行者 白川浩司
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫 http://www.bunshunplaza.com
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN4-16-710518-7